

對して何の利害をも感ぜぬもののやうに冷かに傍觀してゐた。殊に驚いたのは、初めから一言もこの事件の話をしなかつたことである。何とか言ひ出さなければならぬ筈だがと、然う私は何時も思つてゐた。ブレンネル夫人の方が其から見ると決して沈著いてはゐなかつた。非常に激して、頻りにそはそはと氣を揉む風が見えた。そして私に、コンチ公が將に墜ちかからうとする迫害を他に轉じさせる運動を怠りなくして呉れてゐるといふことを證言した。彼女は此の迫害を現在の國情から來るものと想つてゐるのであつた。即ち議會が一寸でも緩慢な態度を見せると、エスイタ派がそれに乘じて宗教に冷淡だといふ攻撃を向けて來るから、議會としては然ういふ空隙を拵へることが出來ないので、といふ彼女の意見であつた。けれども夫人は、コンチ公や自分の盡力も、到底それ程に效果のあるものとは思つてゐなかつたらしい。彼女の話は、私を慰めるとよりは警戒を與へる方に近かつた。成るべく此の國を立ち去るが可からうと言ふ。それには英吉利といふ處がある。其處へ行けば彼女の友人は澤山居る中にも世に知られたヒ、ウムなどは、久しい前からの知音だが、奈何だと言ふ。それでも動かうともせぬのを

見て、種々に手を替へて搖るやうにした。若し捕まつて審問でも受ける日になつたら、勢ひリクサンブウル夫人の名も出さなければなるまい。其の夫人に迷惑を懸けるやうな事があつては、今迄の恩義に對して何と申し譯をする積りかと斬り込んで來た。私は、然ういふ場合にも、リクサンブウル夫人は安全で居られる。夫人を陥れるやうなことは誓つてせぬから、と答へた。彼女が言ふに、それは決心だけは然う出來ても、實際に、その通り爲て見せるといふ事は、難しいものだと言ふ。全くこれは彼女の言ふのが道理であつた。殊更私といふ者は、法廷に出て、眞實を自白すれば、身が危いやうな場合に立つても、決して虚偽の申し立てなぞする人間でないのだから。

斯ういふ話で幾らか私の心は刺撃された。けれども、尙逃亡といふところまで決心が行き兼ねてゐるのを見て、數週間バスチイユにても這入つては、と彼女が言ひ出した。國事犯罪人には議會も口を出さないから、其處へ這入るのは詰り議會の權限外に立つ譯になるからであつた。若し私の名で訴願するのでなかつたから、然ういふ異つた好意に私も異存はなかつたのである。其の後彼女は二度とそ

の事を言ひ出さなかつたから、述べて私は、唯氣を引くために、那麼事を言つたものだらう、そして皆は一切を終結させるやうな手段は用ひたくなかつたのだと、然う断定した。

幾日か後に、元帥はツイエの主任司祭から一通の手紙を受け取つた。その人はグラムや、エビネエ夫人の友であつた。手紙には、或る信用すべき人から聴くと、議會の方ではごく嚴酷に私を處分することになつて、何時の幾日には彌よ逮捕状が發せられるといふことが書いてあつた。私はこの手紙もオルバック連の手で偽造されたものと信じた。非常に形式を聒しくいふ議會が、まづ私が其の書物の著作者であるか、奈何かを正式に訊しても見ない内に、突如逮捕する筈がないと思つたからで。

私はブッレエル夫人に斯う言つた。

「刑を忌避するだらうといふ疑ひから拘禁されるやうな者は、公安に關する犯罪者か、何かでなければある筈はありません。それが、名譽表彰でもして貰つて可い私のやうな者の罪となると、おもに本が問題になるばかりで、著者の方は餘り詮議

に上らないでせう。」

と彼女は、法廷へ召喚して審問をするかはりに、突如拘禁しようといふのは、其處に此方を保護する意味があるのだといふことを證據立てようとして、何か巧い説明をしたやうであつたが、それは忘れて了つた。翌日、ギイから手紙が來た。其の日彼が検事長の處へ行くと、偶と凡の上に、「エミール」と其の著者に對する公訴狀の案文が乗つてゐるのが目に附いたといふ報知であつた。ギイと言へば、デッシュエヌの店員で、「エミール」を印刷した男である。自分の方の利害を構はずに、著者に斯ういふ報知を寄越したのは、全く彼の好意と見ねばならぬ。その報知を私が本當にしたか、奈何かは考へる迄もあるまい。本屋が検事長の室へ案内されて、自由に其處らの書類に目を通したといふ事實は、誰でも信じれば信じさうなことである。ブッレエル夫人も他の人達も、皆ギイのいふことを本當にした。餘り皆が理窟に合はぬ事ばかり聞かせるので、世間の人達が氣でも違つたのでないかと思へて來た。私には話さぬが、何か是には、潛んだ秘密があらうと感ぜずにはゐられなかつた。が事の起るのを待つといふ氣で静と濟ましてゐた。然ういふ氣になつたのは自

分に公直の自信があつたのと、この事件について自分に後暗い事は少しもないといふ保證を握つてゐたからであつた。縦し如何な迫害を被らうと、眞理の爲に名譽の苦痛を忍ぶのなら、それを幸福だと思つてゐた。戦々もしない、逃避れもしない證據には、毎日公爵の別荘へ遊びに出掛けたり、定例の通り午後の散歩も續けた。六月八日といふ日は、事の起る前日とも知らずに、オラトワアルの教授神父アラマンニニ Almanni と全じくマンダアル Mandard 此の二人と連れて散歩した。シャンボオ Champeaux の方へ辨當を持つて行つた。時刻になると腹が減つて來て夢中で喰つた。コップを持つて行くのを忘れて、麥稈を酒罎の中へ挿入れてそれを皆が口に銜んで酒を吸つた。その中にも、成るべく吸上唧筒の管の太いのを、互ひに自分の取らうとして、肩臂張つて競争した。這麼元氣のよかつた事は、前にも後にもなかつた。

若い頃には、夜睡れなかつたといふ話を前にした。それから此の方、毎晩床に這

入つてから、眼が疲れて覆被さるやうになる迄本を讀む習慣が附いて了つた。それから佛と蠟燭を吹き消して、少頃は努めて寝附かうとするが、それが眞の暫しの間であつた。讀む本は大抵聖書と極まつてゐたので、斯ういふ風にして少くも全篇を五回や六回は繰り返した。此の晩は常より殊に眼が冴え切つてゐたから、だんだん讀書が長くなつて、確か士師記であつたかと思ふが、エフライムの利未人の話で、しまひになつてゐる書を、始から終まで讀み通した譯者云、「舊約全書士師記第十九、二十、二十一章に此の利未人の話が出てゐる。判然したことを忘れたのは、其の以後聖書を手にする機會がなかつたからである。此の物語に痛く刺撃されて、半分はもう睡つてゐながら、頭腦の中はそれがかき亂されてゐた。と、突然この夢心地を破る物音が耳を撲つた。燭光が動いた。テレエズの手を擧げてゐる光線の中へ、ロオシ君が落ちた。床から私の跳ね起きたのを見て、ロオシ君は、「唐突で吃驚なさいましたらう。實は夫人からのお使で参りましたが、此の手紙をお届け申せ、それにもう一通コンチ公から参つたのもあるから、一緒にといふこととて、そんな事で飛んだ御迷惑でございました。」

このこと。如何にもリクサンブル夫人の手紙の中へ、コンチ公が急飛脚で差し立てたのも一緒に封じ込めてあつた。公の手紙の意味で見ると、力の限り骨を折つて見たけれども、もう爲方がない、いよいよ殿しい處分が來ることに決まつたとあつた。そして尙附け加へて、沸騰は極度まで昇り居り候。今は何物の力も抗争すべき餘地これなく候。宮廷も、議會も、ならびに攻勢に出で申し候。明朝七時逮捕狀の發せらるるとともに、ルッソ君は引致せらるべく候。但し政府は同君にして一身を逃避せば、強ひて追窮するの意無きことを我等に證言致し候。若し又好んで縛に就かむとならば、そは直ちに事實と相成るべき儀に候。とあつた譯者云。逮捕狀は必ずしも嫌疑者を捕縛するのが目的でなかつた。多くは著作者を威嚇して逃走せしめればそれでよかつたので。けれどルッソの場合には、佛蘭西を出ると反つて危険の度が大いから、それが爲に彼はしばらく躊躇したのである。ラ・ロオシ、君は夫人になり代つて、どうぞ今から起きて夫人の處へ相談に行つて欲しいといふことを願つた。時刻は二時。丁度夫人の床に就く時分だ。

「夫人は貴下をお待ち申してをられますよ。一度お目に懸られなければ、決して

1762(51)

1762(51)

お就眠にはなりませんよ。」
と言ふ。て手捷克衣物を更めて表へ駆け出した。
彼女は激して見えた。這處事は初めてであつた。可惱しげな態には感動させられた。顛倒した瞬間といひ、真夜中過ぎといひ、私自身も無論亢奮を脱れ得なかつたが、此處へ來ると、自分の事は忘れて、彼女の事のみを考へた。自分が引致されたら、彼女は甚麼辛い役に廻されるであらうか。法廷で眞實を自白する事は、自分の不利益であり、破滅でもある。けれど、飽くまでも虚偽の申し立をせぬ勇氣は持つてゐる。が審問がだんだん厳しくなつて來た時に、それでも初めの勇氣を失はないで、夫人を連累に出さぬやう、確と心を落ちつけて巧く其處を斬り抜けるだけの事が出来るか、奈何か。斯ういふ迷から、彼女の平安のために、我が名譽を犠牲にせねばならぬと覺悟した。自分の爲なら甚麼時でも爲る氣のないことでも、彼女の爲とあらばする氣になつた。此の決心を彼女に打ち明けた。強ひて此の犠牲を押し賣して、反つて値打を落すやうなことは固より望まなかつた。此の思ひたちを、彼女の方で取り違へるやうなことはあるまじい筈であつた。が別にそれを嬉

1762(51)

しく思ふといふやうな意味の言葉も出なかつた。其の冷淡さに拍子抜けがして、言つた言葉を取消して了はうかとも考へた程であつた。けれど丁度其處へ主人公爵が這入つて來る。ブブレエル夫人も引續き巴里から走つて來して、その二人でリクサンブウル夫人の當然すべき事を引き取つた。然うなれば私も幾らか得意にならぬ譯に行かなかつた。却つて取消など考へるのを恥ぢた。問題は逃げ延びる場所と、出發の時間とであつた。公爵の意見では、周章しても爲様がないから、緩乎考へて、相當な計畫の立つ迄、ここ二三日の間は此の別荘に忍んだ儘てゐては、奈何かと言はれた。けれど、それならば窃とタンブルへ忍んで行くのも異つた事はない。然う思つて、不承知であつた。外の處に匿れてゐるよりは、今日すぐに發つと言ひ通した。

王國內には陰密な、そして優勢な敵が數多ゐる。所好な佛蘭西ではあるが、一身の安全を考へる上から、奈何しても此處を立ち退く外はないのであらうと、私は決する所があつた。最初はジッネエツに隠れようかとも思つた。が、懸て然うするとの淺歩さに想ひ到つた。佛蘭西の官憲は、巴里よりもジッネエツの方が反つて權

1762(51)

柄が強いから、苦める積りなら、其處の市へ這入つて行けば、外より一段危い目に遭はされることを知つてゐた。前の私の不均等論から、其處の議會に起させた反感の度は、それが公表されなかつただけ、殊に強かつた事も知つてゐた。又、ヌウヅェル、エロイズが刊行された時も、ドクトル・トロンシンの請願で、其の議會が直ちに書物の頒布を禁めたことも知つてゐた。然し、その議會だけは然ういふ狼狽へたことをしたけれど、外では何處も、巴里ですら那樣摹似をする所もなかつたので、議員連は急に風が悪くなつて、早速禁止を解いた。今度こそは得難い機會と見て、屹度彼等は十分に仇をするであらうといふ想像は外れまいと思つた。虚容は奈何ならうとも、ジッネエツ人一體の腹の底には、私に對する暗い嫉みの感情が流れてゐて、事に觸れれば何時でも激して跳び立たうとする状態にあることにも氣が附いてゐた。これだけの事を熱く承知してゐながら、尙且故郷可憐しい一念で、つい心はその方角へ向いた。だから、若し其處で安らかに住居が出来るといふ心にさへなれば、決して躊躇する處でなかつた。が、名譽心や理性は、その故郷へ一個の逃亡者として住家を求めに行くことを容さなかつた。唯單に故郷へ近寄るだけにして、

其處に私に關する舉動の定まるまで、瑞西の土地で静と容子を見てゐようと、然う決めた。斯ういふ動搖は長く續かなかつた。その次第は次に出る。

私の覺悟は、ブフレエル夫人から烈しく貶された。夫人は奈何しても英吉利へ連れ出すと言つて連りと骨を折つた。が、その效はなかつた。固から私は英吉利といふ國も可嫌、英吉利人も可嫌であつた。ブフレエル夫人が甚だに巧みに勸めても、何の譯とも知らず、反つてますます厭氣を増させるのみであつた。

その日の中に出發する事にしたので、朝から誰にも顔が合はされなかつた。ラ・ロオシ君を頼んで種々な書類を取りに家へ行つて貰つたが、彼はテレエズに私が行つて了つたとも了はぬとも話さなかつた。回想記を書かうと思ひ立つてからは、書簡だの書類だのを、随分澤山蒐めた。だから幾度も取りに歸る必要があつた。擇り分の濟んだ分は取り除けて置き、朝の餘つた時間で、残りの分を檢べて、入用な物だけ取つて、迹は焼き棄てることにした。リクサンブール公爵は深切にも此の爲事を手傳つて呉れた。が私の出發までにそれは終らなかつた。そして一枚も焼いてゐる暇がなかつた程、手間が取れた。て公爵は、残つただけは自分で擇り分

をして、要らないのは焼き棄て、精選した物を私の方へ送り届けよう、決して外の者に手は懸けさせないから、と言つて呉れた。その好意は喜んで受けることにした。此の手間さへ省ければ、出發まで、迹僅少な時間でも、もう永久に會ふことも出来ない親しい人達との名残が惜まれると思つたからである。書類の置いてある部屋の鍵は、公爵が自身で持つた。私の願を容れて、哀むべき小母さんをも呼びに遣つて呉れた。私の成り果てた境遇、又自身の成り行かむとする境遇、それらについて唯もう頭惱を昏ます外はないテレエズ。身の振り方も知らず、問はれて答辯の爲方にも狼狽くことは知れてゐながら、一秒一秒と捕吏の來るのを待つてゐるテレエズ。その物知らぬ女をラ・ロオシ君が伴つて來た。途中では何も此方から話さなかつたらしい。彼女も最早私が程遠く逃げ延びたものと思つてゐたらしい。私を見るや、突如呀といふ聲に、四邊をうち震はせつゝ、緊とこの腕に仆れかかつた。

友情、同感の抱合、常習親愛の混流！

この心行く刹那、しかもまた切なる苦みの刹那に、偲ばれるものは過ぎ行きし幸福の日、怡樂の日、平和の日の思ひ出である。その思ひ出を對照に持つこの初めて

の別れ、——過去十七年の間を、一日として相見ぬ日の嘆きに奪はせなかつた今日に及んでの別れは、きりきりと胸に刻み附けるほどの痛みを覚えさせた。

抱擁の立合人たる元帥も涙を禁め得なかつた。そして吾儕を残して立ち去つた。テレーズは奈何しても離れることは出来ないと言つてむづかる。てよく噛み含めて、今一緒に跟いて来るのは此の上ない不便だといふこと、述に殘つて家財を整理したり、金を取り集めなければならぬことなどを言ひ聞かせた。人が拘引される場合には、通例書類を差押へ、家財は封印を懸けるか、目録を製るかして、それに一人管財人を附けることになつてゐる。だから彼女だけは述に殘つて、事の経過をよく見てゐて、出来る限り有利な處分を受けるやうにするのが必要であつた。其の述で直ぐ彼女を迎へ取るといふ約束をした。元帥もこの約束に裏書をした。けれど私は、若し捕吏が来て彼女を問ひ訊いた時、馬鹿正直に本當のことを告げなぞされては大變と、行く先だけは明さずに置いた。いざ別れ際の抱擁に、私は尋常ならぬ胸の動亂を感じて、夢中で斯ういふことを言つた。

「お前よつ程確乎してなくては不可ないよ。私が仕合せよくやつて行つた時は、

1762(51)

お前も其の分け前に這入れた。今度は難儀をする羽目になつたんだから、やつぱりお前の心でその道連れになればなるんだ。私に跟いてゐる以上は、どうせ將來は恥を曝すか、災難ばかり續くものと覺悟してゐる。悲しい運命は今日から始まつて、死ぬまで附き纏つて来るのだ。」

これが思ひ設けぬ預言になつた。

今はもう出發の事を考へるばかりになつた。捕吏は多分十時頃に来る筈だ。私は午後四時に此處を立ち離れた。それに尙來なかつた。私は郵便馬車に乗つて出る都合になつてゐた。自分に馬車はなかつたから、公爵から一頭馬車を一輛贈られた。それから第一の宿驛まで馬と馭者を貸してくれた。其處まで來ると是も公爵の配慮で、他の馬と馭者が世話なしに得られた。

食卓で食事もせず、別荘の方へも出なかつたから、婦人達は皆晝間私の居所になつた中二階へ来て暇乞の辭を述べた。元帥夫人は憂はしげな容子をしながら、幾度も私を擁いだ。しかしその中には、二三年前のやうな溢れる程身に染めてした温い抱擁を感じることが出来なかつた。ブッレエル夫人も私を擁いて、非常に丁

1762(51)



(妻夫公ルウブンサクワリ) 離別

寧な言葉の種類と言つた。私の驚かされたのは、丁度此處へ来たマイルポア夫人に擁かれたことであつた。夫人は此の上ない冷かな、物堅い、つつまし過ぎる質の女で、ロレヌエ家の特色的な思ひ昂つた調子を全く脱し切らぬやうに思はれた。これ迄も餘り私に注意を拂つてゐるらしくなかつた。それに今思ひ懸けない榮譽を得たに調子附いて、この名譽の値をますます高めたかつた爲であつたか、或は彼女の寛大な同情心が、自然とこの抱擁の中に這入て來た爲であつたか、彼女の舉動や眼附に、何となく強く人を動かす力があることを見出した。其から後時々この事を思ひ返して見て、斯う判断した。墮罪した私の運命は、彼女とて知らぬことはないのだから、一時にもしる、悲境に落ちて行くその私に向つての哀情を禁じ得なかつたのであらうと。

元帥は口を開かなかつた。死せる者のやうに蒼暗い顔色をしてゐた。飲水場の處に待つてゐる馬車まで見送らうと強つて望んだ。二人連れて庭を横切つて了ふまで、一言も兩方から物を言はなかつた。遊園の入口の鍵を私が持つてたから、それて戸を開けて、遂は自分の衣兜へ仕舞はずに、無言のまま彼に渡した。彼が

1762(51)

パール Baire とモンモランシイの間で、黒色の服を着て貸馬車に乗った四人の男に遇つた。皆笑みを含んで私に會釋した。述でテレエズが話した當時の捕吏の扮装や來た時刻からすべての模様と思ひ合せて見ると、今遇つた人達が奈何もそれてあつたらしい。殊に逮捕狀が七時に發せられる筈と聞き込んでゐたのに、實際に出たのは午後になつてからであつたと言ふから彌よそれに違ひない。私は巴里を通過する順路にあつた。一頭馬車といふ奴は、周圍が明け放しだから外からよく見える。途中で出遇ふ人人は、皆親し氣に挨拶をして通つたが、私の方は誰もよく知らなかつた。夕方から路筋を轉へてヴェルロアの方へ向つた。里昂では、

第十一卷

それを受け取つた時の手捷さは、その後もをりをり私の考へに上らずにゐなかつた。生涯この別離の瞬間ほど苦い思ひを嘗めたことはなかつた。抱擁の間は長かつた。沈黙がつづいた。彼も私も、その抱擁が最後の訣別になるのだと思ひ交した譯者云。それから二年目の一七六四年に元帥は死んだ。

馬は生涯を流しに酔はふかつた。
 雲一つも沈は、ライフの道運あつた
 不白の世は理想の跡屋の跡あつた。
 理想は神意の女隊隊ある。
 運のライフ其のもふ、宇宙の跡あつた。
 自然に還れ、運の跡、吾人の跡より一歩進まふはあつた。
 空下ろしを死ふも跡の跡を打つてよ。
 吾人は、生の痕跡を改道し、自然を指導せぬ。
 吾人は、新をちの理想の創造者あつた。
 自然、宇宙の凡この存在、理想を指導し、改道するもの……吾人はあつた。
 運の跡、吾人の跡、神は、運の吾人の跡あつた。
 運、吾人の跡……
 宇宙の存在……宇宙の力……吾人は吾人の存在、吾人の力あつた。
 吾人の存在に……宇宙の力……吾人は吾人の存在、吾人の力あつた。
 宇宙の理想を創造する。吾人の跡、吾人の跡あつた。

馬車は生涯を流しに酔はふかつた。

空も多しはライフの道連れであつた

不意下の世は理想の扉を揺らした。

理想は理想の女隊がある。

運命のさうさ其のまゝ宇宙の路を歩かぬ。

自然に還れ 運命の叫び 吾人のまゝより一歩進めよかたあつた。

空下ろしを死なふも路のついでと打つてよ。

吾人は、生の痕跡を改定し自然を指導せぬ。

吾人は、新をちの理想の創造者である由ふ。

自然に宇宙の凡この存在、理想を指導し、改定するもの……吾人はあつた。

海がすくせろ。吾人の叫びは、神は、吾人のあつた。

嗚々吾人の存在……宇宙の存在……吾人のあつた。

吾人のあつた……宇宙の存在……吾人のあつた。

それを受け取つた時の手摺さは、その後もをりをり私の考へに上らずにゐなかつた。生涯この別離の瞬間ほど苦い思ひを嘗めたことはなかつた。抱擁の間は長かつた。沈黙がつづいた。彼も私も、その抱擁が最後の訣別になるのだと思ひ交した(譯者云。それから二年目の一七六四年に元帥は死んだ)。

1762(51)

パール Barre とモンモランシイの間で、黒色の服を着て貸馬車に乗つた四人の男に遇つた。皆笑みを含んで私に會釋した。述でテレエズが話した當時の捕吏の扮装や來た時刻からすべての模様と思ひ合せて見ると、今遇つた人達が奈何もそれであつたらしい。殊に逮捕状が七時に發せられる筈と聞き込んでゐたのに、實際に出たのは午後になつてからであつたと言ふから彌よそれに違ひない。私は巴里を通過する順路にあつた。一頭馬車といふ奴は、周囲が明け放しだから外からよく見える。途中で出遇ふ人人は、皆親し氣に挨拶をして通つたが、私の方は誰もよく知らなかつた。夕方から路筋を轉へてヴィルロアの方へ向つた。里昂では、

第十一卷

郵便馬車に乗つて行く者を一應取調べることになつてゐる。偽誓も變名も好まぬ私のやうな者にとつては、迷惑を感じること夥だしい。てリクサンブル夫人の手紙を持つて、此の面白からぬ手續を脱けさして欲しいとヴィルロア氏に願つて行つた。ヴィルロア氏は一通の手紙を與れたが、里昂を通らずに了つたら、無効になつた。これは今でも書類の中に押し込んである筈だ。公爵はヴィルロアで泊つて行くと、頻りに勧められたけれど、本街道へ出た方がよいと思つて、其の日の中にも二驛だけ進んだ。

馬車の工合が頗る良くない。また、一日の中になるだけ餘計に道を抄取らせようとするにしては、身體の加減も悪かつた。それと私の風采が到底取者に大切にされる柄ではなし、殊に誰も知るとほり、取者の見込みがすぐに馬の走り方に影響して行くといふ佛蘭西一體の風だから、自分の見窄らしい姿貌を取り繕ふ積りで、餘分に賃錢を與つた。それが尙面白くない結果を招いた。下賤な自分の者が、誰かの使に行くので、臍の緒切つて始めて郵便馬車になぞ乗つたのだらうと、然う思はれて了つた。それから後は些とも優しな馬に出會さず、唯取者の戯弄物になつ

て行つた。何事も我慢と思つて、口も開かなかつた。そして取者共の爲る儘になつて引つ張つて行かれた。寧ろ初めからそんな風で通せばよかつたのである。

身の上の出来事について道中の疲れを疲れと思はせぬ程回想の種が十分にあつた。けれどそれは私の心意の作用でもなく、又感情の傾向でもなかつた。新舊とも、一切の過去の禍害を忘れ果てて了ふことは、驚く程私には容易かつた。目の前に禍害の近づいて来るのを豫想する時の可怕しさが強ければ強い程、来て了つた迹の思ひ出は、それとは反比例に微かな弱々しいものになつて、雖も頭腦の中から消え失せて了ふ。彼方に見える禍害に對しては、激しい痛傷に堪へられぬやうな想像が動く。と、その途端に過去の記憶は姿を隠して嘗て受けた禍害は、もう思ひ出すことが出来ぬ。来て了つた事に警戒は要らぬ。それを思ふだけ無益である。謂はば未だ來ぬ前の禍害に逸早く打仆れて了ふのであるから、事前の苦痛が多ければ多いだけ、忘れて了ふ速さも速い。かと思ふと、反對に幸福の方になると、縦しんば過ぎ去つたものでも、絶えずそれを憶ひ浮べてゐると、何時までも快い心持が續いて、一つ事で二度の享樂が出来る。斯ういふ性情のあることは、自分に

1762(51)

は殊に幸ひであると思ふ。過去の禍害に對する追憶が残つてゐれば、復讐心が黙つてゐない。奈何いふ復讐を敵に投げようかの思ひ煩ひに、我と心を騒立たせてゐなければならぬ。然ういふ怨恨深い氣質が出て來なかつたのは、全く前にいふ幸ひな性情があつたからだと考へてゐる。性來血の氣の勝つた質だから、初めは随分怒り立ちもする。狂暴な態にも化する。が仇復しがしてやりたいといふ深い心の根は、竟に廣がらなかつた。被害を感ずる度合が至つて軽いから、加害者を怨む度合も重くならない。被害に就いて何か心に残ることがあるとしても、それは唯其の迹へ同じ様なものが引き續いて來はせぬかと懸念するからである。迹からも來ないといふ極まれれば、最初のもものは直ぐに忘れられて了ふのである。宗教家は連りに「怨の赦し」といふことを説く。結構なことには違ひないが、私で見ると赦すも赦さぬもない。心に怨恨といふものを感じたことがないから、其を抑制した經驗も持たぬ。仇敵といふ觀念に乏しい私は、敵を赦したといふ佳名を得たいと思つても取る機會がない。私を苦めようとして、何のくらの彼等が自身に、苦んでゐるか、それは言ふまい。私は全く敵人の掌中に弄せられてゐて、あらゆる威力

1762(51)

を振ひ行ふものは彼等である。が其の威力に如何程の強みがあつても、唯一つそれに卑むべき考が雜つてゐる。何かと言へば、私の爲に自分達が獨りて惱んでゐるからと言つて、私にも亦彼等の爲に我が身を惱ますやうにさせようとする事が其である。

出發の翌日から、既う早や何事も悉皆頭腦の中から抜けて行つて了つた。此の頃中の動亂、議會、ボンバツウル夫人、シオズウル公、グリム、ダランベエル、其の人達の隱謀——用心も何も打忘れて了つて差間がないのであつたら、然ういふものは恐らく途中で思ひ出しもしなかつたらうと思ふ。唯一つ斯ういふ中で残つてゐたのは、出發の前夜に讀んだ那の聖書の物語のことだけであつた。と同時にグスネルの牧歌のことも思ひ出した。これは曾てそれを翻譯したユベエルから贈られたものであつた(譯者云。Salomon Gessner. 瑞西チウウリヒ Zürich の牧歌詩人、又風景畫家。その詩は雅美で道德的なのを以つて稱せられる。茲に謂ふ牧歌 Les Idylles は一七五六年に成つたもの)。この二種の考想だけは鮮かに浮べ出した。そして二つが頭の中て一緒になつた。其からの思ひ附きて、エフライムの利未人 Le Levite

「Ephraim」を主題に取り、ゲスネルに倣つて新しい詩を試みようか、といふやうな氣を起した。田舎の景象を寫し出した極なイイ言つた風な詩體は、エフライムの利未人のやうな、非常に刺撃的な題材に相應はぬ嫌ひはないか。且私の現在の境遇として、快活な、暢然とした思想の色を傳けることは、殆んど望み得られぬことでないか知らぬとも思つたりした。けれど、完成の見込は無いながらも、一頭馬車の中に横たへたこの身體の慰みにだけでも、連りに首を捻つた。すると、忽ち豊潤な思想が湧いて出て、それを復現するにも、意外に手間暇を要しなかつた。三日間でこの詩の初三歌が出来て了つた。——全篇はその後モテエエへ行つてから完成した。詩材に取つた骨子は、然ういふ可思しい酸鼻的な事實であるにも拘らず、興味に人を繋いで行くふつくりとした温か味と言ひ、明色の鮮麗さと言ひ、手法のナイイザなことと言ひ、全體としての釣合のしつくり落ち著いた所から、一般に言つて古代的の淳朴な氣分の漂うてゐる工合といふものは、生涯を通じて何の作品にも見出すことが出来ないくらゐるものであつた。然うした一切の特色に目を塞ぐとしても、困難に打ち勝つた、といふ此の一點だけでも、優に功績を認めら

1762(51)

1762(51)

れてよいと思ふ。「エフライムの利未人」の一篇、縦し私の最傑作でないにしても、何時までも愛賞に値ひするものであることは疑はない。これを讀むたびに苛々した心持は壓せられて、言ひ知らぬ微妙な頌讚の囁きを胸の底に聞くかの思ひをせぬ事がない。將來これを讀む折があつても、始終依然その通りであらうと思つてゐる。種々な不幸に剝られる心も、其處に大きな慰藉を見附けて、われと痛傷を輕めることが出来る。世には苦患を味ふことなしに、超然と著作に耽る大學者が澤山にある。然ういふ人達を呼び集めて、今の私と同じ境遇に立たせ、私のやうに名譽に泥を塗られた時の可憤しい最初の心持にさせて、扱私を作したやうな課題を與へたとして見給へ。果して甚麽物を作り出すであらう。

モンモランシイを出て、瑞西の方に向つて行くに就いて、前にイヴェルドンに退隱した舊友のロガンの家に足を留める積りにした。此の人からは度々出て来るやうにといふ案内さへあつた。里昂の方へ廻ると損になるといふことを途中で聞いて居たので、其方へ行くことは罷めにしたが、ブザンソンは是非通らなければならぬ。然うすると、この要塞嚴重な市では、やはり里昂の場合と同じ不便な目に逢

著さなければならぬ。て、少し迂路でも、サランの方の方から行かうと考へ附けた。その口實にはメエラン氏を訪ねるといふことにした。この人はデバン氏の甥である。今鹽業をやつてゐて、是まで頻りに私を招んだことがあつた。此の順序は旨く行つた。メエラン氏も丁度不在で、その爲に手間も取れず、誰にも言葉を掛けられる面倒もなく、匆々と行く手を急いだ。

ベルヌの領内へ這入るが早いか、馭者に馬を停めさして車から降立つた。直其の場へ膝を突いて俯伏しになり、地面へ吻を接けながら、歡喜の情の漂ふ中から、「正義の擁護者なる神を讚美し奉る。自由の地に足觸れし我が歡びを受納れ給へ！」

と叫んだ。希望に盲して反面を看貫く力を失つた私は、後に其が不幸を呼ぶものになるとも知らず、唯目の前の據り所に、必死と絶り附いた。これが私の持前である。馭者は見て狂者とても思つたらしい。復た車に乗つた。二三時間後の私は、もう尊ぶべきロガンの腕に身を投げ懸けてゐる人であつた。清い勇み立つやうな感情の中には、水の風ぎたやうな満足があつた。暫らくは此處で此の適當な宿

主を捉へて一息入れたい。茲て勇氣と力を恢復しなくては、逆も此の前の道が進み得られるものでない。この二つの者が入用に迫る時機は、目の前に見えてゐる。

喚び覺し得られるだけの事柄は、煩いのを承知して、何でも彼でも斯うして書き立てたといふことには、相當な理由がある。無興味な事實と言はば言へるけれど、隠謀の緒が一旦見出されたときに、八重に織り成されたその經緯を明かに照し出して見せるものは、是等の事實である。例へば次に提出しようとする問題なども、殆んど題意を説かずして是をもつて解決の資にすることが出来る。

私を指しての隠謀を實行する上に、私を遠ざけて置くといふことが絶待に必要だつたとするならば、何事も那の通りに進行する外爲方もなかつたらう。しかし倘私がリックサンブウル夫人の那の時の夜中の使に飛び上ることもなく、又その人からの警報に脅されもせず、最初からのやうに静と動搖せぬ態度で續けて行つて、別荘で遅々してなぞ居ないで、直ぐ自宅へ歸つて心靜かに翌朝まで睡を貪つた

としたら奈何であつたらうか。それでも尙且此の通りに逮捕の命が来たであらうか。此處に重要な問題が横はつてゐる。他の多くの問題の解決も、此の一點に係つてゐる。其の解決の方便として、命令の發せられた時間と、實際捕縛に向つて来た時間とを注意することは、強ち無用でもない。これは簡單な一例に過ぎないが、事實を臚列して見ると、些々たるものにも必要の潛むことを示すに足ると思ふ。斯ういふ事から秘密な原因も手懸りが得られるから、迹は大抵歸納で推定されることになる。

これから可怖しい暗黒の工事が始まる。甚麼手段でも、此の可怖しい闇の中を看透すことの出来得られない儘で、八年の間、全く此の裡に葬られてゐた。禍の淵に陥つた私は、苛責の苦と苦楚を直接に身の上にかけてゐながら、誰の手から其が來るのか、甚麼方法でそれが動いてゐるのか、少しも目には映らない。恥辱も不幸



第十二卷

も、姿を見せずに何時の間にか獨り手にどつと墜ちて來る。さざぎざに割裂かれた胸の中から、溜息が洩れて出る時の有様は、何の的もなしに悲傷に暮れてゐる人のやうに見えた。私を破滅させようとする人々は、社會を自分達の共謀に引き入れる隱微な方法を見出した。それであるて社會自身は其處に氣も附かず、奈何いふ結果になるとも曉らないでゐた。て私が自分に關係ある出來事や、取り扱はれ方や、身の上に落ちた事件を話すにも、それらを操る傀儡師の所在を示すことの出來ない立ち場に居る。結果だけは明かに語るけれど、原因が斯うだとは全く言へぬ位置に居る。それらの遠因とも見られるやうな事は、前の三卷の中で大方書きつけて置いた。私の利害に關する事や、秘密の動機などは、其處で大抵列べて置いた。けれど、然ういふ種々な原因、動機が、私の生涯に怪奇な運命を齎す爲に、しつかりと結び附くやうになつた由來は、奈何かといふ一段になると、到底私には説明が出來ぬ。可い加減な當推量すら出來かねる。若しも讀者の中に好意に富んだ人があつて、奈何かしてこの秘密を暴露して、真相に到着して見たいと望まれるなら、何卒まづ前の三卷をもう一度熟く讀み直して貰ひたい。然うした後に次の卷に於ける事

實の中から、材料になるべきものを選んで、イントリイグからイントリイグへ、動因から動因へと、段々に溯つて掻き分けて行つて見たら、第一原因の潛伏してゐる場所が探ね當てられないこともあるまいと思ふ。其の道筋は、喩へば、黒暗々たる地下の迷宮にも似たものであらう。連もこれを踏み違へずに辿つて行くといふことは、私には出來ない。

イヴェルドンに逗留してゐる間は、ロガンの家族達と懇親を結ぶのに急しかつた。その中にボア・ドラ・ツウル Boy de la Tour 夫人とその娘もあつた。ボア夫人はロガンの姪で、父は曾て私と里昂で相識になつたことを話したやうに記してゐる。彼女は伯父とその姉妹を訪ねてイヴェルドンへ來合せたのであつた。夫人の長女で、今年十五になるのが、伶俐ですぐれた氣質の所が私を歡ばせた。夫人と娘とは、私の方から限りなく親しくして行つた。娘はロガンの甥の、もう大分年輩な大佐の處へ嫁附くといふ話になつてゐた。大佐といふ人も、私には至つて深切な心を

傾けた。伯父は熱心にこの結婚を成り立たせようとする。婿になる人も一倍氣込んでゐるので出来る事なら二人の満足するやうにと祈つてはゐたが、第一年齢に非常な懸隔があつて、年若な少女としては我慢のなれば程嫌がるのも道理と思へた。終に私は母親の方に味方して、到頭この縁談を裂かせるやうにしてつた。大佐はその後ダイアン Diana といふ親戚の娘と結婚した。見たところ氣立も姿色も申し分のない女であつた。大佐を幸福な良人、幸福な父にしたのは、この新夫人の手柄であつた。しかし、ロガンには、自分の望んだ縁談について、私の寢返りを打つたといふことが、何時までも忘れられなかつた。けれど私の方には、ロガンは固より、その家族に對しても、立派に義務は果たしたといふ自信からの安心があつた。必ずしも向うの喜ぶやうにばかり爲向けるのが眞の義務でもあるまい。對手の最善を謀る。其處に友情の尊威があるのではないか。

ジッネエツへ還つて行つたなら、其處で甚麽目に遭つたらうかといふことは、程なく知れた。私の著作はジッネエツで焼かれて了つた。そして六月十八日、丁度巴里で逮捕狀が發せられた九日目といふ日に、ジッネエツは私に向つて巴里と同じ逮

1762(51)

1762(51)

捕の令を下した。この二度目の逮捕狀の表で見ると、當り前の考では信ぜられぬやうな、無法な事ばかり書き立ててある。明かに信教條例に背反したことも出てゐる。那樣譯で、始めて此の知らせがあつた時には、奈何しても本當の事とは思へないくらゐであつた。彌よそれが事實と分つた時には、すべての法令に斯う公然低觸するやうな事を爲出来しては、黙つて視てゐられなくなつて、ジッネエツ中が上を下へ湧き立つやうな騷擾になりはせぬかと戦かされた。けれど私は安心を見出した。一切が平穩であつた。愚民の間に幾らかの不穩があつたとすれば、其の當對は私の體に外ならなかつた。そして一般の喧嘩家や、ベダントからは、丁度學校の兒童が教義問答が出来なかつたと言つて鞭で打たれると言つたやうな、那樣取り扱ひ方をされた。

二度の逮捕狀が信號となつて、歐羅巴到る處に、未曾有と謂ふべき咒詛の怒號が私に對して起り立つた。有りとある定期刊行物から小冊子の類に至るまで、一齊に打ち顛はれるやうな早鐘を撞き鳴らした。佛蘭西の人々には、もと柔かなうち開けた、寛大な氣風があつて、不遇な者には優しい目を懸けるといふことを此の上

なく得意がつてゐたにも似ず、然うした美德を忽ち遺れて、數多の凄じい迫害を私に與へた。それ程他の何處の人民よりも特に抽んで、暴虐の本性を現した。私をば背教者、無神論者、癡狂者、恐水病者、野獸、——然ういふものにして、了つた。「ジュルナル・ド・トレヴウ」の引受人は、謂はゆる私の自信、癡狂を攻めるのだと言つて、他愛も無い文句を喋いた。反つて自分が其病に憑依かれてゐることを證據立てるやうなものであつた(譯者云。Journal Trévoux — Mémoires de Trévoux ともいふ。トレヴウのエスイタ僧等が發刊した文藝批評雜誌。趣旨は懷疑哲學派を攻撃するにあつた。一七〇一—七五の間繼續した)。巴里で何かしら刊行する程の人は、皆必と私を侮辱することを怠らなかつた。毒口を私に利いて置かないと、警察から何爲ルソオを攻撃せぬのだといふ譴責が来る恐れがある、然う言つてもよい位の風であつた。世を擧げて私を憎惡の相手とするに至つたその原因は、到底探り出す由もなかつた。唯私は世の人々の心が物狂しくなつたものと見てゐた。「永久平和策」の校訂者程のものが、秩序の紊亂を鼓吹する道理があらうか。「サヴァア司祭の信仰」を書いて出す程の人間が、背教者とは何事だ! 「ヌウヴェル・エロイズ」の作者

1762(51)

1762(51)

が狼とは何の譴語だ! 癡狂者に「エミール」が書けると思つてゐるか! それなら若し、自分が精神論 *De l'Esprit* のやうな書物を出したら、世間の人は何に私を喰へたてあらう(譯者云。「精神論」は一七五八年「ヘルヴェシユス Helvétius」の著書。唯心論を藉りて物質主義を説き、道德論に據つて自我主義を説いた。刊行の當時、劇烈な反對を蒙つた。それに一方「精神論」の著者に對する迫害者の叫び聲が響いた時には、それと並んで、社會一般は嘆美者の位置に立つて、著書を護衛した。此の書物と私の書物、その二書が世に迎へられた有様の相違、歐羅巴の異なつた國で二人の著者に對する待遇の爲方、それを比べ合して貰ひたい。そしてこの差異の生じた原因を、聰明な人の満足し得られる程度に見出して貰ひたい。其の外に頼みたい事は何もない。

ロガンとその家族一同が身に沁みるやうな願ひのままに、私は此處を身の落ちつき處にしようと思ひ定めた。それほどイヴルドンの逗留が心持よく感ぜられた。其處の市長であつたジャン・ジーン・Cingins のモアリイ Moiry 氏も深切に勸めて、自分の管内に止まらせようとした。大佐の家には、園と内庭の間に、小い離れ屋が一棟

あつた。丁度住居にいいからと言つて、無理やり其處を宛行つて、所帶道具一切を瞬く中に取り揃へて粗漏なくそれを配り附けた。最も私を大切にする旗將のロガンは、終日傍を離れなかつた。好意には無上に絆されたが、時とするに煩く思ふことがないでもなかつた。此の新家へ移る日が彌よ極まつたので、テレエズを呼び寄せる手紙を書いた。と、それが機掛て、この時丁度報道に依つて、私を見込んての颯風がベルヌに吹き立つたといふことが知れて来た。それは多分、信神家の講中の爲業だらうと思はれたけれど、眞箇の原因は今だに看破ることが出来ぬ。誰が黒幕をやつてゐるのか解らぬが、上院では、私を其の儘潛伏さして置けぬと言つて騒附いた。其の風説が始めて市長の耳に這入ると、すぐ政府部内の有力者へ宛てて私の保護を願ふやうな書面を出した。理非を問はず人を罪することの宜しからぬを誨へ、多くの匪徒が此の土地に隠れ家を求めた時は、いつも大目に見容したものを、今度に限つて、功績はありながら世に伏し沈んだ人間一人を逐ひ立てるのは無慚な處置だといふことを懇へた。

氣の附く人達は、這麼理窟を言つて行くのは、當局を諫めるよりも反つて激せし

めることになると思つた。とにかく、市長の勢力も雄辯も、振り冠つた鞭の手を押し止めることは出来なかつた。命令が彼の手へ廻つて来るや否や、前もつて窃かに知らせて呉れた。本命令に接せぬ内にと、思つて、すぐ其の翌日立ち退くことに決めた。さて又何處を指して逃げよう、——これが難問である。ジッネエも佛蘭西も、既う自分を閉め出して了つた。其の他の地方とても、われ一と皆此の例に倣ふことも知れた話である。

ニウシアテル伯爵領のブルドトラサル Val-de-Travers の中に、モチエエといふ村がある。其の村にボア夫人の息子の持家が、一軒あつて、道具付きの儘空家になつてゐた。其處は奈何だらうと言つたのが夫人であつた。途中は山一つ越えるだけのことである。其處なら普魯士の管轄だから、自然迫害の来る憂もなし、少くも宗教上の事を捉へて攻め立てられる氣づかひはないから、此の上の好都合はなかつた。けれど其の時口へ出しては言へないやうな、或る祕密な障礙が、その申し出を受けることを躊躇させた。正義の愛が始終心の全面に流れ渡り、其の底には佛蘭西を懷愛む情の通つてゐる私は、普魯士王(フリードリヒ大王)といふものを蟲

が好かない。彼の主義や行動から観ると、自然法や、人道といふものは全て蹂躪して顧みない風がある。モンモランシイの舊居を裝飾するに使つた、額縁の附いた肖像の中に、この王のもあつた。其の肖像の下の方へ對聯が書いてあつた。其の下句は斯ういふのであつた。

Il pense en philosophe, et se conduit en roi.

思想は學者の如く、行爲は王者の如し。

(譯者云。學者も王者も茲ては兩つとも悪い意味に用ひてある。此の上の句は、

La gloire, l'intérêt, voilà son dieu, sa loi.

榮譽と利害、これ彼の神とし、法とする所。

といふのであつた。

此の句が若し外の誰かの作であつたら、王を嘆美した詞になるのであるが、私の手に成つただけ、意味が反對に釋れて、上の句の意味までが、それで遺憾なく發明される。訪問して來た多勢の客は、大抵此の對聯を見て知つてゐた。ロレンチ士爵などはそれを寫し取つて、ダランベエルに送つた。ダランベエルは又それを種にし

1762(51)

1762(51)

て、王に諛辭を進めることを忘れなかつたらうと思ふ。そののみか、この第一の過失の上塗をしたものがあつた。それは、エミールの中で、ダナオイ Danois 族の王、アドラストス Adrastus の名を藉りて書いた事實から見ると、確かにあの王の事を下に持つてゐたと知れてゐるからであつた。その話をブブレエル夫人の口から度々聞いた事があるから、然うして見ると、随分批評家達の眼には立つたに違ひない。そんなこんなで、普魯士王の手控の中には、赤インキで歴然と注意人物の中に載せられてゐることは、請合ひだと思つた。それに、倘し王が私の想像するやうな質の人であるとするれば、私の著作、随つてその著者までも、この理由だけで十分御機嫌を損ぜられることは疑ひなかつた。何爲ならば、鈍痴漢や暴主達は、碌に他の特質も知らずに、唯一通り著書を読み流しただけで、無上の憎惡を感ずるのが、お極りのやうになつてゐたからだ。

だが、此の王の袖の下に躲れても、決して身を危くすることはあるまいといふ信賴心はあつた。卑陋しい根性は、弱い人間の專屬物で、此の王などが具へてゐる筈の強い心の内部には、そんな物が巢をくふ隙間もあるまい。彼が下を御する遣り

1762(51)

口から考へても、今度の様な場合に、**伝と太腹**などところを見せるのこそ當り前て、又然うしたからと言つて、彼の性質と矛盾する筈もなからう。嬰兒の手を振るやうな復讐をすることは、榮譽を熱愛する彼の心と僅かの間も平均が保れまい。若し位置が換つて私が普魯士王であつたとすれば、怪しからず自分を悪く思つた當の敵に、此の機を幸ひと、彌が上にも慈惠の重味を纏頭けるに何のむづかしいことがあらう。と言つた考から、心を大丈夫に持つて、モチエエへと落ちて行つた。此の信頼の價値は深く彼に感じられたであらうと思つた。そして、**ジャン・ジャック**がコリオラスの位置まで登つたら、フレデリックはウォルスキの將軍の下風に立つことになるだらうか。と獨言を言つた譯者云。コリオラス *Coriolanus* は羅馬古傳説の一貴族。ウォルスキ *Volsci* 族を破つてコリオリ *Corioli* を略取してから、コリオラスといふ綽號を獲た。飢饉の際、シチリアから輸入の穀物を平民に施與するに就いて、平民の護民官を廢して了はなくては許されぬと主張して、其のために本國を逐はれた。すぐ彼はウォルスキ族の中へ逃げ込んだ。そしてウォルスキの軍を率ゐて羅馬を攻め破つた。羅馬人が講和を申し込んでも肯き入れない。終に羅馬に



(真寫の年七九八一)景全のルエヴラト・エエチモ

残した老母と妻とに泣き附かれて、始めてウォルスキを退軍させた。

ロガン大佐は奈何しても山越えに随いて行つて、モチエエに落ち著くの見届けると言ひ張つた。ボア夫人の義妹にジラルヂエ Girardier 夫人といふのがあつた。私の行き著かうとする家が、この夫人には限りなく住み心地よく思はれてゐたので、私が行つても餘り好い顔をしなかつた。でもともかく、快く宿を貸してくれた。て私はテレエズが来て、家事の整頓する迄は、この夫人と食卓を共にした。

モンモランシイから足を擧げる際に、將來自分は浮世の亡命者になるのだ、と然う思つた。漂浪の生涯——これが私の受けた審判だと思ふと、テレエズを自分の傍へ引き附けて、この生涯を分擔させる不惑さに心が鈍つた。この悲劇のために、二人の關係の意味が變つて來て、今迄自分の方から出た好情は、この後反對に向うから出ることになるだらうと思はれた。私の受ける不幸の試練に堪へて、思慕の情を滲へずに居たならば、恐らく彼女の心は傷だらけになるかも知れぬ。そして

彼女の悲哀は、私の苦痛を増すに違ひない。若しも私の屈辱のために、彼女の心の熱が冷めるやうになれば、その貞操は一種の犠牲に當ることにならう。そして最後の麪包の一片を二人して分けて喰ふ嬉しさは感じないで、運命に逐ひ立てられて逃げ行く先々へ跟いて來ることを、彼女自身の手柄とばかり思ふやうになるであらう。

何も彼も言つて了はう。哀むべき、ママンの瑕も、私自身のそれも、皆包まずに話して來たのだから、テレエズにだけ偏最負をしてもなるまい。自分の懐愛む女だから、精々持ち上げる様なことを言つてゐれば、心持はよいに極まつてゐるが、しかし缺點は缺點として、隠して置くことは出來ぬ。——愛情が知らず識らずの裡に衰へて來たといふことも、眞の缺點といふものならばだ。

テレエズの愛情が徐々に冷めて來たといふことは、大分前から氣附いた。二人が若盛りの頃の愛の面影は、彼女の方には見られなくなつたかの感じがした。私の方の心持が、始終同じ調子を變へずにあつただけ、それだけその感じが格別強く響けるやうに思つた。昔ママンに對しても、這麼辛い思ひをしたことがあつた。今

度はテレエズに就いても、丁度それと同じ氣拙い心の状態に落ちた。自然を離れて完全なものを求めるのは愚だ。孰の女だつて、皆然うしたものに違ひはないのだ。生んだ子供等は、皆那いふことにして了つたが、幾ら自分では立派な口實がある積りてゐても、有繋に心の裡は穩かならぬこともあつた。教育論を書くに當つても、自分は避くべからざる義務を怠つたといふ心の責苦を感じた。壓するやうな悔恨は、終に私を牽き出して「エミール」の中で、忌み憚るところなく懺悔させた。その懺悔文を讀んで、大膽に私の過失を責める者があつたには驚かれる。文意が那程透き通つて居るのだもの（譯者云。「エミール」第一巻に出てゐる次の文をいふのである。「父たる者が唯子供を生んで物を喰はせるだけならば、父の爲事の三分の一を果したとしか言へない。人類に對しては人間を預かつてゐる。社會に對しては社交的人を預かつてゐる。國家に對しては公民を預かつてゐるのである。此の三重の債務をば、果すことの出來る身でゐながら果さぬ者は、皆罪人である。それを半分だけ果して殘餘を構はぬ者は、恐らく一層罪が深い。父の義務を全うし能はぬ者に、父となるべき權利は絶待にない。貧乏だからと言つて、爲事が

忙しいからと言つて、他の思はくがあるからと言つて、それで自分が子供を養育せぬ申譯には少しもならぬ。諸君は私を信じ給へ。私は斯ういふことを言つて置きたい。普通の人情を具へながら、斯様に神聖な任務を懈る人達は、自分の過失の上に何時までも憂き涙の絶え間がなくて、永久に心の和む時はあるまい。けれども私の境遇は些とも變らない。或る意味で言へば、以前より困難であつた。怨ある敵人達は、何か知ら私の過失を穿り出さうとしてゐた。私は同じ罪惡を繰り返すことを恐れた。それを避けて、曩日と同じ場合にテレエズを沈ませまいと思ふ心から、我と禁戒を守るやうにした。のみならず、女と同棲すれば、目に見えて健康が害されることを思つた。斯う二重の理由から決心が出来上つて、時とするとなつて結果が良くなかつたやうでもあつたけれど、この三四年の間は益々堅固に通じた。テレエズの心が冷くなつて來たと氣附いたのは、丁度この時からであつた。義務的に添つてゐるばかりで、その間に愛の意味は更になかつた。然らなると同棲してゐても何となく愉快でなくなつた。何處へ跟いて來ても私の態度に變りがない以上は、所定めずに私と漂浪なぞして行くよりは、寧ろもう静と巴里で

1762(51)

1762(51)

落著いてゐた方が、甚麽にか彼女には好ましからうと、然ら推察した。けれども彼女はいとどしい別離の悲哀を現はした。一緒にしてやると言つた約束を、是非事實にして見せよと迫つた。私の出發後は、リックサンブル公爵は勿論、コンチ公に迄も泣き附いて、その望みを愜へることを頼んだ。て私はもう別居のことを告げる勇氣も鈍つた。それを考へる勇氣さへなくなつた。此の女なしには奈何することも出来ないやうに思つて、一時も速く呼び寄せる工夫を廻すばかりになつた。早速手紙を書いて出て來るやうに言つて遣つた。彼女は來た。別れてから未だ二月とは絶たないのに、長年連れ添つた後の初めての別れといふので、二人ともそれ程の別居を、身を刻まれるやうに感じてゐた。始めて互ひに抱き合つた時には、譬へやうもない顫動が傳はつた。ああ！深情と歡喜の心よい涙を、どの位多量に飲み干したてあらう！この甘い涙を、何爲もつと度々搾り出す機會が與へられなかつたのであらう。

モチエエへ著くと蘇格蘭の伯爵元帥で、ニウシアアテル知事のキイス卿に、手紙で陛下の領土内に退居するに就て、保護を願ふといふ意味を告げた譯者云。 Earl Marischal 蘇格蘭世襲の式部官兼軍事參議官を勤める家系の名。此の人はその最終の第十代目である。後の本文にいふ如き理由でフリードリヒ王に仕へて、巴里駐劄大使となり、一七五二年からニウシアアテル知事となつた。一時英吉利へ復歸し、後復フリードリヒ王の方から召し返されて其處で歿した。一六九三—一七七八。寛い心の顯れた返事を與れた。その心は、豫ねて人にも知られ、私も待ち設けたものであつた。訪ねて来るやうにと招かれたので、グールドトラヴェルの郡長で、此の卿には格別の信任を得たマルチネエ Martinet 氏と二人で行つた。この高名な行正しい蘇國人の尊威に輝く風采は、私の心を強く憾かさずに置かなかつた。その瞬間から、彼との間には、密な結び附が出来て了つた。であるから、可慕しい心が今まで滲らず續いて來てゐるやうに、彼も私を見棄てる筈はなかつたのだが、例の多くの敵人共が私の慰藉といふ慰藉を悉く剝いて取らうとして、私の不在を好機に、彼の老

1762(51)

1762(51)

衰を侮つて、その目に私を悪く映らせるやうな爲向けをして行つた。
 キイス氏は蘇格蘭世襲の元帥である。弟は有名なキイス將軍、光榮ある一生を終へて、名譽の靈牀に永眠した人である。元帥は弱冠で故國を出た。そしてスチャアアト Stuart 王家に臣隸した廉で死罪を宣告された。しかし、元帥自身が、スチャアト王家の根本精神に、不義暴虐の主潮が流れ通つてゐるのを認めてからは、急に愛憎を盡かして了つた。西班牙の風土が非常に氣に入つて、長いこと其處に住んだ。終には普魯士王の麾下に屬くやうになつた。弟將軍も同じく其の王に従つたので、觀ても、どれ程王に人を視る明があり、待遇を厚くしたかが想はれる。然ういふ待遇をした返報に、元帥から受けた王の利益は、測り知れなかつた。公事の上ばかりでない、彼の至切な友情から得たものこそ、何よりも貴かつた。奔放な共和の精神を湛へたこの偉人の高い心は、友情の軌の外、何物を持つて行つても取り壓へることが出来なかつた。けれど、餘程異つた主義からフリードリヒ王に寄り添つた後は、既うこの王の外は一切の物が眼に這入らぬまでに、遺憾なく征服されて了つた。王は種々の大任を委ねた。巴里へも遣し、西班牙へも出した。早や老年に及

んで休息の必要があらうといふので、ニウシアテルの知事といふ閑散な位置を
 與へた。其の地の民の幸福を圖る、——それを爲事に餘生を樂むといふのは面白
 いことであつた。

ニウシアテルの人民は、衣裳の飾附が奈何の擬物でもよいからもつと金びか
 に、と然ういふことばかりに累けて了つて、眞の充實したものを知らぬ。冗漫しい
 言語を並べてそれで能事が畢るものとしてゐる。嚴肅で常例に拘らぬ人を見る
 と、其の素朴が彼等には傲慢と解られる。眞率が粗暴と愆られ、簡淨が遲鈍と愆れ
 る。敬重してゐない人民の機嫌に取り入ることの出来ぬ彼は、迎合者となること
 を望まぬ。唯彼等の利益をと、それ許りに心を揉み碎くのであるが、それが彼等に
 通じなかつた。宣教師のブチイビエール Petitpierre に就いて滑稽な事件が起つた。
 宣教師は人々が終無き地獄の苦に墮すといふことに異議を唱へたといふので、同
 僚から放逐された。キイス卿は他の宣教師達の強奪に反對したので、味方をして
 貰つた人民があべこべに卿に對して敵意を見せた。そして理に合はぬ苦情の唸
 り聲が、私の行つた時でも尙鎮り切らなかつた。少くも先入見のまゝに動かされ



卿ヌイキ

る人——然ういふ評判を彼は取つた。これなどは、いろいろ被せられた悪評の中
 ても、一番軽い方の部であつた。此の殿しい老人を一目見て、まづ私は、年の手に肉
 を殺ぎ取られた、其の瘦せ、臆うた身體附に、可傷しい心地を催さぬ譯には行かなか
 つた。けれど、生氣づいた晴やかな、そして尊嚴な眼附を直と目成つた其の時は、崇
 高いやうな可頼しいやうな感じに捕はれて、難揉した他の心持は、皆その中へ吸ひ
 込まれて了つた。まづ這箇から口を切つて、極手短かに初對面の挨拶を言ふと、丁
 度一週間以上も其の邸に居た人に言ふと同じ様に、まるで外の事を話して、應答し
 た。お掛けなさいといふことさへ言はなかつた。郡長は何だか強直つたやうに、
 其處へ突つ立つた儘でゐた。けれども、凝と知事公の眼の中を諦視てゐると、人を
 刺すやうな慧敏い光の底にも、何處となく親み易げな色が見えるので、私は、悉皆氣
 を弛めて、遠慮なく彼のソファを半分占領して、無手とその傍へ臂を卸した。と、突
 如彼は打ち解けた風で私に向はれたから、これは、屹度私の無遠慮が氣に適つたの
 だらうと想つた。彼は必と心の裡で、此男はニッウシアテル人とは異ふ。と言つ
 たかも知れぬ。

性情が酷く似てゐると奇態な結果が生ずるものだ。心の暖味といふものも年
 老いては消え果てるものと思はれるに、此の老公のそればかりは私といふものが
 居た爲に、他の怪むほどまで冷めなかつた。鶉狩をするといふやうな口實を設け
 ては、モチエエへ出掛けて来て、銃に手も懸けずに二日も話し通してゐた。連も二
 人は離れてゐられぬ程に、交情が切迫つた。夏になると避暑に出掛けるコロンビ
 エエ Columbiere の知事別邸といふのが、モチエエから六リウウの所に在つた。幾ら間
 が空いても、二週間に一度は必ず其處へ訪ねて行つて、二十四時は一緒に暮して巡
 禮の如くに歸つて来る其の途中も、全く心は彼の方にあつた。以前仙居からオオ
 ボンヌへ通ふ道すがらに味つた感じは、確かに特種のものであつた。けれども、コ
 ロンビエエへ近づく時に感じたそれよりも深かつたとは、決して言ふことが出来
 ぬ。父にも比ふべき慈仁可憐しい義侠心、優しきある人生の見方——それを思ふ
 と我知らぬ涙が往復の途中に溢れ落ちた。私は父と彼を呼び、彼は私を子と呼ん
 だ。隔てなきこの呼び名は、どれ程まで結び付きの固くなつて居たかを語つてゐ
 る。かと言つてそれが、互ひに感じた不足の意味も、一緒に居たいといふ希望の意

味も語つてはゐない。コロンビエエの別荘に泊めて置かうといふことは、彼の熱
 心な希望で、長いことそれを強ひた。終に私は、自宅にゐる方が餘程樂でよいとい
 ふことを言つた。そして彼を訪ねて行くことを、生涯の爲事にする積りである
 附加した。實にと言つた風に、私の率直を彼は汲み知つて、もう二度と其の事は勸
 めなかつた。あゝ我が親しき卿よ。尊き父よ。今も尙この心の顛へは、御身を思
 ふと共に激しくなる許り。それにしても、可忌しいあの蠻賊ども！君を奪ひ取
 つたが爲に、どの様な痛傷が私に残されたと思はれるか。いや、然うでない、然うて
 ない。君は偉大な人である。私の心の動かぬ如く、君も動きはせぬ。永遠に動く
 氣遣ひはあるまい。彼等は君を欺いた。けれど君の心を變ぜしめる力はなかつ
 た譯者云。キイス卿の歿する際、遺言してルッソに懐中時計を贈つたといふこと
 が傳へられてゐる。厚かつた友情を、それが證據立ててゐるけれど、卿の歿後一箇
 月程経つて、ルッソもまた直にその迹を追うた。

キイス卿にも過失はなくはない。聰明ではあるが尙且人だ。優れた洞察の力、
 微細な鑑識の眼、深く人間を觀得る頭腦——然ういふものがありながら、迂闊騙さ

れて、本領に復れないことが往々あつた。氣質が少し異つてゐたのであらう。彼の心の作用から言へば、意外に思はれるやうなことがあつた。毎日顔を合す人達を忘れてゐるらしく見える。かと思ふと、此方が忘れて了つてゐる頃に、偶爾と思ひ出してゐる。注意力が横へ逸れるのに見える。贈物なども氣紛れに、貴い廉いを言はないで、思ひ立ち次第にばつばと遣つてゐる。一人の若いジ、ネエツの男が、普魯士王の下に使つて貰ひたくて、彼の處へ頼みに來た。推薦書は書かずに、豆の一杯這入つた囊を渡して、これを王様へ持參しろと事傳けた。この奇抜な推薦に依つて、王は直ぐと其の使を或る職に任命した。高く水準を抽いた天才と天才との交渉には、一種特有の用語があつて、他人には理會の出來ぬ用を辨ずるのである。斯ういふ風變りな仕打は、譬へば美女の手練とても言はうか、然ういふものに酷く似てゐる。いよいよ此の卿が奥ゆかしくなつて來た。縦し斯ういふ仕打は澤山あつても、それが彼の心持の上に影響するとか、眞面目であるべき場合を取り違へて、友情を疎略にするなどといふことは、決してあるまいと思つたし、事實も固よりその通りであつた。けれども、他に深切を竭す段になると、不斷と同じやうなこの

風の變つた舉動が、依然出て來た。何でもない話であるが、斯ういふことがあつた。モチエエからコロンビエエまでの道程を續けて歩くのは些と私には重過ぎるので、何時も午後に宅を發つて、丁度中間のプロオロまで來ると、其處で一晩泊ることにしてゐた。サンドス Dandoz といふその宿の亭主が、折から伯林の方へ或る重要な願ひ事をせねばならぬと言つてゐた時、私を通して此の卿の手からそれを願つて貰つて欲しいと頼んだ。承知して、亭主を連れて行つた。著くと亭主は應接室で待たして置いて、自分だけその用を頼みに這入つた。けれど卿は何の答もせぬ。その内晝になつて了つた。食堂へ行く途中廣間へ來ると、哀むべきサンドスは、待ち草臥れて、頹然して了つてゐる處であつた。主人がこの男の事を忘れてゐるのであらうと、食卓へ就かぬ前にもう一度頼んで見た。依然答がない。あまり執拗く煩いことを言つたので、當て附けに答もせぬのであらう。然ら私に察してサンドスを可哀さうと思ひつつ黙つてゐた。次の日、歸りがけに、サンドスから聞いて驚いたのは、主人の卿が例の請願書を探り上げたのみか、手厚く彼を款待して歸したといふので、私に禮を言つた。三週間に豫ねて奏請した勅書が、卿の手

からサンドスへ下げ渡しになつた。それは國務大臣から送つて来たもので、國王の印が据わつてゐた。サンドスには勿論私にさへこれに就いては一言も何とも言はないから、もう聞き届けて貰へぬものに思つてゐたのであつた。

キイス卿の話なら、何時までも續けて爲てゐたい。最終の楽しい追憶の絲を手繰ることが出来るのは、全く此の人があるからだ。それから後の自分の生涯には、苦痛と憂愁があるばかりだ。然ういふ記憶は可傷しさに堪へられぬ。喚び覺すにも混亂にしか出て來ぬ。随つて書く事柄に順序を附けるといふことは、出來得られぬ。以後は唯ひよいひよい思ひ出るまゝを書き附けて行くより爲方がな

1762(51)

新しい隠れ家に對する不安な心は、王からキイス卿に賜つた勅答ですぐに除けた。キイス卿が私のために有利な辯護人の位置にゐたことは、誰にも想像は出来る。陛下はそれを裁許せられた許りでなく、十二ルイ(約計百二十圓)といふ恩賜金さへ、私に下げ渡すやうにと卿へ仰せ出された。——何事も隠さずに言つて了ふ。此の命には老人も困り切つて、奈何すれば侮辱の意味でなく、恩典に浴させること

1762(51)

が出来ようかと、金はその儘積立てて置いて、所帯を持てば無くて慥はぬものとの御察しから、炭と薪を供給してやれとの仰せだと私に告げた。地所を自分で見立てるなら、私の所好な様な家をも一軒王が建てて下さるぞと、何氣なく附加して言つた積りであつたが、是だけは卿一個の考から出たものと思はれた。後の方の申し出に心が動いて、片方のの下司張りを忘れて了つた。けれども私は兩方とも辭退して、唯フリードリヒ王を恩人と思ひ、擁護者と思つて見てゐた。今迄彼の不義な成功ばかりを知つてゐただけ、それだけまた彼の榮譽に興味を見出すやうになつて、その後は心から推服せずにはゐられなかつた。平和條約がその後間もなく結ばれた時に私は祝意を表する積りて趣味ある裝飾を造つた。それは自分の住居に飾つた花彩である。王から下賜されようとした程の金を費けて、それで負けぬ心の意氣を見せた。條約の批准も彌よ濟んで、軍事上、政治上に於ける王の光榮は頂點に達したから、今度はまた別な方面で名譽を收められることと思つた。農商業を獎勵して國勢の充實を圖り、新領土に新民を移植し、歐羅巴の恐怖であつたのを利用して、各國權力の平衡を保つ考があられたに違ひない。今はもう劍を鞘に

納めて置いても、何處から襲來する敵もない。それに尙武裝を解かずにあるのを見て、私は斯ういふ憂を抱いた。折角獲た利益が何の成果をも遺さぬのでなからうか。彼の偉大に累することがないだらうか。て私は王に手紙を書いた。斯ういふ質の人の好きさうな、打ち解けた調子で、しかも尋常の國王達の得聞き分けぬやうな、神聖な真理の聲を傳へて行つた。上下の懸隔を撤り棄てて了つたことは、彼と私の外には誰も知つた者がなかつた。キイス卿にすら知らせなかつた。王へ差し出す手紙を事傳けるにも、緊乎封をして渡すと、別に中の事柄を訊しませず、そのまま差し立てた。王は返書を與れなかつた。後に元帥が伯林へ行つた時、王は唯一言、ルソオ奴おれに叱責を喰はせた。と御意あつたさうだ。其から考へると、那の手紙は惡意に解されたものらしい。熱情の溢れは、一個の郷先生の暴言となつて了つたのである。言ひ現し方に氣を注げず、謹んだ調子で書かなかつたら、恐らくそれは事實であつたらう。けれども、筆を把るに至つた最初の感情に訊いて貰へば、理非は解ることだ。

モチエエに住居を定めて幾らも経たぬ中に、もう孰方からも平安を亂される惧

れがないことを確めたので、私は彌よアルメニア Armenia 人の著る服を纏ふことにした。これは今に始まつたこととてなく、始終その考があつて、モンモランシイなどでは、殊に消息子を使ふ必要上、室内に閉ぢ籠つてゐる場合勝ちて、長い衣物を著た方がどの位便利か知れぬといふ感じがし通してあつた。と、一人のアルメニアの裁縫師が、親類を訪ぬに度々モンモランシイへ來たのが動機になつて、この新しい衣物を拵へようといふ氣が起つた。世間が何と惡口を言はうとも、それは可怖しく思はなかつた。でも斯ういふ異つた服装であるからと、一應リクサンブル夫人の意見を聽いて見ると、それは至極よからうといふことであつた。早速アルメニア服の粗末なのを一著縫はした。折から身の上に事變が起つた時、爲方なしそれが靜まるまで著ずに仕舞つて置いた。それから幾月経つて病氣が始まり、消息子の入用に迫られて來たので、危険も早や去つた折からであつたから、著ても差聞ないと思つた。土地の牧師にも相談すると、差聞ない段ではない、會堂へ著て出ても、些とも不都合にはならぬといふことであつた。そこで、胴衣、表衣、略帽、帯などを著けて見た。此の服装で祈禱にも出た。後に知事公の邸へ行つても、別段の

不便は認めなかつた。異つた私の扮装を見て、閣下が唯一言、

「Salamaleki!」

然う言つただけであつた(譯者云。土耳其族の挨拶語)。それからもう外の衣物は一切著なかつた。

1762(51)

文學は全く棄てて了つた。出来るだけ平和な素直な生活を導いて行くこと、それより外の事は頭脳に無かつた。一人である時は疲れを知らぬ、——甚だ無聊に居ても疲れを知らない。何處かに空隙があれば、すぐ空想が其處へ出て来て、それで一廉の爲事が出来る。堪へ難いのは懈い室内の無駄話である。對坐に他と坐つて、口ばかり動かすのを見てゐる程辛い辛抱はない。表へ出るなり、散歩でもするなり、足と眼が外の事をしてゐるから尙可いけれど、静と腕組して、天氣が奈何の蠅が飛んだのもつと嵩じると粘々し切つた辭儀挨拶の取換つこ、——それを見聞するのは責苦を受けるやうに辛い。そこで考へ附いて線帯を編む稽古をしよう



オソールの服アニメルア

社会に革命を送る。前、社会を改造する前に、
社会の行を流るを祈す。自ら自身の行流るを祈す。
自ら自身に革命を送る。
女と自らもや！女人の「よめ」は女に教しよ。女は女に教しよ。

と思つた。これは餘りな世間嫌ひになつて了はぬ爲であつた。他を訪問する時は椅褥を持つて行つたり、又は女達ののやうに戸口へ出て、外を通る人々と話し交しながら觀望と手爲事をした。これが無駄話の間の懈い思ひも助かり、近所の女達と面白く時間を送ることが出来た。

1762(51)

女達の中には人好きのする、伶俐な人が幾らもあつた。その中にニウシアテルの検事長の娘で、イザベル・デヴェルノア Isabelle d'Ivernois と云ふのがあつた。知己になる價値は十分にある女と見た。ときどき良い意見を聽かしてやり、事があつたら面倒も見てやるといふので、彼女にも決して損は無かつた。だから今日では一家の良妻になり濟してゐるが、言はばその知識も、良人も、幸福な生活も、皆私の賜物と言つてよいのである。その代り私も慰藉といふ賜物を彼女から受けた。物悲しい冬の夜、病み悩んで苦み腕いてゐる私を慰めると言つて、長い長い一夜を、テレエズと一緒に、快活な心を裏無く開いて見せるので、つひ釣り込まれて自づと時を忘れて了つた。「お父さまと彼女が呼ぶ。娘と私が呼んだ。この呼び名は今に變らず續いて来て、懐かしい感じを起させる。彼女にも同じ感じがあるであらう。

社会に革命を送る前、社会を改造する前、
社会の行を流るを打破する前、自身自身の行流るを打破せよ
自身自身に革命を送る前、
女と自分もや、女一人のよさを、此処に教し、より水は、あつた。

1762(51)

と思つた。これは餘りな世間嫌ひになつて了はぬ爲であつた。他を訪問する時は椅褥を持つて行つたり、又は女達ののやうに戸口へ出て、外を通る人々と話し交しながら蹠蹠と手爲事をした。これが無駄話の間の懈い思ひも助かり、近所の女達と面白く時間を送ることが出来た。

女達の中には人好きのする、伶俐な人が幾らもあつた。その中にニウシアアテルの検事長の娘で、イザベル・デヴェルノア Isabelle d'Ivernois といふのがあつた。知己になる價値は十分にある女と見た。ときどき良い意見を聴かしてやり、事があつたら面倒も見やるといふので、彼女にも決して損は無かつた。だから今日では一家の良妻になり済してゐるが、言はばその知識も、良人も、幸福な生活も、皆私の賜物と言つてよいのである。その代り私も、慰藉といふ賜物を彼女から受けた。物悲しい冬の夜病み悩んで苦み腕いてゐる私を慰めると言つて、長い長い夜一夜を、テレエズと一緒に、快活な心を裏無く開いて見せるので、つひ釣り込まれて自づと時を忘れて了つた。「お父さまと彼女が呼ぶ。娘と私が呼んだ。この呼び名は今に變らず續いて來て、懐かしい感じを起させる。彼女にも同じ感じがあるであらう。

然う私は望みたい。編んだ線帯を何かの益に立てようと思つて、近所の若い女達が嫁入する時の贈物にした。それには、出来た子供は自分で養育せねばならぬといふ條件を添へた。イザベルの姉は一つ貰つてその約束を履んだ。イザベルも同様にそれを貰つて、無論約束は果す積りのところを、然う出来ぬやうな境遇になつた。綿帯を贈る時に、手紙を一通づつ附けて遣つたら、姉の方へのは世間に廣まつて了つた。妹の方のは然ういふことはなかつた。友情といふものは、聴しい音を立てずに續くものである。

此の頃の近所交際に就いては、管々しく書き立てる氣もないが、ビッリイ、大佐のことは話して置かねばならぬ。この人は山の方に別荘を持つて、毎年の夏に屹度出掛けて行つた。其の筋では氣受の良くない人で、現に知事公とすら仲が面白くなくて、未だ遇つたこともないとか聞いてゐた。て、餘り懇意にしようと思つてゐなかつた。けれど向うからは遇ひに来て、なかなか疎略にしどころでないから、這箇からも抛棄つとくことも出来なかつた。往復が續いてゐる間には一緒に會食などもした。ペイルウ氏とは此の人の家で相識になつて、それから次第に

1762(51)

1762(51)

交情が深くなつた。これも話さずに置けぬ人の一人である。

ペイルウ氏は舊亞米利加人で、スリナム Surinam の司令官の息子であつた。父の跡を繼いだシャンブリエ Chamberier 氏といふのが、ニウシアテルの人で、それがペイルウの父の寡婦を妻に娶つた。母は再度寡婦になつたので、息子を連れて、二度目の良人の郷里へ移つて來た。ペイルウは獨息子の上に家が裕かた、母親には鍾愛され、教育も立派に爲上つた。浅いながらも一通りの修養を積んで、美術の鑒賞も可なりに行けて、殊に自分では頭腦のよいのを自慢にした。冷い思索家じみた和蘭人風の眼附、薄黒い顔色、包ましく閉ぢたやうな氣分——然ういふ點で、自慢の欺かぬことを證據立てた。齡はまだ若いけれど、聾て痛風に罹つてゐた。すべて

の擧止の重々しく沈んで見えたのも、それゆゑであつた。議論好きの質であつたが、耳が聞えぬので、餘り口数は利かなかつた。其の外貌に動かされて、私は、

「思想家だ。智の人だ。友達に持つて損は行かない。」
斯う獨言ちた。私へ話し掛ける時でも、些とも氣兼ねる容子がなから、一層自分の眼鏡の違はなかつたことを確め得た。私の事や、著作物についても餘り口

1702(51)

にせず、自分の事は殆んど何も言はなかつた。相當の思想があつて、言ふことは何れも理に合つた。その正確と公平とに私は牽き寄せられた。キイス卿ののやうな、高い心、微妙な心は見られなかつたけれど、素朴の一點は確かにあつた。これが、ある爲に、面目は立派に支へられた。私は心酔するといふ程でもなかつたが、價値ある人と見て、近づいた。近づいて行く間に、何時となく友情を成り立たせた。オルバック男爵が金持だからと言つて、隔障を置いた前例を、今度は全く忘れて了つた形であつた。もと／＼それが私の過失であつたと思ふ。富裕な境涯を樂む人は、誰も心から私の主義を愛するといふことに迷ひ出した。

長いこと、ペイルウに會はなかつた。私は、ニウシアテルへ全く出掛けなくなり、彼は一年に唯一度、ビッライ大佐の山の家へ来るだけであつた。ニウシアテルへ私が行かなくなつたに就いては、子供らしい話がある。それを話さう。

普魯士王と、ニウシアテル知事の保護を受けて、迫害を隠れ家て避けることは出来なかつた。來たけれど、俗衆や、市の吏員や、宣教師などの不平を避けることは出来なかつた。佛蘭西が始めて騒いで見せてから後は、何かしら私を虐めるやうな事をしないと

1762(51)

濟まされぬと言つた風になつて了つた。皆て迫害者の眞似をしないと、前の迫害が不法だつたといふことになると思つたのであらう。ニウシアテルの宣教師の一連は、本國政府の參事院を撞突いて、私を奈何かさせて了はうとした。それが成功しなかつたので、今度は更に此の市の當事者の方へ持ち込んだ。と市では私の著書を禁止して、あらむ限りの侮辱を敢へてした。此の町に居住の意思はあつても、許すことはならぬといふ意味を匂はせた。それをまた公言した。「メルキッウルの紙上は、途方もない妄論と偽善説とで満たされた。眼の開いた人達は、默笑で濟ますやうな事も、愚民を懲つて敵意を挑發てさせるだけの力はある。でも私がモチエエに住はれるやうになつたのを、自分達の寛容に由るのだと言つて、平氣で恩に著せた。其の實は何の力にもなつてゐなかつたのだ。金を出すと云へば、辨て空氣を量り賣にでもしたことであらう。王からの保護は彼等の素志でない。それ故掛つて邪魔しようとしてゐながら、私には反對に保護を受けてゐられるのは自分達の好意に由るので、言つた顔附をした。力の限り仇をして、名譽の上に絶大な毀損を及ぼしたが、それでも到頭目的は達しられなかつたので、爲方が

ないから隠しに、此の土地に止まることは大目に見逃して置いて遣るから有難く思へと言ふ風になつた。鼻の尖で笑つてゐればよかつたものを、意氣地なくも、迂闊にニウシアテルへ出掛けると、可厭な思ひをさせられるのかと恐れて、得行かなかつた。其の間が二年近くも續いた。彼等は、何事も外部の刺撃を受けて動くのであるから、自身には何事も爲出す力はない。だから其の徒輩の爲る事に注意を拂ふといふよりも、その人々を顧みないと言つた態度であつた。それに威望と權勢と富を崇拜することばかりを知つて、心その物は何の修練も光輝もないやうな徒輩は、逆も材能の士を敬重せねばならぬといふことを知る筈がない。況して然ういふ人達を凌辱めることは、自らを凌辱めるに當るといふことなぞ知る筈がない。然うも思つた。

或る村の村長に數度の瀆職の廉で罷められたのがあつた。その村長が彼のイザベルの良人、ザル・ド・トラウルの代理官に斯ういふことを言つた。

「ルンオといふのは優れた心の男だといふことだが、それが果して事實なら、連れて來て見給へ。僕が會つて試験してやるから。」

1762(51)

1762(51)

斯う言つた調子の人間が、幾ら不満の色を見せたからと言つて、氣を悪くする者もあるまい。

巴里でも、ジ・ネエヴでも、ベルヌでも、又ニウシアテルでさへも、那いふ爲向をされた揚句に、此の土地の牧師から好意を寄せられようとは、意ひも掛けなかつた。けれどポア夫人が此の人に紹介して呉れたので、手厚い款待を受けた。しかし此の地方の風として、誰彼なしに世辭をよくするといふことになつてゐるから、盛んに持囃されるといふことは、何の意味をも成さぬ。それでも新教會に歸依した後、言ひ、今住む土地が新教會でもあるところから、若し自分の信教を告白しなければ、宣誓に背き、市民たる義務を忘れることになるのであつた。それゆゑ禮拜式にも出た。一方では又、私が聖臺の前に立つても、拒みを受けるのではないかといふ恐れもあつた。ジ・ネエヴでは議會が騒ぎ、ニウシアテルでは宣教師が騒いだ。だからこの牧師が自分の會堂内で、安閑と私に秘蹟を授けるといふことは到底望まれぬことと思はれた。で私は聖餐式の時が近づいて來たので、モンモラン Montmorlin といふ宣教師へ手紙を書いて、自分は深く新教會を信ずるものである、聖體拜領のこ

1762(51)

とは熱心に望む所といふことを告げた。そして信仰箇條に就いての辯難を避けるために、同時に又、自分は教理に對しては何等の格段な解釋をも欲しないといふことも知らせた。手配りが済んで安心した。モンモラン師は私の望まない豫行の宗論たげは見合はせにはすまい、しかしそれで何事も私の方の過失とならずに済んで了ふことと思つた。ところが意ひ掛けなくモンモラン師が来ていふ言葉に、聖體拜領のことは私の申し出通りにして許すのみでなく、彼は勿論、先輩達まで私をその仲間に入れることが出来るのを此の上ない名譽に思ふとあつた。道徳意外に打たれたことは曾てなかつた。嬉しさも固よりの事である。地上の孤立物、これが私の悲しい運命と思はれた。殊に苦難の場合に於いて然うであつた。公敵の宣告を受け、迫害に身の置き處もなくなつた私が、どうか斯うか同胞の間へ落ちつくことが出来たと言へるやうになつたのは、この時、難い慰藉を捉へたからであつた。そして私は言ひ知れぬ心ときめきを感じつつ、主の尊前に進んで聖體を拜領した。その感激の涙こそ、主の喜んで受け納れ給ふべき決心ともなつたてらう。

— 628 —

1762(51)

暫くすると、知事公の處からブフレル夫人の手紙を届けて來た。これは多分知事と相識のダランベールを通して送られたものであらうと思つた。何にしるモンモランシイ以來、此の夫人から始めて寄越した手紙であつた。それを讀むと、モンモラン師へ書いた私の手紙のこと、殊に聖體拜領のことについて、嚴しく私を責めてゐる。私はジ、ネエツの旅行以來、始終プロテスタンであることを公言し、且和蘭大使館附の會堂へ公然出入したけれど、誰も何とも思はなかつたから、彼女が甚麼積りて然ういふ攻撃を持つて來たのかは、更に領會出來なかつた。ブフレル伯爵夫人といふ人が、宗教上の事で私の信念にまで立ち入らうとするのは、可笑しいことと思つた。が、眞意は知れぬにしても、潔白な心で言つたものとは知れてゐるから、何と書いてあつても、侮辱されたやうな氣はしなかつた。そして自分の感想を書き列ねて、穩かな返事を出した。

それは可いとして、一方で私を誹毀するやうな印刷物が、相變らず世間を傳はり傳はりした。情深いその記者達は、各地方での私を待遇し方が、餘り軟か過ぎると難じた。羣がる狗の吠え叫ぶやうな此の聲は、始終黒幕で掩はれた奥の方から聞

— 629 —

1762(51)

えて來た。そして其の聲には前兆的な響を帯びて、一種の警報とも聞き做された。私は唯言ひたいだけ言はして置いて、自分には沈著いた態でゐた。其の中にソルボンヌ大學までが攻撃を始めたといふ噂を聞いた。眞逆と思つた。ソルボンヌがこの事件に首を突つ込むといふのは奈何いふものであらう。私が加特力でないことを、大學が確めようとするのであらうか。それだけの事なら、既う世間で承知し切つてゐる筈だ。ては忠誠な加爾維尼教徒でないことを證明しようとするのか。それを證明して何になるのだ。畢竟餘計な御勅勞で、此方の宣教師達の身替に立つと言つた譯にしかならぬ。私は其の印刷物を見る前に、これはソルボンヌ大學の名を濫用して世間に頌めたものに相違ないと思つた。後にそれを讀んでからも、一層わが考の誤ならぬことを信じた。けれども、後にその眞實を疑ふ餘地のなくなつた時には、其の大學の教授連を、ブチット・メエゾン(巴里なる昔の瘋癲院)へ送られねばならぬ人達と信ずる外はなかつた。

1763(52)

一七六三。——また一つの印刷物には、もつと酷く胸を衝かれた。それは、常に敬重を忘れなかつた人、殆んど盲する程の堅久な心を嘆美した人から、出たためであつた。巴里の大司教が、私を異端と認めて、教書を發したのがそれである。

これには答辯する義務があると思つた。我が尊威を傷けずに答は出来ると思つた。前に波蘭土王と論戦したのに、場合が似てゐた。ヴォルテールがする様な、人體に關する口汚い噛み合ひは可厭だ。争ひは嚴かな争ひがしたい。して又私を攻撃する人に、飽くまで此方を尊敬する態度がないならば、辯論の口を費すことは御免蒙る。此の教書は奈何してもエスイタ派の手で捏ち上げたものに違ひないと思つた。當時彼等は悲境に喘いてゐたけれど、其の本文を見ると、依然昔ながらの彼等の本領として、薄倖な者を窺り惱めることを忘れなかつた。そこで私の方も同様昔のとほりに、署名者は尊崇しながら、書いた物は粉碎するといふ方針に出ることも出來た。成績は旨く行つたやうに思ふ(Lettre à Christophe de Beaumont)。

モチエエの逗留は氣に入つた。それで極まつた生活費さへ都合が出來れば、自分の餘年はもう此處で經たして了つても惜しく思はなかつた。すべて此の邊は



モエチのエの隠

1763(52)

第十二卷

物が貴い。それに所帯を壊す、新所帯を構へる、家財を賣り拂ふ、モンモランシイ出發以來の費用が嵩むしたために、以前の計畫が總くづれに崩れ立つ時であつた。僅か許り残りの資金も、日に日に煙になつて行つて了つた。二三年と經たぬ内には、無一文になり果てねばならぬ。偕其の後はまた書籍でも書かないと、恢復す分則といふものは外に何も無い。其の賣文も、餘り辛さに最早見限つて了つてゐた爲事なのであつた。

癡ては身の上の雲が拭ひ消される時もあらう。狂夢から醒め來つた公衆が、我が迫害者等を愧ぢ入らせる時もあらう。然う妄想した私は、奈何でもして其迄の處を支へて遣つて行きたいものと許りに心を碎いた。然ういふ時機さへ捉へたら、幾らでも爲事が見附かるであらう。もつと自由に可好なのが擇べるであらうと思つた。その爲に復音樂辭典を引き出して來た。十年も費つた爲事で、餘程抄取つてゐた。修正の筆を加へて、清書さへすればよいといふ迄になつてゐた。此の節になつて受け取つた書物だけで、その修正は十分出来る。同時に著いた書類は、これは亦自分の回想記を書き出す便宜を與へたものであつた。回想記はこれ

から全力を投げて取り掛る積りの大爲事であつた。手紙の類は綴ぢ本へ寫し取りに掛つた。記憶を是に頼らせて、事件と、時日の順序を見出す爲であつた。この目的のために保存の必要ある分は、これ迄に擇り分けて置いた。十年間に亙つて連絡に切れ目はなかつた。それを今清書しようと思つて、並べて見て驚いたのは、一七五六年の十月から翌年三月までの六箇月分といふものが、奈何してか抜け落ちてゐた。その書簡集の中には、確かにデドロオ、ドレエル、エビネエ夫人、シノンンオ夫人などから來たのが這入つてゐたに違ひない。それがあれば皆揃ふところを何處にも見當らぬ。奈何したといふのであらう。この書簡集がリクサンブルル邸へ預けてあつた間に、誰か手を掛けた者があつたのか。奈何も分らぬ。それを仕舞つて置いた室の鍵は、まさしくリクサンブルル公が持つてゐるのを見掛けた。夫人達からの手紙の大部分、デドロオのの全部には、日附が這入つてなかつた。餘儀なく記憶を頼りにし、若しくは當てずつぽうに次第を附けて見たので、ひよつとすると前後したかも知れぬといふ憂があつた。そこで一つには彼の脱落の部分と補ふべき手紙が出て欲しいといふ考で、日附のないにはそれを入れて見

たりして、もう一度手紙を悉皆調べて見た。この試みは無益であつた。脱落は奈
 何しても事實らしい。手紙は確かに盗まれたものと見る外はなかつた。誰が何
 の爲に盗んだのか。まるで心當りはない。その手紙は、何れも未だ彼方此方へ葛
 藤を結ばぬ頃、ジッライの作で夢中になつてゐた時分の物ばかりで、誰が讀んでも面
 白くない筈のものだ。デドロオが揚足を取つてゐるのや、ドレエルが愚弄してゐ
 るのや、シッソソ夫人や、未だごく仲の善かつたエビネエ夫人が、友誼を語つてゐ
 るのや、然ういふ下らぬ手紙ばかりであつた。這麼手紙が誰に入用があるのか。
 何に使はうといふのか。是から後七年経つまでは、この紛失事件に容易ならぬ下
 心が隠れてゐることに氣附かなかつた。

紛失が事實と分つて見ると、まだ外にも有りはせぬかと、更に種々の草稿も調べ
 て見た。果してそれが有つた。殊に私は物覺えが悪く、それから延いて未だ
 澤山原稿の方に紛失のあるべき事を疑はせられた。その中で一番に氣附いたの
 が、感覺的道德の草稿、エツアアル卿の冒險の抜き書の草稿。この二番目の草稿は、
 打明けて言ふと、リクサンブル夫人に疑を掛けた。斯ういふ草稿を私に届けた

のは夫人の召使ひのラロオン君であつた。其の草稿に心を懸けるといふ者は、
 彼女の外に思ひ出されない。然し、もう一つの草稿と紛失した數通の手紙とは、彼
 女に取つて何の益に立たう。殊に手紙は捏造でもしなければ、幾ら邪曲な企みを
 運らしても、それで私を陥れるといふことは望まれない事であつた。元帥の堅い
 正直と篤い友情とは善く承知してゐるから、間違つても此の人を疑ぐるやうなこ
 とは出来なかつた。かと言つて、嫌疑を夫人の上にはかり掛けて置くことも出来
 なかつた。紛失事件に就いては、發頭人を探し出すのに、長いこと疲らされた。一
 番有理と思はれたのは、ダランベエルに目星を附けることであつた。ダランベ
 エルならリクサンブル夫人に取り入つてゐたから、預け物を引つ掻きまはして、原
 稿でも手紙でも、所好なのを胡魔化すに譯はない。それを種に私を困らせようと
 都合が好ければ自分の利益にしよう、自由であつた。表題が「感覺的道德」といふ
 ので、何か唯物説でも書いてあるものと思つたらしい。是が若し唯物論でもあれ
 ば、甚麼駁撃を彼がしたかは容易に想像され得る。けれども、一度其の草稿に眼を
 通してさへ見れば、思はくの外れる事は知れてゐたし、且私は一切文筆を擲つこと

に決心してゐるから、それを盗まれたからと言つて、狼狽へもしなかつた。今迄別に暴き立てもしなかつたが、彼の竊盗は是が始めては決してなかつた(原注)。彼の著書「音楽原理 Éléments de musique」の中にもその明證がある。「百科辭典」の原稿として音楽に關する記事を送つたのは、原理が出る幾年か前の事であつた。「原理」の中には、其の私の記事から澤山剽竊をしてゐる。「美術辭典 Dictionnaire des beaux-arts」と題する彼の著は、奈何いふ計畫のある物か知らぬが、その中にも逐語的に私のから抜いて取つた所が幾つもあった。しかもそれは「百科辭典」に載つて出る長い前の事であつた。何事かそれから起つて来るかも知れぬ、ぐらゐの事は考へたらうが、盗まれた事は臆て忘れて了つた。そして「懺悔録」を書く爲に残された材料を集めに掛かつた。

長い間、ジ・ネエツの宣教師の一派、少くも其處の市民や平民が、私に對して發せられた命令書は、勅令の趣旨に背くものだと言つて、反抗するであらうと考へた。それに一向騒ぎ立つ容子もなかつた。なかつたと言つて、それは唯表面だけのことで、實際不平の氣は、既う一面に廣がつて、爆裂の機會だけを待ち飽んでゐた。友達

や、友達顔する人達は、速りに手紙を寄越して、議會の方は名譽を回復するやうに取り做すから、其處へ来て彼等の首領に立つては、奈何かと勸めて來た。でも自分が行つては、其處に混亂が起らずに濟むまいと思つて、勸めに應じなかつた。而已ならず、曩日、自分の郷里では、如何な民事の争があつても、決して首は入れまい、と堅く誓を立つたこともあるから、過激な危険な道を踏んで、祖國に歸參するよりは、侮辱は侮辱で續かして置いて、自分は永久故郷から失はれた人になり果てて了つたと、遺憾は少しもなかつた。教令の違反、これには一般平民の利害が夥しく關係するのであるから、抗議が屹度、彼等の方から堂々と切り出されることと、實際私は待ち望んだのである。けれども、那樣態度は全く見られなかつた。平民の首領とある人達も、切羽詰るまでは、進んで損害を償はせるといふ風がなかつた。皆徒黨は結んだけれど、沈黙を守つた。議會はまた私を人民に嫌はせるために、口善惡ない者どもに使喚け、宗教に熱心な餘り、亂暴に及んだと言はう爲に、似而非信者どもを煽つたりするので、私はまるで罵詈雑言を浴びてゐる有様であつた。にも關らず、皆知らぬ貌てゐた。

1763(52)

一年の餘といふものは、誰か不當な處置に對して争ふものがないことかと、待ち盡したが効はなかつた。同胞の市民に棄てられたと見た私は、感謝の値もない祖國を見棄てて了はうと決心した。祖國といふのは名許りて、今迄其處に住み著いたこともなく、利益も恩義も受けたことはない。しかも私の方では祖國らしい尊重を拂ふことを怠らなかつたのに引き替へて、皆は申し合せをしたやうに、可嘲しい限りの取り扱ひを自分に向けた。第一口を利くべき人達が沈黙してゐるではないか。て其の年度の首座代理官、確かフアアル Fauriol 氏に宛てた手紙で、自分はジュネウの市民権を放棄するといふ意味を嚴かに知らせた。不幸な境涯にゐると、敵人が殘忍の餘り、私に不遜な態度を取らねばならぬことは往々あつたが、その度に程よく自制して中和を失はなかつたやうに、今度の手紙も敬意を忘れぬ程度で書いた。

此の私の處決は、市民達の眼を醒ました。私を援けないのは自分達の利益を忘れるのも同じであつたと氣附いて、急に加勢して來た時は既う遅かつた。彼等には彼等の損害があつた。それを私のと一緒に結び合はせて、十分言ひ前のある種

1763(52)

種の抗議の材料にした。佛蘭西の當局に味方があると知つた此の國の議會は、ますます氣むづかしい反意を現して來た爲に、裏面に壓制の計畫があることは容易に看透された。それだけに市民達は、抗議の内容を擴げもし、餘計に力も入れた。斯ういふ争論は、様々な小冊子となつて出た。けれども、何の解決にもならなかつた。する中現はれたのが、野より *Lectures écrites de la campagne* と題する書簡體のもので、議會に左袒して極度に筆が舞はしてあつた。是で沈黙させられた抗議派は、一時見る影もなく壓潰げて了つた。此の刷り物は筆者のすぐれた手腕を永久に記憶させるものであつた。それは検事長のトロンシオン Tronchin——聰慧で事理にも通じた此の共和國の立法行政に明い、其の人の筆に成つたものであつた譯者云。トロンシオンといふ同名の人が本書に二人ある。第八卷、十卷に出たのは醫者のテオドオル・トロンシオン Théodore Tronchin、此處のはその從兄弟のジャン・ロオベール・トロンシオン Jean-Robert Tronchin) *Siluit terra* (地は沈黙せり)。

一七六四。——抗議派は復最初の元氣に歸つて、駁論を試みることになつた。そして此の時に稍他を顧みかせるやうなものが出来た。けれども、勝利の見込があつて、ああいふ敵手と取組み合の出来さうな者は私の外にはないといふ眼附で、皆私の方を眺めた。私自身にも、その感じはせぬことはなかつた。舊の同胞はこの事件の源頭に私が立つたといふ關係から、私の筆で彼等を援けるのを義務であるやうに思はせた。それに勵まされて、野よりの駁論を書かうとした。「野よりを振つて、山より」と題を附けた。それをごく秘密にして書いた。此の事件の打合會をトノン Thonon で開いたときも、抗議派の首領達は、その方て起草した駁論の原稿を見せたが、自分の「山より」は既に脱稿してゐたにも拘らず、彼等には話もしなかつた。これは其の筋の者でも、私の敵人でも、此の噂をちらとも耳にしたならば、何か出版上に妨害を加へるかの懸念があつたからで、けれども佛蘭西では、出版になる前にこの事が傳つた。しかし何處からも妨害は來なかつた。て奈何してこれ程の秘密が洩れたらうといふ疑を挟むところ迄行かなかつた。瑣末な事に止るが、是に就いて知つただけ話して見よう。臆測したこともあるけれど、それは腹の中

1764(53)

へ葬つて置く。

モチエエへ流れて來てからも、前の仙居やモンモランシイに居た頃と同じく、訪問者を受けた。けれども、其の人達は、十中八九まで、今迄とは種の異つたのであつた。以前で見ると、來る人も、來る人も、大抵自分と似たやうな藝能か、趣味か、持論かを持つてゐて、それを鏝に寄つて來るのであつたから、此方も口の出せるやうな話題に有り附くことが出來た。モチエエではそれが翻然と違つた。殊に佛蘭西の方から見える人は格別であつた。多くは役人か、さもなければ文學には、盲人達人の著書などは、まるで讀んだこともないといふ人達。其の癖口では、此の俊傑この英才、この偉人……に目のあたり接して、驚嘆を縦にしたばかりに、三十里、四十里、六十里、乃至百里さきの處から來たなどと言つてゐる。これ迄は親しい人達の敬重で、然ういふ恥知らぬ諂諛を斥けることも出來たが、此の時からはもう其の的になる外はなかつた。訪問して來る人の中に、名も告げず、職業も知らせぬのが多かつた。その人達と私との知識の間には、長い距離があつた。私の諸作を讀みもせず、開けて見もせぬのが大部分であつた。然うした種々な譯から、彼等に話し

1764(53)

出す言葉の接穂がなかつた。唯話が向うから出て来るのを待つてばかりゐた。奈何いふ積りて遇ひに來たか、それを知つてゐるのは彼等だけであり、又それを私に知らせるのも彼等の義務であつたからだ。斯ういふこととて、客の方では知らぬことを教はつて嬉しいか知らぬが、私の面白いと思ふやうな對話が交されなかつたとは容易く察しられる。疑懼を知らぬ私は、向うから適當と考へて尋ねる問題は、何に依らず隔意なく答へた。と、客は大抵の場合、私の境遇に伴れた有らゆる微細な點について、私が持つだけの知識を握つて歸つて行つた。

女王の御馬司で女王聯隊の騎兵大尉ファン・フェリス氏が訪ねて來たのなぞが、好い例になる。此の人は幾日もモチエエで静と逗留して、私がラ・フェリエル La Ferrière まで行くのに、自分は徒歩で馬の轡を引つ張つて跟いて來たのはよかつたが、さて私と合ふやうな話といへば、二人ともフェル嬢をよく知つてゐるといふことと、二人ともビルボケエをして遊んだことがあるといふことと、それだけより外に何一つも無かつた。

此の人と前後して、また別の訪問を受けた。これはまた普通と異つてゐた。二

1764(53)

1764(53)

人の男が、荷物を載せた驛馬を一頭づつ牽いてやつて來た。宿屋へ泊つて、驛馬は自分達で世話した。それが會ひたいと言つて寄越した。風體から考へて、界限では専ら拔荷賣と睨んだ。拔荷賣が私を訪ねて來た、然ういふ噂が聴しくなつた。が挨拶の爲方、然ういふ類の人達でないことが知れた。けれど、拔荷賣でなくても、何か山師に違ひなからうといふ疑は霽れなかつた。其の疑ひも程なく去つた。一人はラ・ツウル・ヂ・バン La Tour du Pin 伯爵と呼ばれたモン・トオバン Montauban 氏で、ド・オフ・ネエの武官であつた。も一人はカルバン・トラス Carpentras のダス・チエ・パス・ド・シエ氏も、尙且士官であつた。聖路易十字章を佩けて見せることも出來ないで、衣兜に入れて持つてゐた。この兩君はごく人好きのする、そして修養ある紳士であつた。だから對話も調子が合つて面白く取り交された。佛蘭西の紳士には思ひも掛けぬ、ああいふ旅装をして來たといふことが私の氣に入つた。これから此の人達が急に好きになつて、馴染が重るままに、その度を深めた。交際はそれ切りでなかつた。今でも交情は渝らずにゐる。時々向うから會ひに來た。けれども、初めての時によいと思つたあの徒歩訪問でなく來た。が段々する中に、彼等と私の

間には興味の間隔があることを見出した。物の見方が私のはごく縁遠いものであることに氣附いた。私の著書が彼等に懐愛されたとは思へなかつた。彼等と私の間には眞の意味での交感を感じないかの感じがした。では何物を求めに來たのか。何爲ああいふ扮装をして遇ひに來たのか。何爲幾日も幾日もあわして逗留してゐたのか。何爲幾度も出直して來たのか。何爲私の容に那程なりたがつたのか。斯ういふ疑問は當時は起らなかつたが、後になると時々起らずにゐなかつた。

二人の爲向けに動かされた私の心は、前後を忘れて弛み解けた。取り分けダヌチエ氏の物を隠さぬ顔附は私を喜ばした。彼と手紙の遣り取りもした。「山より」を印刷せよとした時も、小包が和蘭へ行く途中を待ち受けてゐる人達を瞞ますために、寧ろ彼に委託しようかと思つた。彼はいろいと注意した。多分考へる所があつてであらう。アヴィニオンなら出版が自由であることも話した。其處で何か出版させる物でもあるなら、自分が世話しようとも言ひ出た。それを幸ひに、最初の原稿を郵便で續けさまに彼の方へ送つた。かなり長い間、その原稿を握

1764(58)

1764(58)

り締めて置いてから、悉皆私の方へ送り返して來た。孰の書店にも引き受ける者が無いとのことであつた。爲方がないから復ライへ頼むことにした。原稿は迹から迹からと送り出して、前の分の領收證が來ぬ内は、次のは決して手放さぬことにした。本が出る前に、それが宣教師達の溜に見出されたといふことを知つた。ニウシアアテルのエシエルニイ Eschery の話にも、オルバクが彼に知らせたとか言つて、山の人 De l'Homme de la montagne、と題する本が私の手て出來たといふやうなことがあつた。那樣本を書いたもぼえがないことを彼に斷言した。實際書きもしなかつたのだから眞實を話した積りであつたのに、一方の山よりが出る時、嘘を吐いたと言つて眼を刺して怒つた。原稿が他に讀まれたと信ずるやうになつたのは、斯ういふ譯からである。ライに暗い點は少しもない。疑ひは外へ持つて行くより爲方がない。そして原稿の小包が郵便局で開封されたと見るのが、一番實らしく思はれる。

此の時分にもう一人相識が出來た。もつとも最初は手紙だけの往復であつた。ニイムのリリオオ Liliand 氏がその人である。巴里からの來狀に、自分の圖書館に

飾り附ける目的で私の胸像を大理石で製することをル・モアヌ Le Moine に頼んでゐるから是非横顔のシルウエットが送つて貰ひたいと書いてあつた。斯う言つて來たのを自分を圓めるために發明した諂諛と見ても餘程旨く行つた。私の心の裡は斯うであつた。自分の圖書館に私の大理石像を飾る——然ういふ人なら屹度私の著書に親みが深からう随つて私の説を奉ずる人に違ひなからう。然うして私と彼との心持が互ひに諧調を成すならば私を愛する人であることは言ふ迄もない。斯う思つた。斯うまてに考へてそれで私が征服されなかつたら嘘だ。其の後ラリオオ氏と顔を合した。忠實に私の世話を焼いたり扶助して呉れたりする人と見た。けれども彼の一生に讀んだ僅かな書物の中に私の書いた物が一冊でも這入つてゐたらうかといふことが奈何しても疑はれる。圖書館なども果して有るのか奈何か覺束ない。有つたところて彼に必要なものであるともないとも知れたものでない。胸像はル・モアヌの作は作であるが申譯ばかりに石膏を捏ねた醜いものを一つ製へて如何にも私の顔が正に摹れたと言つた風にちやんと私の名前が附けてあつた。

佛蘭西人が一人ゐた。私の氣質と著書とに牽き附けられて來たと見える、年若なリムウザン Limousin 聯隊附の士官で名はセギエドサン・ブリンソン Ségurier de Saint-Brisson と言つた。技倆も才も評判の好い人で、巴里を始めとして其處等中で時めかした。今でもおほ方然うなのであらう。私の身に悲運が墜ちるといふ前年の冬に、モンモランシイへ訪ねて來た。相手をまて生々とさせるやうな鮮かな感情を彼に見出した。その後モチエの方へも手紙を寄越した。故らに嬉しがらせる積りなのか或は實際、エミールを讀んで然ういふ氣になつたのか、束縛を解き放つたやうな生活を開くために職を罷めて、指物屋の下職を始めたとか知らせた。彼には一人の兄があつた。同じ聯隊の大尉であつた。母は固より信神疑りの上に、何者か偽善家に煽られて、兄の方へ愛を傾けても、弟はまるで構ひ附けぬのみか、不信者めと極め附けたり、私と近しくするのを以つての外の罪でもあるやうに嗷鳴つたりした。斯ういふ事で彼の心は傷けられたために、母と分れてああいふ決心を取つた。エミールの行つた道を實地に歩いて行つて見ようといふのであつた。

1764(58)

この性急に愕かされた私はすぐ手紙を書いて、それを思ひ止まらせようとした。力の限りをうち籠めたやうな訓戒を遣つた。幸ひにそれが肯かれた。彼は再び母に對する責を思ふ人となり變つた。隊長の手許まで差出した辭表も取り戻した。用心深い隊長は、この青年士官に熟慮の時を與へた積りて、辭表はその儘握り締めてゐたのであつた。由ない事を爲掛けたと氣附いた彼は、それにも懲りず、又一つそれ程突飛てはない他の爲事を考へた。けれど私はその爲事を不快に思つた。それは文士の仲間に入つたことであつた。彼は續けさまに二三の斷片物を出した。手腕のない人とも斷じられぬやうなものが出來た。が私は、此の爲事を續けさせる爲に彼を推奨したといふ點で後悔することは要らぬ。

後に私を訪ねて來たから、連れ立つてサン・ピエール Saint-Pierre 島を逍遙うた。其の時に見た彼は、モンモランシイの時と異なつた人であつた。何となく矯飾に囚はれたやうなところがあつた。初めは餘り氣になかつたが、遂で思ひ出して厭な心持になつた。私が英吉利へ行く途中、巴里を通つたときにもう一度サン・シモン Saint-Simon 館へ訪ねて來た。彼が華やかな社會に呼吸する人であつたこと

1764(58)

や、リックサンブウル夫人としばしば出會をしてゐたことなどは、其の時に始めて知つた。トリイに私が居た頃は、何の消息もなかつた。近所にセギエ Dequier といふ、彼の親戚の娘があるのに、其の娘を通してすらも、私を尋ねさせるやうなことはなかつた。娘も固より私には、善い心をしてゐなかつた。一言で言へば、サン・ブリッソンの崇拜も、丁度ファン氏の關係と同じ事で、永續はなかつた。未だしもファン氏の方は私から著した思といふものもなかつたが、サン・ブリッソンの方は幾らか義理を感じなければならぬ。ああいふ心得違ひを爲出來さうとしたのが、眞の冗談からてもなかつたのなら、それを思ひ止まらせた私に功がないとは言へまい。

客はジッネエツからも來た。ドリック父子は私に看病をさせに來た。父の方は途中で悪くなり、息子はジッネエツを發つ時から病氣に罹つてゐた。二人とも私の處へ來て全快を待つた。宣教師達親戚の人達、僞信神家達、その外、雑多な階級の人達が、ジッネエツからも瑞西からも來た。それが皆佛蘭西から來た人達のやうに、私を讚美したり、愚弄したりするのでなくて、責めたり詰つたりした。其の中で一人、嬉しく思つたのはムルツウであつた。來れば三四日は泊つて行くことになつ

てゐたが、實はもつと引き留めて置きたかつた。

皆の中で一番ねんばり強い、聴かぬ氣の男で、煩く附纏つたのはイヴェルノアといふ人であつた。佛蘭西の亡命者で、今ジッネエツで商賣をしてゐて、ニウシアアテルの検事長の親類になる。このイヴェルノアが年に二度ばかり、わざわざ私に會ふために、ジッネエツからモチエエに來た。其の度に幾日も續いて朝から晩まで傍を離れない。散歩には引つ張り出す。下らぬ進物を寄越す。無理に機嫌を買ふ。考想も、好みも、氣分も、すべて私とは遠く離れてゐるとも知らず、何がなし私の身に關つた事には口を出したがつた。一生の間に一冊と書物を讀んだことのなさうな人間であつた。私の著書に甚麽事が載つてゐるか、知る筈もない。私が植物に熱心し始めてからは、その方の趣味もないくせに、いつも採集に跟いて來た。向うも物を言はず、私も口を噤んだ切り、すたすた歩いた。グウモアン Goumou's の酒場で、全三日も私と辛抱競べをする勇氣があつたには驚かされた。此處で彼を意屈させて、それでもつて甚麽に私の意屈させられたかを思ひ知らせたら、彼を逐つ拂ふ手段にもならうと考へたのが無駄になつた。それでも尙しつくだく絡繞るの

1764(53)

が、奈何しても私には引つばせなかつた。この執念の原因すらも看抜くことが出來なかつた。

斯ういふ人達との關係は爲ることなしに成り立つたものであつたが、其の中に唯一つ省けぬのがある。こればかりは心から楽しく面白かつた。その對手は一人の年若な匈牙利人、始めにニウシアアテルへ來て、私がモチエエに住居すると、間もなく又同じ土地へ移つた。彼はサウテルン Southern 男爵と呼ばれた。チウソヒからの紹介も、尙且其の名て來た。背の高い、好い恰好の姿であつた。温徳な、そして世馴れた質を見せた。ニウシアアテルへ移つて來た譯は、私に親炙して、道徳的な青年時代を鑄固めたい爲であるといふことを誰にも告げた。私にも其の意味に取れた。相好も、語氣も、態度も、すべて彼の會話とひつたり喰ひ合つてゐるやうに思はれた。此の青年に可愛くない點は一つもなかつた。慕つて來た動機も見上げたものであつた。であるから、若し此の青年の指導を顧みなかつたならば、大責任の一つが壞れることに自分は考へねばならなかつた。私の心は半分だけ他に許すといふことを承知しない。私の親愛と信用を、纏て彼は全部取り込んで了

1764(53)

つた。二人は分つべからざるものになつた。何時の散歩にも、私の傍にあつた。その出歩きが面白くなつたらしい。キイス卿の邸へ連れて行つて、此の上なく目を懸けてもらつた。未だ佛蘭西語が本當に使へないから、話すのも書くのも、すべて羅甸てやつた。私の答は何時も佛蘭西語であつた。斯う二種の國語が取り交されるといふことは、決して會話の流暢を妨げ、生氣を殺ぐことにならなかつた。家族の事なども話した。種々遭遇した身の上の出来事に就いても聽いた。維因の宮廷の話などは、随分微細なところまで行つた。斯うして二年ばかり親密な間柄が續いたが、如何な試験にも色を變へない、ごく優しい性質が常にあつた。ごく素直な、そして都雅な心ばへもあつた。身の舉止には包まじさがあつた。話には謙遜があつた。概括して言へば、生ひ立のよい人の、あらゆる特色が具はつてゐた。彼を尊重せぬ譯に行かなかつた。従つて親愛せずには置けなかつた。

青年と親愛の真中に、ジ、ネエツのイヴェルノアが手紙を寄越した。若い匈牙利亞人が私の傍へ寄つて來たについて、用心せねば不可ぬ、青年は佛蘭西の方から附けられた探偵に相違ないことが知れたと書いてあつた。其の前に私は、或る者が頻

りに動靜を探つてゐることや、佛蘭西の領内へ誘き出して係歸へおつ陥めようとしてゐることなどを、土地の人達から警戒された折からだつたので、その愕きは一層であつた。

莫迦々々しい然ういふ警戒めかしたことを言ふ人達の口を、一度に皆噤ましてやらうといふ心から、何氣ない貌をして、ポントアルリエエ Pontarlier まで散歩にとサウテルンを誘ひ出した。其處へ著いてから、これを讀んで見ろと言つて、イヴェルノアの手紙を突き出した。と同時に、

「サウテルンといふ人は、僕の信用する心を見たかあるまいが、世間の奴等へ見せしめの爲には、僕が誰を信用してゐるかを明瞭にしなくてはならない。」

緊乎と彼を抱き締めて、斯う私が言つた刹那には、言ひ知らぬ心持がした。たしかに胸に響く一種の感じがあつた。迫害者達には其の味が解る氣づかひはない。又虐げられたる我儕からそれを奪ひ去ることも出来はしなからう。

サウテルンが探偵であつたとか、裏切したとか、然ういふことを信ずる私でない。しかし私は騙された。私が隔てぬ心の底を見せた時ですら、彼は静と自分の胸の

裡を掩うて出まかせの嘘ばかり吐いた。奈何いふ話であつたか、郷里の方へ歸らないと濟まぬ義理があるといふやうなことを假作して話した。て私は勸めてすぐにあちらへ發たした。もう匈牙利へ著いた時分であらうと思つて訊いて見ると、ストラスブルグにゐるといふ話であつた。ストラスブルグなら始めてもなかつた。其處の或る家庭は、彼のために風波を立たせるやうな事になつた。その家の主人は、彼と私の關係のあることを知つて手紙を寄越した。そこで私は出來得る限り盡力して、若い妻は節操の方へ、サウテルンは己の責務の方へと、互ひに戻つて行くやうにした積りてゐた。既う男女の縁はふつつり絶えて了つたらうと思つてゐると、あべこべに兩方から近づき合つて了つた。本夫までが深切千萬に、若い男をまたまたわが家へ引き込むやうなことをした。それから私はもう何も言はずに了つた。この自稱男爵には、いろいろの嘘で自分が擔がれたことを知つた。名前からしてサウテルンと言ふのではなかつた。實はサウテルンシム Gautersheim であつた。瑞西では男爵にして了つたが、これは自分では振り廻さなかつたから、責める程でもない事と思つた。が、一個の紳士であつたことだけは確

かなやうだ。であるから、聰慧いキイス卿も、曾て匈牙利に居たことがあるとはいふものの、始終彼に對しては、對手が紳士であるといふ眼をもつて、それに相應しい款待をした。彼が發つと間もなく、モチエエで泊りつけの宿屋の下女が、彼に孕まされたといふことを大聲に言ひ徇らした。下女といふのは、ごく下等な阿婆摺であつた。サウテルンといへば、界限では行ひの正しい、量見の堅い人といふので、通り者になつてゐたばかりか、自分でも清淨を誇りとした程の人間である。この沙汰が其處等あたりを震はせたのも、道理と謂はねばならぬ。この地方の若い女達は、今迄彼に心の限りを傾けてちやほやしたことが、莫迦を見せられたに當つて、口惜しいと怒り猛つた。私は取り亂す程に激昂した。金は一切自分の方から出して、サウテルンシムに安心させるために、阿婆摺の口を留めて了はうと思つて、さまざまに心を碎いた。彼に遣つた手紙では、妊娠の事は君に關係あるものと思へぬ。多分假作であらう。君や僕の敵人が寄つて集つてああいふ芝居をさしてゐるのだと思つてゐればよい。斯う私は保證してやつた。その女と、女の影に隠れてゐる奴等の

化の皮を引剝く積りでもう一度此地へ出掛けて来ればよいに思つてゐた。ところが彼の返事の弱氣を見て、意外に思つた。女の住む教區の牧師に宛てて、彼は年度の事件を揉み消すやうにして欲しい意味の手紙を出した。然ういふことが解つたので、もう私は手を退いて了つた。さほど意志の弱い男が、あれ程私と親密にした最中に、能く自主の心を忘れないで私を欺き果せたものだ、と驚かずにゐられなかつた。

幸運の幻に憧れて、サウテルシイムはストラスブルグから巴里へ流れて行つた。けれども其處には災厄ばかりしかなかつた。彼は Pecori (我過矣を意味する手紙を寄越した。有弊に以前の親交を思ひ返して、私も憐れを誘はれた。若干金を送つて遣つた。次の年、巴里を通つたときに復邂逅つたが、依然たる境遇にゐた。けれどもラリオオ氏とは親友になつてゐた。奈何して知己になれたのか、舊馴染か、それとも新知か、然ういふことまでは解らなかつた。二年経つて後の彼は、またストラスブルグの人であつた。其處から手紙も来た。そして終に其處で死んだ。雜と私との關係は憊うであつた。彼のアヴンチュールで知つてゐる事はこれだけ

1764(53)

である。薄倖な青年の一生を可傷しく思ふとともに、良家の子であつたことは何處までも私は眞實と思ふ。行跡の放縱であつたこと、それは彼の墮ちて行つた境遇がさせた業だと信じた。

親疎ともに、これだけの交友がモチエて出来た。一方に生じた大きな缺損を埋めるとして見れば、幾ら出来ても足りぬのであつた。

1764(53)

損失の第一はリクサンブール公爵であつた。長い間醫者に悩まされた揚句に、到頭其の犠牲になつた。病氣は痛風であつた。醫者は自分達の力で痊せるものやうな手當だけした。ああいふ病氣といふことは故らに否定した。

夫人の氣に入りてあつたラ・ロオシ、君が言つて寄越したことを眞實とすれば、この記憶すべき残忍な事實は、顯榮の悲惨といふことを證明するものである。

この好貴人を失つたといふことは、私に取つて絶大な悲哀であつた。佛蘭西で本當の友人といふのは、此の人より外になかつたのだ。優婉な彼の性質は、彼の位

置を忘れて同等人の如くに親ませた。二人の結び附は、私が彼處を去つた爲に斷れなかつた。前と異らず手紙も來た。それでも私の不在と逆運といふことで、幾らか親みの度を冷ましたのでないかと思はれた。國々の剩され者になつたやうな私などを始終同じ調子で大切にしているといふことは、宮人として爲惡いことに違ひない。そののみならず、夫人の方が公爵よりも餘計に實權を握つてゐるといふことは、私の爲に便利な事てなかつた。私の去つたのを好い機に、公爵の心へ私を傷けるやうなことをしたらうとも思つた。彼女にしても、幾らか懇切な色は見せてゐながら、その色の褪せて行くことを次第に隠さなくなつて來た。瑞西へ手紙を呉れたことは、四五回もあつたらうか、其から後は、ひたりと來なくなつた。偏信が迷妄か、然ういふ心持にてもならぬ以上は、彼女の情に、冷却以上のものがあることを、見通さうとしても、通せなかつた。

ヂッシエヌ書店の店員ギイは、私がモンモランシイを出て後も、しばしばリククサンブール邸を訪ねてゐたが、手紙を寄越して私といふものが元帥の遺言状の中に入れたといふことを言つて來た。如何にも道理らしく信を措くに足りるとよ

り見えなかつた。私は、その知らせを怪まなかつた。遺産を受けたものか、どうかといふことで、氣がいろ／＼に迷つたが、よく事情を考へ合して、甚廢物であらうと、私はそれを受けることに極めた。一つには友情とは縁遠い階級に居る人でありながら、心から私に其の情を傾けた清廉な人への名譽を表する積りでもあつた。虚實は知らず、其の後遺産のことについては何も聞かなかつたので、その義務を果すことは要らなくなつた。それに會て自分の懐愛んだ人の死に乗じて或る利益を貪つて、自分の操守に傷けるといふことは、本當は辛いところであつた。吾儕の友ミッサアルが最後の病氣の時にも、ルニエが私に勸めて、此方の都合のよい心情を吹き込む爲に、いろ／＼氣を配つたのに對して、感謝の意をミッサアルが見せたから、それを利益に向けては、といふことであつた。て、私はルニエに向つて、「いや君。今吾儕の友達が死なうといふ間際に、吾儕には悲哀な、——然し神聖な義務がある。それを利益づくに見ることは願はない。僕は誰の遺言状に拘らず、名前を入れて貰ふことは眞平だ。少くも友人間では決して望まない。」元帥が自分の遺言状のこと、又その中へ私の爲を圖つてこれ／＼の事をして置か

うと言つたことや、前篇で話したやうな答を私がしたのなどは、丁度その時分のことであつたのだ譯者云。前篇一七頁參照)

第二の損失は一層可傷しく償ひがたいものであつた。女の中の女母の中の母——其の人の死であつた譯者云。ワレンス夫人を指す。彼女は一七六二年七月三十日に六十三歳で死んだ。年の重荷のある上に、不健康と逆運の強壓を受けて、遂に祝された人達の住家に向つて、此の涙の谷を旅立つた。彼處へ行けば、下界で行つた正善の楽しい追憶が、とこしへの報償となるのである。嗚呼やさしく情餘れる靈よ。行つてあのフェロンや、ベルネエや、カチナアや、その外もつと卑い位置に居ながらも、彼等と同じく眞實な同情心に對して胸を打ち開いたやうな人達を訪ひ給へ。行つておん身の情が結んだ果實を味ひ給へ。そして他日おん身の傍に座を得ひと望んでゐる養ひ子の爲に、その座を設けて待ち給へ。おん身の不幸を終めた神は、おん身をして此の養ひ子の不幸を眼のあたりに見る苦しさを除き給へるものとして、まだしも悲哀の中に幸福を得られたことを喜び給へ。最初の自分の慘狀を繰りかへすことは、彼女の胸に悲を齎す道理と思つたから、瑞西に著

いて後は一度も書信しなかつた。けれど、其の様子が聞きたさに、コンジエ氏へは手紙を送つた。彼女が他人の苦痛を救けることを罷め、同時に自身の苦痛を終へたといふことを聞き知つたのも、此の人からであつた。聽ては私の苦痛も終結を告げるであらう。けれども、若し來世で再會が出来ないと思ふと、其處で期待する圓滿な幸福といふ觀念が、想像裡から消えるかも知れぬ。

第三の、そして最終の損失——此の後にはもう損失と感ずるやうな友もないから——は元帥のそれであつた。元帥は死んだのではない。けれども、忘恩者どもの爲に心を竭すことに疲れた彼は、ニウシアタルを立ち去つて、それぎりもう遇ふことはなかつた。彼は尙生きてゐる。そして私の身後にも、尙長生されむことを望む。生きてゐられるから、地上での愛著的の、全く私と絶縁したのでない。一人だけ私の友情に値する人が残つてゐる譯だ。友情の眞の價値は、唯蔵するは在る。吹き込まれる友情は眞正の物でない。とにかく併し、彼の友情から溢れて出て來た樂しさを私は失つた。て私の愛は残つてゐても、關係の絶えて了つた人達の部類へ入れる外はない。彼は英吉利へ歸つた。これは國王の慈悲を乞うて、前

1764(53)

に没収された財産の回復を謀るつもりであつた。吾儕は再び提携しようとの計畫をして漸く袂を分つた。この計畫を私と同じやうに彼も喜んでゐた。アバヂイン Aberdeen の近傍にあるキイヌホオル Keith-Hall の邸——其處に身を落ち著けることが彼の希望であつた。それが定まると、私が出掛けて行つて一緒にいる豫定であつた。が、此の手筈は、成功を望むには、あまりに旨過ぎた。果して彼は蘇格蘭に止らなかつた。普魯士王の禮を厚くした招聘は、再び彼を伯林に引きつけた。そして何爲私其處へ一緒にに行かなかつたかといふことは、すぐに分る。彼は出發前に、私への迫害が起りさうだと見て、特に歸化免狀を下げてくれた。これさへあれば、國を逐はれる憂もないことと思つた。ヴル・ド・トラヴェルのクウヴェエ Convet の會所は、知事の例に倣つて無料で國民籍の證明書を呉れた。然ういふ例は今までに始である。斯うして立派な市民に成り果せた私は、國法に據る放逐から保障された。王といへども、奈何ともすることは出来ぬ。けれども一般人民の中で、常に法律に最大の敬意を拂ふ人の迫害を被るのは、必ずしも合法的な手段に依つてなかつた。

1764(53)

此の頃に受けた損失の中へ、マブライ師のことをも加へねばならぬとは思はぬ。彼の兄弟の家に住居したことのある私は、彼と關係がなかつたとは言へぬけれど、あまり親しい仲でもなかつた。而已ならず、私の名の方が高くなるに従つて、私への感情の色が確かに褪めて來た。山よりが出てから、始めて彼の惡意の徴候が見えそめた。彼の書いたといふサラダン Saladin 夫人に與ふる書簡は、シ・ネ・ウ・中を廻つて行つた。その中で彼は、此の私の作を評して、狂妄なデマゴグの自暴騒ぎだと言つた。師に對する敬重の念と、彼の聰明に對する估價とは、かう言つた亂暴な書簡が彼の手に成つたことを容易に許さなかつた。此の事件に就いても、私はいつもの眞率な處置を取つた。その手紙の寫しを彼に送つて、世間ではこれを彼が書いたと評判してゐるといふことを告げ知らせた。返事がなかつた。その沈黙に私は驚かされた。其の驚きよりも、その手紙が實際マブライ師の手に成つた物で、私から行つた寫しを見た時に、大方ならず氣を呑まれたといふことを、シ・フ・ン・ソ・オ夫人から傳へ聞いたときの愕きは、どの様であつたらう。縦し彼の言つた事を假に眞實としても、誰に對する義理といふてもなく、何の必要に迫られたといふて

もなく、ほんの一時の氣まぐれから、不幸のどん底に困憊してゐる者を更に酷く悩ませさうといふだけの目的で、始終己が好意を寄せてゐたにも拘らず、又その好意に戻らぬことを力めてゐたその者をば、世間へうち出して攻撃するといふ法はないではないか。暫くして「フシオン」の對話 Dialogues de Phocion」といふものが出た。唯私の作物中から抜き集めたものとしか見えぬものであつた。實に不遜な、廉恥を缺いたものであつた。此の書物で見ると、私に對して全く敬意を持つてゐないことが分る。此の後最深の仇敵となるものは此の人であらうといふ感じもした。彼の力には遙かに及び難い「民約論」又「永久平和の兩篇」について、私を容認しなかつたことは疑ふところもない。更に思へば、サン・ピエール師の抜抄を私に作ることを望んだのも、如彼旨く爲果せはすまいと豫想したためであつたかも知れぬ。

1764(53)

説話が進めば進むほど、だん／＼と順序關係が亂れて來るやうに思ふ。晩年の激動は、頭の中て事件の次第を整理する餘裕を與へない。混亂なしに話をして行

1764(53)

くことは思ひも寄らぬ。それ程多端でもあり、紛糾してをり、又無興味でもある。それ等から感銘させられた唯一の強い印象といへば、恐ろしい秘密のそれである。これが爲には事件の原因が隠された。もう一つには、自分の突き落された悲哀しい境遇の印象とである。説話は、此の後はもう遮二無二進むより爲方がない。漫ろに思ひ出づる儘を談るばかりだ。今話をしてゐる時分には、「懺悔録」の事ばかり考へてゐたから、誰を擱へても輕率にその事を話した。此の試みに邪魔を入れたがるものや、邪魔する甲斐性のある者などは、猶以て有る道理がないと極め込んでゐたものである。たとひ那樣者があると思つたところで、自分の思念し、感興する何物をも匿しては置けぬ性分だから、それが爲に急に口を嚙むといふことも出来なかつたのである。ところが暴動が起り、瑞西から逐はれ、著作の妨げをするやうな手の中に引き渡されることになつて了つた。——その眞の原因は、全く「懺悔録」の話が世に廣まつたことにあつたと解れるやうだ。

もう一つの計畫があつた。前の書物すら恐れる程の人達からは、決して一片の好意をも望むことの出来ないものであつた。何かと言へば、自分の著作全集の出

1764(53)

版である。同じ私の名を署した書物の中で、眞の自著を擇り分けて、私の名譽を毀損し侮辱する爲に、敵人等の偽作したものを世に知らせることは、必要な事であつた。それに此の出版は、糊口を資けるために最も簡單で且正常な手段でもあつた。謂はばこれこそ生活上唯一の資本であつた。著述業は罷めて了つたし、懺悔録は自分の生存中には出されぬ性質の物ではあり、外に一スウの金も這入る途はなしかと言つて金は使はずに濟まぬから、後期に書いた物からの収入がなくなれば、それきり途方に迷ふ外なかつた。この理由から、未完成のまゝであつた音楽辭典の脱稿を頻りと急いだ。これからの収入は現金で百ルイ(約計一千百圓)と年報酬額百エキウ(約計百五六十圓)といふのであるが、一年に六十ルイ(約計六百圓)の餘も使ふ者に百ルイは知れたものである。年金の百エキウと言つた處で、食客や乞食みたやうな者等にかゝつて搾られる吾儕に取つては、無いも同様の金である。ニウシアアテルの商人の仲間が、私の全集を出版したいと申し出た。そしてルギイヤア Reguilla といふ里昂の出版業者が、奈何してか知らぬが、其の監督をすると言つて、仲間の中へ這入つて來た。こちらの目的を果して遺憾ないほどに當然な、

1765(54)

そして満足な契約が相互の間に結ばれた。既に印刷になつて出た物と、未だ原稿のままの物とを合して四折判で六冊になるだけの材料はあつた。出版上に就いては精々注意を與へるといふことも私は請け合つた。これに對して向うからは一千六百リイブル(約計六百五十圓)づゝの年報酬と、即金で一時に一千エキウ(約計千二百五十圓)の支拂をするといふことになつた。

一七六五。——いよいよ契約に署名するといふ間に、山よりが出た。この極端な著作と忌々しい著者とに對して起つた物凄しい爆聲に、書店は縮み上つた。それきり出版の事は立ち消えになつた。

此の最後の作の結果と、佛蘭西音楽に就いての書簡のそれとを比較するところだが、それは後の書物が嫉視を買ひ、且私を危険に瀕せしめながらも、敬重の念を喚び起させなかつた時のことである。この最後の作が出てからは、斯ういふ不敵な奴を生けて置くといふことを、ジ、ネエツや、ヴェルサイユでは怪しからぬことに思つ

たらしい。佛蘭西の辨理公使に刺衝を受け、検事長に召集された評議會で、私の著作物に宣告を下した。殘虐極まる悪名を附けて、死刑執行人に焚かせても穢はしいといふのであつた。その上にも道化た言ひ草を附け加へて、これに辯駁を與へることは固より、何事を言つたところて、すべて此方の名譽が廢る譯だと言つた。その奇怪な文句を此處に轉寫したいのだが、生憎手元がないのみか、その中の一語をも記憶してゐない。私は衷心から讀者の誰にも望みたい。諸君にして眞理と正義に熱する以上は、山よりの全篇を更に通讀せられたく思ふ。其の本の著者を陥れむ爲のあらゆる刺撃的な、殘忍な侮辱を受けた後でありながら、書中には唯克己寛恕があるばかりで、あることは、屹度讀者の胸にこたへることと信ずる。しかし、その中の何處と言つて誹毀に涉る點がないから、辯駁を加へることも出來ないし、正理には固より反對する譯にも行かないから、遂に彼等は憤激の度が高いあまりに辯駁し得ないのだといふ風を裝ふに至つた。それに若し彼等が其の中の動かすべからざる論據を掴へて、それを侮辱と解したならば甚だしい侮辱を感じたにちがひない。

1765(54)

1765(54)

辯護の位置に立つた人達も、この可思しい宣告に何等の抗議も提出せず、唯その意に遵ふのみであつた。彼等はこの作を楯として、其の裏に匿れてゐながら、山よりの一篇に誇りを見せることのかはりに、自分達の意氣地ない事を見せた。自分達の論據は皆黙つて此の中から取り出してゐるにも拘らず、又この作の結末にある忠言を正しく守つたればこそ、安全と勝利が得られたにも拘らず、彼等の防衛の爲に、又彼等の切なる希望に依つて書かれたこの作に、正當な名譽を拂はなかつた。作中の句をも引かず、書名をすらも口にしなかつた。それだけの義務を私の方へ擦り附けた。義務は果した。そして最後まで、國のために、又彼等の味方として務めた。彼等にはもう私を顧みるな、自分達の喧嘩には、自分達の外に味方はないものと思へといふことを言ひ入れた。彼等は直に此の言葉を容れた。それからもう紛紜の仲問入はしなかつたが、唯あまり頑固を通すと、佛蘭西から苛い目に遭はねばならぬ事が知れてゐるから、始終彼等を平和に戻す心配だけはしてゐた。が、その事はつひに起らなかつた。起らなかつた理由は、よく分つてゐる。それは今未だ言ふべき時機でない。

1765(54)

「山より」がニウシアテルで起した影響は最初ごく穏かであつた。この作を一部モンモラン氏に送つた。彼は快くそれを受けて、何の反対もしずに讀んで了つた。私と同じやうに病氣をしたが、回復すると私を訪ねて来て、何気なく話して行つた。けれども一種の風評が聞え始めた。何處てか知らぬがこの書物が焚かれて了つたといふ事であつた(譯者云)。焚書は巴里での事であつた。同時にヴェルテールの「哲學辭典 Dictionnaire philosophique」も同様の目に遭つた。ジネエツからも、ベルヌからも、多分ヴェルサイユからも、沸騰の聲がすぐニウシアテルへ届いた。ヴェルテールへは言ふまでもない。此處では社會の表面に立つ人達の未だ動き出さぬ前に、或る祕密の手で愚民を煽ることが始まつた。

私は此の地方の人民には、どうしても愛されなければならぬ譯がある。何處に住居をしてもいつも然うだつたが、物は十分に振舞つて遣る、無告の民は助けてやる、誰が頼みに来る事でも、それが正義に叶ふ以上、力の限り身を盡して働いてやる、周圍の人々とは度に過ぎるまで親みを重ねる、そして及ぶだけは、少しでも他人の反感を買ひさうな懸隔を撤しようとなつた。しかし然ういふ事では、誰にと

1765(54)

知れず煽られてゐる人民の、だん／＼激しく私に向つて亢奮して来るのを制する譯には行かなかつた。田畝の細徑はまだなご、大道の真中で、大びらに私に恥をかきせることすらある。一番重く恩恵を施してやつた者が、一番深く私を目敵にするやうになつた。恩恵を受けつゝある最中の者までが、有繋に自身は顔を得出さぬながらに、外の者等に使喚けた。其の様子を察すると、私の恩恵に絶らねばならぬほど、自分の位置を見くびられた復讐をすると言つた風に見えた。モンモランは一切何事も知らぬ貌で、まだ打つて出ては來なかつた。けれども聖餐式が近づいて來ると共に、私の處へやつて來て、式へは出ない方がよからうといふ。とはいへ自分は私に他意ある者でないから、平和を破るやうなことはせぬと請け合つた。この挨拶はまことに變だ。この言葉はブブレエル夫人の手紙を憶ひ出させた。が、聖體拝領を私がする、しないといふことが、誰の爲にそれ程の重大事であるのか、解らなかつた。然ういふ謙遜は謙遜にならぬのみでなく、不信といふ又別な託辭を人民に與へる道理と思つたから、宣教師の言葉を斥けて了つた。宣教師はそのまゝ、今に後悔するぞと言つた意味の風を見せて、まづい顔をして歸つて行

つた。

彼は自己の一存で私を聖餐式から禁制することは出来ぬ。それには最初私を許した公會々議に問うて見ねばならぬ。其の方からの反対がない以上、私は禁制を受ける心配なしに、公然式に列ることが出来る。モンモランはその會議に私を召喚する命令を受けて、其處で私の信仰を訊して見た上で、若し承服しなかつたら、破門せよとした。破門の事も會議の結果、多數者の賛成を得なければ出来ぬことであつた。けれども、長老の名で此の會を組織してゐる田舎人等は、議長としては尙且その宣教師を戴き、實權は言ふまでもなくその手に握られてゐるのだから、勢ひ異なつた意見のあらう筈もなく、殊に宗教上の知識に至つては、覺束ない宣教師よりも一倍怪しくて見れば尙のことである。て私は召喚を受けて出廷することになつた。

若し十分口が利けて、そして——斯ういふ言葉が使へるなら——ベンが口に膠着してゐたらうものなら、これが私に取つて甚だに幸ひな機會だつたらう。どんな勝利を博し得たらう。如何に優勢に、如何に無造作に、この哀むべき宣教師を、

1765(54)

1765(54)

それに従ふ六名の田舎人等の見る前で、小氣味よく取り控いてくれただらう！ 權威に逆上させた新教僧は、宗教改革の一切の原理を忘れて了つたのであるから、それを彼に憶ひ出させ、そして口を噤ませる爲に取るべき途は、唯最初の「山より——」愚かにも攻撃の鋒先を向けて来た——その山よりに注釋して聽かせるばかりであつた。主文は既に準備されてある。ただこれを敷衍すれば事足りる。しかも敵手は狼狽の氣味でもある。いつまでも愚圖々々と守勢に安んじてゐるまでもあるまい。彼の知らぬ間に、彼の警戒を加へる暇もない中に、忽ち攻勢に轉ずることは譯もない。威信なき宣教師達の無智と輕率とで、彼等自身に私が希望するやうな場所に立たせてくれたお蔭で、思ふさま彼等を粉砕することが出来る。がしかし、どうしてそれが出来よう？ まづ口が利けなくてはならぬ。當意即妙の口が利けて、思想發相、言語を適處々々に喚び出して来て、始終沈著に、冷靜に、一瞬でもまごつくやうな事があつてはならぬ。咄嗟に口の利けぬことは、十分承知し切つてゐる私が、どう思つて見たところ、爲方のあるものでない。曩にジ、ネエザで自分の利方になつてゐる衆議の席で、しかも前以て私の發言に賛成を表せられ

る筈になつてゐたその席で、まるで一言も口を開き得ぬまでの壓迫を感じた。今度はその反対に相手は全く底の知れない知識のかはりに詐術で行かうとするやうな人間で、這箇の氣附かぬ中に縦横の罟を張つて、どうでも斯うでも缺點を見附けて取つて押へようとしてゐる事は確かである。斯ういふ位置は考へて見るほどぞら恐ろしい。どうしても旨く切り抜けられさうもないから、又別な手段を案じ出した。問答を逃れる爲に、裁判の席で演説でもしようと思つて、その腹案を練つた。これなら然う大した事でもない。まづ原稿を書いて、一生懸命にそれを丸呑することに取掛つた。頻りに頭へ詰め込まうとしては、吃り／＼同じ文句を何遍でも繰り返してゐるのを、テレエズが傍で聞いて莫迦にした。とう／＼原稿を諳記するまでになつた。郡長が王家の官吏として此の裁判に臨席する事も、モンモランの戦略と酒罎に拘らず長老達の多數は私の肩を持つてくれる事も知つてゐた。又自分に都合のよい理窟もあり、眞實もあり、正義もあり、王の保護議會の權威、それから今度の裁判開廷を興味を目で見えてゐる眞の愛國者達の好意——さういふものも控へてゐた。いづれも自分に氣勢を添へないものはなかつた。

1765(54)

その日の前夜に論稿は胸に納めて了つた。諳誦して見ても大丈夫であつた。其の夜中頭の中で繰り返し／＼して見た。が朝になるとすつかり忘れて了つてゐた。一語一語にも躓く。もう多勢の前へ出た氣になる。狼狽へ出す。口籠る。逆上になる。いよいよ出廷といふ間際になると、元氣が全然消え盡して了つた。てそのまゝ、家に居て、裁判所の方へは大急ぎに届を書いて、病氣を假託に——實際その時にはこの懸念もあつたから——逆も終日の辛抱は困難である旨を言つて行つた。

1765(54)

宣教師は届に弱つて、裁判を延期した。その間にも彼は、自分はもとより、手下まで使つて、色々手を廻して長老達を抱き込まうとした。長老達は彼の命令よりも、自分達の良心の聲に聽いて、孰の宣教師のいふことも賛成しなかつた。彼が暗室から引き摺り出して來た論據が、どんなに力強くこの人達を感じさせたか知らぬが、それで一人も味方に引き入れることは出来なかつた。尤も最初から味方黨と目されてゐた二三の人だけは別である。郡長と、非常な熱心で此の事件に働いたピッライ大佐とは、他の人達を引きとめて、本分を忘れさせぬやうとした。て

モンモランが破門を宣告しようとした時には、彼れ自身の法廷が、多数の決議で見事反對に立つた。斯うなると彼も最後の策を取つて、人民を煽動する外なかつた。そこで同志と語り合して、いよいよ公然爲事を始めた。しかも度々有力な勅書や、議會の命令書が發せられたにも拘らず、奈何しても私は此の地を去らずにゐられなくなつた。それ程彼は成功した。私が靜と居ては、反つて保護してくれてゐる郡長の身が危かつたからである。

此の事件の顛末は非常に込み入つてゐて、とても回想と回想との間に聯絡を附けたり、順序を置くといふやうなことは無理だ。一思ひ出すまゝに、破落々々な孤立したものに、するより爲方がない。當時モンモランが仲へ這入つて、宣教師仲間と或る交渉事件のあつたことを記してゐる。私の著作は、地方の安寧を紊るものと一般から認められてゐるのだ。然ういふ好い加減な事を彼は言つてゐた。すると、私に言論の自由を容して置くのが不可いといふことになる。今若し全く筆を持たないといふことにすれば、誰も過去の事を言ふ者はあるまいといふ意味を私に洩らした。その誓約なら、私の疾くに實行してゐたことだ。彼等と誓約する

にも、思ひ煩ふことは少しもなかつた。唯しかし、單に宗教上の事に關してといふ條件を附けて置いた。條文に幾らか修正を加へて、書類はモンモランが二通作ることにした。條件は彼等に否拒された。私は書類の返附を求めた。彼は一通だけ戻して、一通は自分で仕舞ひ込んで置きながら紛失したと嘘を吐いて來た。

それから後、宣教師等に煽動された人民は、勅書でも議會の命令でも、皆莫迦にして、何の壓抑をも感じなかつた。私は説教壇で呪はれた。非基督の名を冠せられた。路傍では、狼のやうに逐ひまくられた。著てゐたアルメニア服は、殊更に人の目を引き立てるやうなものであつた。自分もそれを不便に思つてゐたが、斯うなつて急に更へるも意氣地のない譯と思つて、その儘に決心もし兼ねてゐた。表衣に毛皮の帽子の扮装で、田舎道を澄ましてやつて行くと、周圍からは目の見えない百姓どもが、大聲に喚き立てる。中には小石などを打附ける奴もある。をり／＼家のある所を通つて行くと、銃を寄越してくれ。あの野郎うち殺してくれんだ。などといふ聲が其の邊から聞えることもあつた。聞えたからと言つて別に足どりも速めずに行くと、尙嶺を昇らせたが、唯いつも脅喝だけのことであつた。少く

第十二卷
も鐵砲までは打ち出さなかつた。

斯ういふざわめきの間でも、感激に富んだ二つの樂みを求めることを忘れなかつた。最初にいふべきは元帥卿の力で報恩すべき人への義理が濟ませたことである。ニウシアアルの中でも、條理を辨へた人達は、私の受けてゐる待遇と、私を犠牲にするやうな詐術とを見るに見兼ねるまでに憤慨した。そして宣教師連を呪つてゐた。宣教師連の騒ぐ動機は、全く餘所から來たもので、彼等を操つて、その身に身を隠す或る者等の手先に使はれてゐるのだといふことを、その人達は感附いた。ばかりでなく、悪くすると私の事件が始まりて、この後眞物の宗教裁判の例を開くことになるかも知れぬといふ心配をも持つた。地方官殊にムウロン Meuron 氏等は極力私を援護することに力めた。ムウロン氏は、検事長としてイヴェルノア Ivernol 譯者云。これは前に一七六四年の條に出たジ、ネエツの商人とは別人で、親族の關係があるばかり氏の後任になつた人である。一私人ではあつたが、ビッリ

1765(54)

大佐は、他よりも一倍骨を折つてくれた。結果も良かつた。長老會で會員の名分を明かにして、モンモランを動きの取れぬやうにしてつたのは、この大佐の盡力であつた。大佐は名望があつたから、暴擧を壓へることも出來た。けれども金と酒の力に抵抗し得るものとは、大佐の方には唯法律と正理の力しかなかつた。勝負は互角でなかつた。この點ではモンモランが勝利を占めた。けれども大佐の苦心に感じてゐる私は、どうかして好い位置を世話して、それで謝恩の心を満足さしたく思つてゐた。彼が議會の一席を占めたがつてゐるとは豫ねて知つてゐた。が宣教師ブチイビエルの事件で、王家の意思に戻るやうな事があつたために、政府側からの同情を失つて了つた。にも拘らず、彼の爲に、一か八か、元帥卿の手元まで依頼狀を出して見た。その上にまだ思ひ切つて、彼の熱望してゐる職名まで切り出して行つた。と、幸ひにも、世間の見込とは反對に、勅命でその職はすぐ大佐のものとなつた。私の運命は、高い頂上から、低いどん底まで、一時に急轉するのが常であつた。今度なども、また斯うして一方の極端から他の方まで押されて行つた。一方では賤民に泥の底へ埋められさうになつてゐる私は、他の方で、一國

の議官を任命させる人であつた。

次に感じた愉快は、ザエルドラン夫人が令嬢を伴れて訪ねてくれたことであつた。夫人は令嬢と一緒にブルボンヌ Bourbonne の湯治に行つてゐたのが、到頭このモチエヌまで來ることになつて、二三日私の家に逗留した。夫人の注意やら世話やら長い間の私の反情はうち負かされて了つた。其の深切に絆された私の心は、長いこと見せられてゐた彼女の友愛に返禮した。斯ういふ境遇では、この訪問が殊に嬉しかつた。愛の慰めを借りて元氣を繼いで行く必要が、危急に迫つてゐたのである。

ああして賤民等がいろんな侮辱を與へるのを見て情を痛めさせるやうなことがなければよいが。出來ることなら然ういふ光景を見せなくて済む工夫はないか。それが氣になつた。けれどもそれは思つても効ない事である。彼女とうち連れて外出すれば、幾らか手向ひのし方が違ふやうでもあつたが、それを見るだけで、不斷どういふことが續いてゐるかを見抜くには十分であつた。ばかりでなく、夫人等が斯うして逗留してゐる頃から、私の家へ向けて夜襲をしかけて來るやう

1765(54)

1765(54)

にまでなつた。ある朝夫人の小間使が、前夜の間に投げた石塊で、窓がきつしり詰つてゐるのを見つけた。随分重いベンチが一脚家の外に軒下へ附けて、脚をしつかり打ち込んだのが出たであつた。それをわざ／＼取り外して、真直に外から開戸の眞上へ立て掛けて置いた者があつた。早く氣が附いたからよかつたけれど、誰か一番に戸を引き開けて出ようとすれば、上から墜ちて來るベンチに壓し潰されて了ふところであつた。夫人は一切の事情をよく知つてゐた。直接に見て居る外に、氣に入りの下男が村中を廻つて、何處にでも出入りしたばかりか、モンモランとさへ話をしてゐたといふから、知つてゐたのも當然だ。でも夫人は今の事について、一向注意するらしくもなく、モンモランのことも、外の人の事も、何も言はない。私から話し出すことがあつても、その返辭には實が入つてない。唯何處よりも住み心地のよいのは英吉利だといふので、話の中心は折から巴里に居たヒッムのこと——私に對する彼の友情、自分の國で私の爲に盡したいといふ希望——その方へばかり移つて行つた。ちよつとこゝでヒッムのことを話さう。

を書いたところから辭典家達の間で喧しく持て囃された。後の方でのスチャアアト朝の歴史がまた名高かつた。彼の書いた物で私がブレヴォオ師の翻譯を通して讀んだのはこれだけであつた。その外の著作は知らないから、唯人づてに聞いて、彼は奢侈を罵る英國人通有の思想に對しては著しい自由な態度を抱いて居る人として考へさせられた。この前提からして、彼がチアルズ一世を辯護してゐるのを極めて公平な處置だと思つた。そして彼の才と併せてその人格をも稱へて休まなかつた。斯うした偉人に接して、親懇を結びたいといふ希望は、彼の親友であるブッフェル夫人が、強ひて英吉利に行けとの勧めに對する心の傾向を十分に強めた。瑞西に来てからも、この夫人の手から彼の手紙を貰つた。私の才分を讚めちぎつた上には、是非英國へ來い、自分の有する一切の勢力、一切の友人を擧げて君の日常を樂ませる方便に供することを辭さないと言つたやうな、非常に誘惑的な手紙であつた。その内、かの元帥卿が自分と同じ土地に居た。この人は彼とは同國の生れ、しかもヒッムの友で、私の今まで考へてゐた事の間ちがつてゐないことを確めた。卿自身に強く感じた彼の文學上の逸話まで話し聞かされた。私もそれ

1765(54)



ムウ・ヒ・ドゥイグイデ

には感じさせられた。古代の住民、此の問題で、ウァレス Wallace がヒッムを反駁する論文を書いた。それを印刷する時に、ウァレスが留守になつて了つたので、校正から出版の世話まで、ヒッムが手一つに引き受けてやつて了つた。この爲方は私の考と一致した。自分が詠まれた落首を、一部六ソル(約計十二錢)づいて賣り廣めたのもこの考からであつた。でヒッムといふ人には、いろ／＼な點で最負が重つた。其處へヴェルドラン夫人が來て、私に好意を持つと言つてゐる事や、英吉利の主人役になつて禮遇したがつてゐることを熱心に話し立てた。それほど好意を幸ひに、ヒッムへ手紙を出せと言つて強つて勧めた。が英吉利といふ國は初から何となく好きてなし、よく／＼窺しててもないと、行つて見たくも思つてゐなかつたから手紙まで出して約束することは斷つて了つた。けれども、ヒッムの機嫌を損ねぬために爲なくてはならぬ事があるなら、それは夫人の勝手にさせて置くことにした。夫人がモチエエを立ち去つた迹の私は、この高名の人物に就いていろ／＼夫人の話して行つたこと、私の友たるべき人であること、して夫人自身は一層深い彼の友であること、——然ういふことに心を吸ひ込まれてゐた。

Handwritten notes in Japanese, including a date stamp: HI 1949 9-18.

1765(54)

夫人が居なくなるとモンモランの姦計はますます進んで来た。賤民もまた何等の束縛も感じないやうになつた。私はそれでも尙平氣で叫嘲の真中を靜かに歩いて通つた。前にイヴェルノア教授と一緒に味を覺えた植物研究を、散歩の際の慰みとして、然ういふ賤民どもの響動にびくともせず、採集のためにそこら中を駆けまはつた。と、彼等は此の澄し方が憎々しさに、ますますいきり立つのみであつた。一番氣を打たれたのは自分の友——勝手に自分等て然う言つてゐる人達——の家族等が公然と敵黨に加はつたことであつた(原注)。この致命傷はイヴェルドンに住つた時から既にあつた。その次第を言ふと、私がその市を去つて一二年の中に、旗將のロガンが死んだ述べて、年老いた父ロガンが、言ふのも切ないけれど、言つて有體に私への知らせには彼の骨肉が、イヴェルドンからもベルヌ州からも私を逐つ拂ふ企てに加つてゐた證據を、その書類から見出したとあつた。これで見ると、その隠謀は確かに迷信の爲業でなかつたことが分る——ある人達は然う信ず

1765(54)

るらしい風であつたけれど。何爲ならば、旗將ロガンは信心家でないばかりか、物質主義懷疑主義を極端まで押し進めて、殆ど他の説を容れぬまでに逆上せ切つてゐたからである。それにイヴェルドンではこのロガンぐらゐる緊乎私を取り込んでゐた者はなかつたし、又彼ぐらゐる惜し氣もなく讚め詞や追従を振り蒔いた者がなかつた。迫害者達の得意な企てを、彼は忠實に守つた人であつた。例へばイヴェルノアの一家——私が宿を借りた女友の骨肉ポア・ドラ・ツウルのイザベルの父や兄弟、又彼女の義妹のデラルデエ夫人までが、一人も残らずそれであつた。このピエール・ボア・Pierre Boyと云ふ男は、随分な間ぬけの人でなして、野暮な事をする奴だつたが、眞面目に腹を立てるでもないと思つた代りに、一番弄んでやるつもりで、あの「小預言者」の體裁に倣つて、所謂預言者山のピエールが幻想 *La Vision de Pierre de la montagne, dit le Voyant* と題した七八枚の短いものを書き撲つた。その中へ當時私の迫害に大きな口實を貸した怪事を巧みに綾なして書き込んだ。ペイルウがそれをジッネエツで版にしたが、此地ではほんの少ししか弘まらなかつた。ニウシアアルの住民は、いくら聰明でも、デリケエトに洗練された諷刺を、片端見ただけで味

ふことは出来なかつた。

この頃にもう少し心を籠めた物が一篇出来た。原稿は雑集の中へ一緒に仕舞つてあるが、要領だけ話して置かう。

布令と迫害のどよめきの中で、殊にジッネツ人が聲の限り鯨波をつくるのが見ものであつた。中にも友の宣教師ヴェルヌは職掌柄といふ譯か、私が基督教徒でないといふことを辯證するのだといふ言ひ前で、丁度此の時に私への公開状を出版した。自分免許のこの書簡は、完全な物では決してなかつた。その癖この文には、生物學者のボンネエが大分手を入れたといふ確かな説もあつた(譯者云。Charlès Bonnet はジッネツの生物學者且哲學者。一七二〇—九三)。ボンネエは唯物論者だけれど、私の事件のあつた時は、純粹な正教を信じてゐた。書簡に對しては、もとより答辯する積りはなかつた。が、山よりを書く際に、その答辯をすれば出来る序があつたので、その中へ唯一言、如何にも相手を見下げ果てたやうなことを言つた。するとヴェルヌは顔を火にして怒つた。彼の怒號する聲はジッネツを充たした。イヴェルノアの通知に據ると、ヴェルヌはまるで半狂亂だとあつた。暫くすると無名

1765(54)

1765(54)

て一篇の誹毀文が現れた。インキの代りに、フレゲエトン Phlegathon の水を使つて書いたやうなものであつた(譯者云。フレゲエトンは希臘神話に出る地獄にある火の河。本文はさもなくば、瘴惡に燃え焦げるやうな意味の文といふ意味)。此の文の要點は、自分の生みの子等を大道へ委棄したといふこと、軍人の情婦を引き摺つて歩いたといふこと、手の附けられない荒姪者であるといふこと、微毒で糜爛されて了つてゐるといふこと、その外これに似た可愛い言ひ草であつた。この文の作者を知ることが困難でなかつた。これを讀んでまづ考へ附いたことは斯うであつた。——生涯に一度でも淫賣屋の門を潜つたこともなく、反つて處女のやうな臆病と羞恥心のために失敗つてばかりゐる者をつかまへて、耽溺者の親玉株でもあるかのやうに言ひ徇したり、微毒などといふ病の氣もないことは勿論、専門家が診て微毒には免疫の身體だとさへ言つたほどの私を、その惡病で糜爛されてゐるなぞと解してゐるのを見て、これは一つ、人間の間に傳へるあらゆる風説だの、評判だのといふものに、果してどれだけの眞價値があるかを引剝いてやらう——かう私は考へた。いろ／＼思案の末、この文に對する一番よい辯駁の方法は、自分の殊に

1765(54)

永く住んだ市で版にして廣めるに限ると思つた。て原文の儘を印刷するために、それへヴェルヌと署名したはしがきを附け、事實を明かにする目的で短い注釋も入れて、デッジエヌに渡した。印刷させただけではまだ足りないやうな氣がするので、それを種々の人に送つた。その中には自分が愛顧を受けて、書信を取り交してゐたウイテムベルヒ Wirttemberg の路易公もあつた。路易公も、ベイルウも、外の人達も、ヴェルヌが誹毀文の作者であることを怪しく思つてゐるらしかつた譯者云。此の誹毀文は「市民の感情 Sentimens des citoyens」と題したもので、それはヴェルテエルが書いた物といふことになつてゐた。ヴェルテエルもそれは否認しなかつた。そして私が輕率にヴェルヌの名を出したことを譏つた。それゆゑ私も何となく怪しくなつて來て、早速デッジエヌに手紙を出して、印刷物を差しとめることにした。ギイの手紙には差し止めたとしてあつた。がそれは随分可疑しい。彼には今まで幾度瞞されたか知れないのであるから、今度の事を疑ぐるにも不思議はない。そしてその時から私は全く暗い影の底に隠されて了つて、何事の真相も絶待に見透すことの出來ない身になつた。

1765(54)

ヴェルヌは驚くほどおとなしく此の濡れ衣を堪へ忍んでゐた。從來あれほどの狂暴の揚句としては、彼に似合はぬことであつた。大層用心深い書き方をした手紙が彼から二三度來た。その腹は、私の返事を見て、ヴェルヌが那の誹毀文の筆者であることを私がどれくらゐの確かさで知つてゐるかを覗はうとする事と、一つには彼に對する反證を持つてゐるかどうかを當つて見るためであるらしかつた。這箇からはごく短い返事を二度出した。文意は手強くても、書き方が丁寧だつたから、別に腹を立てる風もなかつた。三度目の手紙には、以後は書信のやり取りを頼むと言つたやうなことが書いてあつたので、返事は出さずに了つた。するとイヴェルノアを通して傳言して來た。クラアメル Cramer 夫人がベイルウへ寄越した手紙には、那の文は決してヴェルヌの書いたものでないと保證してあつた。然ういふことでは私の推定は動かかなかつたけれど、或は自分が瞞されてゐないにも限らないし、若し然うとすると、ヴェルヌに對しては名譽回復の責を負ふ譯になるからと思つて、イヴェルノアの口から斯う彼に話させた。——もしヴェルヌが眞の作者の名を明すか、少くも彼自身はその作者でないといふ證據さへ見せれば、彼の満足するだ

けの事はしよう。その上に斯ういふ事も私はした。よく／＼思つて見るに、若し彼に罪がなかつたとして見ると、私から迫つて身の證を立てるといふことも出来ぬ譯であるから、まづ自分があいふ推定をするに至つた理由を細かに覺え書に書いて、ヴェルヌの方にも異存のなさうな第三者に見せて判定を下して貰ふことにした。その第三者が何者であるかは決して想像がつくまい——ジッネエの議會がそれであつた。この覺え書の末へ、この文意を調査し、且必要と認むる審理を遂げた後に、果してその見込通り、議會の宣告でヴェルヌが誹毀者でないといふことに極まれば、自分はその瞬間から今迄の推定を全くうち棄て、その足で彼の處へ行つて頭を地面に摺りつけて、宥すといふ言葉の出るまで平あやまりに謝罪する覺悟であるといふ意味を書いて置いた。公平を熱望する心、率直と寛宏の心、正義の一片心は誰にも具はるものといふ信用の心——それらは、今度のこの聰明な興味ある覺え書ほど遺憾なく、かつ感觸的に現し得たためしがなかつた。加害者と自己との仲介者として、人もあらうに卒然と深仇骨に入るジッネエの議會を指定したてはないか。ヘイルウにこれを読み聽かせた。廢した方がよからうといふ

彼の意見であつた。私もそれに従つた。ヴェルヌの約束した證明を待てとヘイルウがいふ。てそれを待つてゐた——今でも尙待つてゐる。ヘイルウはまた、今の中は黙つてゐるのが一番だと忠告した。て私は黙つてゐた——恐らく私の晩年が果てるまで、容易ならぬ誣告の罪をヴェルヌに被せたといふ惡名を背負つたままて黙つてゐなければならぬのであらう。これは誣告でも何でも無い。現にその證據がないのでも分る。だから自分は、その作者が必ずヴェルヌであることを何處までも信じてゐる。覺え書は今ヘイルウの手元に残つてゐる。それが若し世に出ることがあつたら、私のいふ理由が明白になるであらう。ジャン・ジャックの眞の心を、同代人は知つてくれなかつたけれど、それを讀む人々には知つて貰ひたい。モチエエでの最後の幕、バルド・トラヴェルからの退去、到頭其處まで來た。此の土地での住居は二年半になる。そして八箇月間は、不斷のしへたげて惱まされ通した。不愉快な時期であつたから、細い事は何もはつきり記えてゐないが、ヘイルウのその事に關する出版物で見てもらへばよく分る。尙それについては後にも話す時があらう。

1765(54)

ザエルドラン夫人がモチエエを發つて後の沸騰は、ますます盛んになつて來た。國王からは再々々の勅書が下る、議會からも命令が續けさまに出る、郡長や地方官たちは影身に跟いてゐる。それにもかゝらず人民は眞剣に私を非基督にして、了つて騒ぐばかりでは功がないと見たから、何か實際に暴行を加へようといふ風が見えて來た。街道で小石を撲附ける、それは今までも然うだつたが、大抵は離れてゐて、怪我するほどの事もなかつた。到頭九月の始、モチエエの定期市の晩に家中のみんなの命を危くするやうな夜襲を受けた。

眞夜中ごろに奥の廊下の方で非常な物音がした。廊下に取り附けた窓と扉にうち附ける礫の雨は、けたましい音を立てて降り込んで來た。廊下に臥てゐた犬は一連り吠え立てたけれど、間もなく慄えて隅の方へ居竦んで了つた。何處かへ逃げ出さうとして無暗に羽目板を噛み裂いてゐる。早速目を醒して自分の室から臺所の方へ行かうとしてゐると、よつほど丈夫な腕節で撲附けたと思はれる

— 692 —

1765(54)

石が一つ窓を突き破つて臺所を抜けて、私の室の扉を押つ開いて寢臺の下へ落ちた。もう一秒早く寢臺を降りてゐたら、その石で胸中をやられたところだつた。最初の物音で私を誘き出して、出て行く處を石塊でも見舞する、然ういふつもりであつたのだらうと思つた。すぐ臺所へ這入つて見た。テレエズは無事である。これも起きて總身を震はせながら、私に取り纏つた。窓の方角を外した壁の側に、二人は身を並べてまづ一息石塊の襲撃を避け、其處で何うしようといふ分別を案じた。今すぐ出て助けを呼びに行くのは、身體を打ち碎かれに行くやうなものだ。よい鹽梅に下に宿を取つてゐる老人の下女が、物音に飛び起きて、丁度隣の郡長を呼びに走り出た。郡長は寢臺から飛びおりて、大急ぎで部屋著を引つ掛けたまゝ、夜警を伴つて駆け附けた。夜警が早く見附かつたのは、市のある晩で、巡邏に出るゐたからであつた。郡長はこの光景を見て、蒼くなるほど魂銷た。石塊で廊下が一杯になつてゐるのを見て、

「どうだまあ！ 鑛山へ來たやうだ！」
こんなことを言つてゐる。下の方を見廻つて見ると、小い中庭の扉が碎かれてゐる

— 693 —

る。廊下から家の中へ闖入する考であつたことも分つた。夜警が何爲この音を聞きつけなかつたか、何爲この亂暴を取り鎮へなかつたか、それを段々調べて見たら、なるほど不思議は晴れる。その夜は他村が當番に出る順のところなのを、モチエエの者等が強ひて順番を取りかへて、自分達が出たからであつた。翌日郡長から報告が議會へ出た。二日後に議會から更に事情を探聞するやう、犯行者を密告する者には賞金を與へる事と、秘密を守る事とを約するやう、そして私の家と鄰家の郡長の家には、王家から警備を附けるやうとの命令が郡長へ來た。

次の日にはビッライ大佐、検事長ムウロン氏、郡長マルチネエ氏、收税官ギイユネエ、Guyenet氏、會計吏イヴェルノア氏とその父と、つまり此の地方のおも立つた人達が、みな見舞に來てくれた。いづれも口を揃へて暴風は吹き荒ぶまゝにまかせて置き、とてもこの先安全に且名譽を損ねずに住んでゐられぬやうな土地は、一時なりとも立ち退かねばならぬといふことを頼むやうにして勧め立てた。それのみならず、郡長は部落の暴動を非常に怕れて、自分の身にも災禍が及ぶかと安き心もなく、一時も速く私の去ることを望んでゐるらしく見えた。すれば何時までも私を保

1765(54)

護する面倒もなくなり、彼自身もこの地を轉ずることが出来るからである。果して私が去ると、引き續きその人も轉じた。それやこれやを思ひ合して、皆の勸告に従ふことにした。これには未練も残らなかつた。地方民の憎惡、それを思ふともうこの上の辛抱がならぬほど、心の苦惱を感じさせられたからである。

また、退去の場所を取りきめなければならぬ。ヴェルドラン夫人が巴里へ歸つてからは、何時の手紙にも必とウオルポウルの事を言つて來た。彼女は、卿と彼を呼んでゐた。その人が熱心に私を世話する氣で、自分の領内の別莊を貸さうといふことであつた。夫人は、宿所と給養に就いて、事細かに、いかにも面白い處であるらしく説明して來た。それに依つてこの卿と夫人が、どのくらゐ立ち入つた相談をしたかが分つた。元帥卿は始終英吉利か蘇格蘭へ行くことを勸めて、行けば領地内の隱棲を周旋すると言はれたが、一番私の好きだつたのは、彼の身近くポツダム Potsdam で世話になることであつた。丁度その時私の身上について普魯士國王

1765(54)

から卿へ御沙汰があつて、ポツダムへ呼び寄せる御思召である事を通知して来てくれた。と同時にザクセンゴータ公夫人からは、その私の旅行を機に、是非途中夫人に遇ひに行つて、其處でしばらく滞留することを望まれる手紙も来た。ところが自分は瑞西の國の内て住み盡せるかぎり、此處を棄てて外へ出て行く氣になれなかつた。それほどこの國が戀しかつた。そしてこの間に、數月前から蓄へてゐた或る目的を達することを思ひ立つた。今までは話の絲筋を斷るまいと思つて言ひ出さなかつたが實は斯うだ。

ピアンヌ Bianno 湖の中央で、ベルヌ救濟院の所屬になつてゐるサン・ビエール島に退き込むといふこと、——其處に私の目的があつた。前年の夏にペイルウと旅行の途中、一度この島を見舞つたことがあつて、其の時分からどうかして這處へ家を持つて見たいといふ考は離れなかつた。それほどこの島に魅せられた。それについては、三年前に自分を逐つ立てたベルヌ人の所屬であるといふことが、一番の障礙であつた。那處に宥められた人々の中へ、復這入つて行くといふことで、自尊が傷けられる感じの外に、イヴエルトンての時よりも、一倍安靜が害されるので

ないかと恐れる理由も附け加はつた。元帥卿に相談して見た。尙且同じく、ベルヌの人々は私がこの島に追放されて、以後の著作に對する人質になることを望むだらう、と然う思つたから、もとコロンビエエの知事別邸の鄰に住んでゐたスツルレル Surlet といふ人の手で彼等のおもはくを量らして見た。スツルレル氏は州の長官達に就いて訊して見たところが、ベルヌの人民は皆以前の非行を悔いて、今度その島へ落ち著いて呉れるなら大喜びで、決して平和を紊すやうなことはない、と證言した。いよいよ住家を其處へ持つて行くについては、尙用心のためと、シャイイエ Chaillet 大佐に頼んで別な報告を求めた。依然前と同じ話であつた。そして島の收税官をしてゐる人が、上官から私を客分にする許可を得たから、私も主権者と所有者の黙諾があり、安心して其の家へ行けると思つた。ベルヌの人達が従來の不義を公認する道理はないと思つた。それですべての主権者等の最も侵し難しとする準則に背くだらうとは、尙更想像出来なかつたからだ。

ピアンヌ湖中のサン・ビエール島をニウシアテルではラ・モット La Motte 島といふ。周囲は半リウ(約十八町)ぐらゐのもので、狭いことは言ふまでもないが、それで生活

1765(54)

に入用な物は何でも得られぬものがない。野も、牧場も、果樹園も、森も、葡萄畑もあつて、地形の變化に富んで山がちなところから、部分々々が一目にうち展げないで、互ひに利益ある位置を取ることになるから、趣きがそのために一層加はつて、實際よりも餘程大きい島であるかのやうに見える。聳り立つやうな高臺が西の方に連つて、グルレヌ Gléresse とボンヌヴィル Bonnaville を瞰おろしてゐる。高臺には長並木が植わつて、その真中ごろが一棟の大きな公會堂でうち切られてゐる。葡萄の旬になると、近所の濱の人達が、安息日などに集つてダンスをしたり、お祭さわぎをやつてよく遊んだ。島中で家といふ家は唯一軒よりない。けれどそれは手廣く、住みよささうで、風の當らぬ山懐に建つてゐる。それが收税官の家である。

この島の南の方五六百歩も隔つたと思ふ所に、荒廢したまゝのごく小さな別の島がまた一つある。宛らいつかの昔の大暴風に、大きな島の本體から千切れたのかと思はれるやう。柳と蓼の外には、その碓礫な地面には何一つ育つものもないが、それでも青い芝草の敷けた氣持よささうな小丘の一つぐらゐはある。湖水は殆ど規則正しい卵形をしてゐる。岸の眺望はジ、ネ、エ、湖、ニ、ウ、シ、ア、テ、ル、湖、など

1765(54)

及ばぬけれど、美しいデコレーションとして見るに遺憾のないものである。殊に西の湖水縁には人家も建て詰んで、一すぢの山脈の裾野を葡萄で飾つて、丁度ロオチイ Côte-Rhône 濱へ行つたやうな氣がする。しかし出来る葡萄酒は、其處のほど上等でなす。サン・ジャン Saint-Jean の官地、ボンヌヴィル、ビアンヌ Bienné、ニドオ Nidan と南から北へかけて、湖水の隈までずつと一つに續いてゐて、その間々に風情の尋常ならぬ村々がちらりちらり見わたせる。

これが自分の準備した隱宅であつた。グルド・トラヴェルを逃げて出れば、此處へ行き著かうとしたのであつた。この選擇は、自分の安易な傾向、寂しきを好み、逸遊を好む氣質には最もよくあて嵌つた。自分の狂するほどに愛する甘い幻想の一つとして、これをも數へ入れたく思ふ。この島の中ならば、人界を離れるに一番よからう、凌辱を遁れるにも一番よからう、人々から忘れられるにも一番よからう、一日に言へば、一切の繫縛を解き放つて、瞑想の悦樂を縱まにするには、一番よささうに思はれた。出来る事ならば一切の人類との交際を絶つて、専らこの島に禁錮されたやうになつてゐたい。——斯う思つて、彼等と交渉の義務を棄てて了ふには、ど

うすればよいかの妄想に心は奪はれてゐた。

暮し向を奈何するといふ事が問題である。運搬が困難なものと物價が高いのと、島の暮しは樂でない。のみならず、多くは收税官のお情次第で生きてゐる。がその困難もベイルウのお庇で除くことが出来た。前に私の全集を出版しに掛つて、その儘中止した書店の身代りにベイルウがなるといふことで、相談を取り極めてくれた。出版の材料は皆ベイルウに渡した。順序を附けたり、配當もした。同時に自叙傳の原稿も渡すといふ契約をした。そして私の死後までは決して使用せぬといふ條件で、彼を原稿一切の寄託人と定めた。それは世間をして、私の記憶を二たび新たにさせることなしに、静かに餘生を終へたいといふ心があつたからである。斯うなれば彼から受け取る年々の報酬で、優に生計は支へて行ける。元帥も前に没取された自身の財産が回復出来たといふので、年額千二百フラン(約計四百八十圓)の扶持料を出さうと言つて寄越されたが、これは半金だけ受けることにした。元帥はそれに對する元金を送らうといふのであつたけれど、こちらは置き場がなくて持て餘すからと言つて斷つたが、するとそれがベイルウの處へ送ら

1765(54)

1765(54)

れた。そして、委任者との契約で彼の處で保管されて、利子だけ私の方へ支拂はれる都合になつた。ベイルウと契約の收入の上に、元帥からの年金——この年金の三分の二は私の死後はテレエズが受け継ぐといふ約——と、デッシェエヌから這入つて来る三百フランの年金があるから、これで立派に體面は支へられる。私が死ぬれば、ライと元帥から受け取る金で、年々七百フラン(約計二百八十圓)つといふものがテレエズへ這入るから、彼女も困るやうなことはない。もうこれだけ麴包に差聞へる憂はなくなつた。しかし自分の幸運と努力とで引き寄せた此の財源も、名譽のために已む無くすべて斥けて、生存中と同じ窮乏の中に死んで行かねばならぬ運命になつてゐた。生活の本據を残らず奪ひ取り、餘儀なく不名譽を得心させようとして、種々な契約に耻を塗ることを考へてゐる者があつた。だから酷い不名譽に陥らずに、是等の契約を固守して行けるか、奈何かは考へて見れば分ることである。かうした二途が別れた時に、私の探る道を疑ふ餘地は恐らくあるまい。他人は自分たちの心に引きくらべて、私を臆測した。

生活問題では安心が出来た。もう外に氣縈りな事もない。もとより一方では、

敵人の跋扈にまかせた領域はそのまゝになつてゐる。が、種々な著作を促した高貴な感興や、一到して溢らない主張で、動かぬ心を明かに示した。私の天性を説明する一切の行爲を見ても、その證據は分る。最早敵人に對しては何の防衛策を案ずる必要もない。彼等の粉飾した人物に私の名を冠らせることは出来るだらうが、好んで騙されに行く人間でもなければ、それに欺かれるやうな者はあるまい。缺點はあり弱點はあり、少しの束縛にすら堪へぬ私でも、正義と善良とは、何時の場合にも踏み外したことはなかつた。我が過誤を悔ゆる餘りに他人のそれを寛恕する傾きが常にあつたから、怨恨憎悪、嫉妬などは少しも心に留らない。愛情と温情の間から幸福を求めた。事々物々に誠實を忘れないから、時としては不謹慎にも見え、時としては太甚しい無私念に陥るやうな事すらあつた——然ういふ人物であることを、他は認めずにおられまいといふ自信があつた。だから自分の生涯は、他人に唾棄されても苦しいとは思はない。

こゝで私は、或る程度まで時代と同人に永訣を告げ、一般世間から暇を取つて此の島の中に晩生涯を封鎖しようとした。これが私の決心であつた。遊惰な生

1765(54)

1765(54)

涯の大計畫を最後に實行しようと思つたのも、其處であつた。この計畫の爲に天から授かつた僅かな活力を、今まで無駄に獻げ盡して了つた。住民が寝て暮すといふ榮耀なバビマニイ Papimanie の島ともこの島を化して見たいのであつた。

On y fait plus, on n'y fait nulle chose.

人は皆無爲なり、絶えて従ふ業も無し。

この Plus (無爲) は私に取つてのすべてであつた。ラ・フォンテヌの Diabie de Papahgini から引く。眠らないのを那樣に残念に思つたことはかつてない。安静だけあればそれでよい。爲る爲事がなければ、眠つてよりも起きて幻を見てゐる方が好きだ。光彩ある事業を思ふ時代も過ぎた。虚榮の匂に向へば、誘惑よりも失神を感じるやうになつた。最後の思ひ出としては、永久の閑散の中に、邪魔の無い生活を送るより外に何もない。是は天國の福樂を得た人達の生活である。それを私は下界に於ける自分の晩年の無上幸福とした。

私の矛盾を責める人達は、ここにも一つの材料を擱へることを忘れまい。社交裡の一員として無爲であるのは、堪へがたい苦痛であるといふことを前に言つた

その私が今は斯うして、唯その無爲で居たさのみ幽處を尋ね廻つてゐるのである。けれどもそれは私の持前だ。若しこれを矛盾だとするならば、それは自然の爲たこととて、私の知つた事でない。が、これを矛盾などといふのは、實は當らない話だ。斯ういふ事があるからこそ、私といふものの本領が支へられてゐるのだ。社交裡の無爲はしようことなしの無爲だから、息苦しい。幽居の無爲は自由で、心の儘であるから楽しい。人中に混つてゐながら何も爲ないてゐるのは、餘儀なさゆゑに何とも言へぬ切ない思がある。此の時はまるで椅子に釘附か棒立の見得で、心のまゝに足手を動かしてもならず、駈け出すことも、跳ぶことも、唱ふことも、叫ぶことも、科することも思ひ切つて出来ない。かと言つて静と思ひに耽つてゐるといふこともならず。と同時に無爲の疲勞、壓迫の重感といふものもある。爲方なし莫迦氣切つた話や、世辭を、一生懸命に注意して聽いてゐて、自分の番と思ふ時には冗談でも嘘でも程よく口を入れるのを忘れないやうに、絶えず自分の詩思を搾る事を努めねばならぬ。是を閑散などとは飛んでもない。全て獄中の苦役だ。私の好む閑散は不性者のそれとは違ふ。不性者なら唯かう腕組をしたまゝ、静

1765(54)

1765(54)

と動かないで頭を使ふことも全くしないのであるが、私のは、嘘へば何を爲るのに絶えず動勢を取る嬰兒のそれと言つてもよし、腕は休めてゐるのにそれからそれへと物を盜る老耆者のそれと言つてもよい。種々の事に手は著けて見るが、何の一つをも爲果せたといふ物がなく、氣の向き次第に往つて見たり歸つて見たり、一瞬毎に問題を取り替へたり、蠅が飛べは何處までも行く方を逐つ蒐け、此の石の下には何があるかと顛覆しても見、十年計畫で熱心に始めかけた爲事を、十分經たぬ中にさらりと抛棄り、といふ風に朝から晩まで順序も聯絡もなしにごろ／＼してゐて、何事に對しても刹那々々のひら氣で動くのが一番好きだ譯者云。ルソンの「對話」にも参照すべき話が出てゐる。少し譯して見る。彼自らを三人稱にしていふには、ジャン・ジャックの遊惰疎懶は、他の一般の思想家と異なるところはない。しかし其の懶惰は頭の中だけの事である。彼の考索には必と努力が伴ふ。おき考索に疲れて了ふ。甚麼弱い力でも、彼に迫つて考索を強ひる者があるとそれに怖れをのく。一定の體度を取つて、一言の好日を言はねばならぬやうな時には、堪らぬほどの術なさを思ふ。然うかと思ふと所作の方では、さび／＼と忠實に働

く。閑散といふことには片時も堪へぬ。手なり足なり、指先なりが始終動いてゐないと承知出来ぬ。——晩年に線帶編みを休めなかつたのも其處から——身體の動作が止まつてはならぬ。そして頭だけは静止してゐなければならぬ。散策を熱愛するに至つた理由は是である。考索の義務なしに、動勢が續けられるからである。冥想中は活動が止る。いろ／＼の幻影が腦の中で生滅し、離合する。

例へば丁度夢のやう。そして意力の加はることを要せぬ。起伏往來はそのまゝに任せて置いて、干渉を試みず、樂むことが出来る。……が理智や省察が出て來ると、すぐ沈吟は動搖し出して、困難な爲事に變ずる。この苦痛が彼を震慄せしめるのである。……自由な、無繫縛な冥想に耽る爲なら、生涯田の草取りをしても嬉しいけれど、緞子の椅子に据わつて、女どもの機嫌を買ふ爲に、下らぬ心配に腦味噌を腐らせるのは、極刑に處はされるやうなものである。そののみならず、彼は爲事が好きなので、それだけ束縛を惡むこと太甚しい。自分の時間にはするが、他の時間にはせぬ——此の條件を外にしての爲事は、彼に取つて無意味である。物その物が要する約束には従ふ。それには束縛がないからだ。けれども、某人の意思か

1765(54)

1765(54)

ら來る約束は反撥する。規定された時間に一回働くより、自由な時間に二回働く方がよつほど面白い。これによく似た意味のことは處々て言つた。

植物學——始終考へても居り、其の後道樂の一つになり始めた植物學は、妄りな想念の活用を奪ひ去り、徒然を慰めて閑散の空隙を充たすには、一番都合のよい暢氣な研究事項であつた。森や野を足の動くまゝに徜徉ひあるいて、手當り次第、此處では花一輪、向うでは枝一本と摘み切る。時を定めず、辨當を認る。忘れ方もひどいから、始終同じ興味で同じ物を何遍でも繰りかへして觀察する。それには一分間の疲れも感じないから、永劫の世を渡るとしても飽きが來ない。如何に豊麗な驚喜すべき植物も、無智な眼には興味の對象となりがたい。植物の機制の中に恆久な類似と、莫大な變異が流行してゐるといふことには、植物に就いて或る概念を有つてゐる者でなければ趣味を感じない。一般の人々には、恚ういふ自然の寶庫を眺めても、唯愚昧な、單調なおどろきしかない。注意すべき要點すら知らない彼等は、部分のいづれへも眼がとゞかぬ。彼等は又研究家の心に奇異の念を溢れしめるやうな關係結合の連鎖には青盲であるから、全體としてもまるで何も氣

第十二卷

附かない。幸ひ自分の植物の知識はすべてに新を感じ、すべてに趣味を惹かれる程で、餘り深くもなく、餘り乏しくもなく、言はば恰好の程度にあつた。記憶が弱いから、何時でもこの程度で居坐つてゐた。島は小さいけれど、種々の地味が混じてゐるから、この後の研究と娯樂に供する位の植物の種類は、十分にあつた。甚麼草の刺毛一條でも解剖せずには置かない。然う私は思つた。そして珍しい研究の結果を集めて、ピエール島植物志 *Flora Petinsularis* を書く準備に既う掛つた。

テレエズを迎へた。彼女は私の藏書と所有品を提げて來た。島の收税官の家に、私達二人は賃借して這入つた。收税官の妻の姉妹達が、ニドオから入り替つて見舞に來るので、テレエズに友達が出來た。此處で私は、軟い生活の味を覺えて、わが世を終へるまで、この調子でゐたいと願つたのに、その甘味は、すぐ眞ん前へ落ちて來た苦味に、餘計な力を添へるだけのことにしかならなかつた。

もとから私は何よりも水が好きであつた。それが見えると、楽しい夢のやうな氣にすぐなる。——これと定まつた目的のないことはをり／＼あつたけれど。床を離れて天氣がよいと、朝のせい／＼するやうな空気を吸ひに、高臺の上に駆け上

第十二卷

がつて、視線を遙かな湖水の隈の方へ遣ると、其處には崖と山脈が、くつきりと縁を爲してゐる光景に、ぞく／＼するやうな快さを受けた。造化の手法を觀照することにと由つて、唆られる無言の驚異——外に現しては説明の出來ない驚異が、神に對する最上の敬意であると私は思ふ。壁と街と罪との外、何物も見ない大都の住民に、何爲憧憬が乏しいかの理由は知りたがくはない。けれども何爲田舎人別して幽處の住民に、全くそれが缺けてゐるかが、私には理解出來ぬ。何爲斯ういふ人達の靈は、造化の奇蹟に打たれて、日に幾度となく恍惚たる心境に入らぬのであらうか。私などは長い間の習はして、寐不足の夜の曉方などは、殊に心が然う言つた境地に引き入れられて、それで少しも思念の疲れといふものを覺えぬ。けれどもそれは、自然の誘惑的な光景にこの眼を打たせるといふことがなくてはならぬ。室内では私の祈禱などは、ほんの申し譯ばかりのものに過ぎぬ。が田園の美に觸れた瞬間には、何者の爲る業といふことも知らず、すぐ神經に震へが來る。自分の讀んだ物の中に斯ういふ事が出てゐた。或る名僧が教區を巡つて行くと、一人の老女が祈禱するのに、一言、ああ！といふより外に何も言へないでゐるのがあつた。

僧正は彼女に「感心な女だ。いつも祈禱はそれを通してなさい。その祈禱が世間並より百倍貴いものだ。」と言ひ聞かせたといふが、私のが即ちこの「百倍貴いもの」に當るのであつた。

朝飯を済ますと急いで手紙を二三通書く。可厭でたまらぬ。これだけ速く済まして了ひたいと、顔を歪めてあせりながら書く。それから數分間は、書物や原稿を抱へ込んで讀むといふでもなしに、解したり列べたりするのに氣をいら立たせる。此の整理が私のためにはペネロオペ Penelope の手ずさみになつて、しばらくはそれで慰められた譯者云。ペネロオペはオヂッセウス王の妃。夫が不在二十年の間に、絶えず誘惑者の挑みを斥けて、爲掛けた刺繡が出来上つたら、その意に従はうと言つて、通路をこしらへた。そして晝間刺した部分は、夜の間に元の通りに解して素知らぬ顔である。いつまで経つても刺繡の出来上る折はなかつた。斯うして彼女は貞潔を全うした。疲れて來るとこの爲事を投つて、未だ午前中に三四時間はあるから、その間に植物研究をやる。殊にリンネ Linnaeus (Linné) 氏の植物系統學には非常に興味が傾いた。その空虚を感ずるやうになつてからも、尙全く

1765(54)

1765(54)

棄てるに忍びない程であつた。植物家兼哲學家として植物界を眺めた者は、これ迄の所ではルドウィヒ Ludw. を除けば、この大觀察家一人しかあるまい。けれどもこの人の觀察は、主として標本と植物園の中に限られてゐて、直ちに自然その物を觀るといふことは餘りしなかつた。私にして見れば、この島全部が植物園であるから、或る觀察を試みよう、眞偽を確かめようといふ場合には、早速書物を抱へて森や牧場を尋ねて行き、疑問の植物に出會せば、その傍に寝轉んで、大地から生え出たまゝのものを、其の儘十分に調べることが出来た。この方法は、人が培養して自然を壊さない前の眞の植物の状態を知るに非常な利益があつた。路易第十四世の侍醫長ファン・Ragon はその監理した王室植物園にあるものは一つも残らず知つてゐて、詳しい説明も出来たのに、野生の植物には全く無智で、殆ど識別が出来なかつたといふ話であるが、私とは正反と云つてよい。自然の製作物その儘に就いてなら、幾らか知識は持つてゐるが、園藝家の取り扱ふやうな物はまるで知らない。

午後の時間は大抵遊惰なうはつた気分の中に過させた。規律なしに、唯瞬間瞬間の衝動のまゝに移つて行つた。風日和には、食卓を離れるや否かねて收稅官

に一艇槽の漕ぎ方を教はつてゐるから、一人て走つてボウトへ乗りに出掛けた。湖水の真中へ盪し出して見る。ボウトが岸を離れようとする時の嬉しさはひびずするやうに思へた。それは何爲だか口にも言はず、自分にも分つてゐない。或は斯うして悪者の達しの外に出ると思ふ、心ひそかなる歡びであつたかも知れぬ。やがて湖水の上を何處と的なしに漕ぎ廻る。向う岸の方へ寄つて行くこともあるが舟は著けぬ。時には槽の手を休めて、風と波の揺るまゝに舟を漂はせて置いて、自分は例の夢見る心地になり果てることもあつた。愚なことは愚だが、樂しさはそれでも十分であつた。這度時に、私の感慨に堪へぬ叫びは、

「自然は實に俺の母だ！ 自分は全くこの自然の保護の下にだけ置かれた。此處へ來れば自然と自分の間を隔てる、懸引のある狡猾い奴は一人だつてゐるやしない。」

斯うであつた。そ言つて陸地から半リ、ウも遠くへ泛んで出た。是が大洋ならよいと思はぬことはなかつた。けれども、犬は久しい間水上に居るのを嫌がるから、可哀さうに思つていつもの巡廻だけすることにした。それはもう一つの小島

に舟を著けて、一二時間其處で散歩でもするか、小丘の草地に寐そべるかして、湖水の四圍の風景を愛てくつがへるなり、手當りまかせの植物を吟味するなり、新魯敏遜と言つた風に、この離れ島に想像の家を建てて見るなり、然ういふことをするのであつた。小丘が非常に私の氣に入つた。收税官の細君や、その姉妹と一緒に、テレエズをもこの逍遙に連れ出して來た時には、みんなの先達をして、甚麼に鼻が高かつたであらう！ 皆なはこの小島に兎を蕃殖させる積りて、どつさり連れ込んだ。これが又ジャン・ジラクの慰みの一つになつた。この植民が出來てから、一層小島に面白味が着いた。新住民の進歩の迹を辿るために、前にもまさる楽しい心でしげ／＼足が此處へ向くやうになつた。

斯ういふ娛樂の外にも、もう一つ昔のシャルメットの長閑な生活を憶ひ出させるやうなものがあつた。それにはその時分の季節が大きい關係した。それは蔬菜や果物の收穫を手傳ふことで、テレエズも私も、收税官の家族一同と、この樂みを分前した。ベルヌのキルヒベルゲル Kirchberger といふ人が訪ねて來た時には、折から丁度高い樹の上に登つて、腰には林檎のぎつしり這入つたサックを吊げたまゝ、身動

きも出来ないてゐる所であつた。この時に限らず、かういふ折に人の來ることは、可厭に思はなかつた。閑散の身で何を爲て暮してゐるかを目撃したベルヌ人達は、もう平穩を紊す考を持つてはゐなからう、此の幽處へ私を放して置くことであらうと、然らう望んでゐた。出来得るならば、自分の希望からよりも、寧ろその人々の命令で、此處に禁錮させて置いて貰ひたいと思つた。すれば安息の邪魔されるのが、それだけ薄くなる譯である。

斯うした自白も、讀者には本當と思へぬかも知れない。私の生涯を通して眺めれば、彼等自身心には見出することの出来ない、澤山な内部の感激があつたことを認めぬ譯に行かぬのに、尙強ひて彼等は自分々々の心から私を臆断しようとする。まだそれにも勝る不都合がある。彼等の之知らぬ美しい平靜な感情を私に容さぬと同時に、人間として有るまじいやうな汚れた感情を押つ附けようとする。この場合、私を自然に反した人間實際にあるべからざる一種の怪物にして、了ふことは、彼等にとつて易々たる事のやうである。私の傷になりさうなものでさへあれば、甚麼背理な事でも當り前だといふ顔附をしてゐる。私の名譽になりさうな

1765(54)

事といふと、少し尋常と違つたことでも、有り得べからざる事だといふやうに思つてゐる。

構はない。奈何彼等が思つても、言つても、私はジャン・ジャック・ルソオが在つた儘爲た儘思つたまゝを、忠實に暴露するのに痺むことはない。その感情や、観想の、尋常と異なつてゐることを、辯明しようとも、ジャスチファイしようともせぬ。他の人達も同じやうな考へ方をしたか、奈何か、といふやうなことも穿鑿はせぬ。あらゆる自分の欲望をこの小島の中に封じ込めて了つて、此處から外へ一足も出ない決心に落ちついた。それ程サン・ビエルの島を深く愛し、それ程此處の住居が氣に入つて了つた。近い隣へ禮に行く、ニウウシアテルや、ピアンヌや、イヴエルドンや、ニドオにも是非行かねばならぬ、——然らういふ事は皆想像を疲らせた。島を離れて一日でも送つたといふことは、それだけ幸福を削り取られるやうに思へた。湖水の外に出るのは、わが世から出て行く如くであつた。それに今までの経験で、怯ぢ氣がついて來て甚麼物に心が喜ばされても、すぐそれを失ひはせぬかの心配に落ちて行く癖になつた。島で生涯を終へたいといふ熱望と、此處を逐つ立てられはせ

1765(54)

1765(54)

ぬかの心配とは、胸の底で手を握り合つてゐた。常も私は夕方になると、砂濱に行つて腰を卸した。それも湖水の荒れる時に多かつた。足もとへ打ち付けては碎けて散る浪を眺めてゐるのが言ひ知れぬ、快さであつた。聯想は世の騷擾から自分の境遇の静けさといふ方へ行つた。時とするとなんな考に感激して涙も流した。心から楽しいこの休息を妨げるものとしては、唯これを奪はれはすまいかの不安のみであつた。が、その不安はじり／＼と深味を増して、樂みが遂に破壊されるところまで來た。自分の位置は他人次第のもので、頼み少いものだといふ氣がした。

「此處を離れる氣は更にないだから、永久に住居が出来るといふ保證さへしてもらへれば、俺は喜んでこの島を出る自由を抛棄つて了つても可い！ お情で置いといて遣らうてなく、何でも此處に居なくては不可ないと、然ういふ壓制が受けない！ 大目に見て置かうといふのでは、何時大目で見てもてくれないやうになるか知れない。私が氣樂てゐることを、敵人等が見附けたら、そのまゝに棄てて置くことは思ひも寄らないことだ。島の中に私を住ませとくぐらゐるは、實に些々た

1765(54)

る恩恵でないか。此處を立ち退けと迫られるくらゐなら、いつそ罪名を負はせて閉ぢ籠められても、その方がよつぽど有りがたい。」
かう獨り言を言つた。私は靜かにアルベルヒの獄中で、唯然うなる事を幸福として求めた、多幸なミンシ、ライ、ヂック、レエの上に羨みの眼を向けた前篇四六一頁を看よ。とにかくかういふ事を種々思ひ出して、始終自分の上に落ちむとする新たな颯風を恐れ始めると、單住居を此處に置いてもよいでなく、それを永久の牢獄として與へて欲しいといふことを、非常な熱心で願はずにゐられなかつた。そして此の宣告が自分の手の中にあるものなら、もとより大喜びで然うすることを望んだに違ひない。此處を逐はれる危険よりは、此のまゝで餘生を終へる苦みの方が、幾百倍好ましかつたか知れぬ。

此の恐怖は長くは空想のまゝでゐなかつた。殆ど思ひがけなくサン・ビエール島を管轄するニドオの市長から書面が著いた。島を出て、同時に當國から立ち去

1765(54)

れとの命令を其の筋の内意を含んで傳へる書面であつた。讀んでゐる間は夢を見てゐるやうであつた。この命令ぐらゐ不自然なものがあらうか、無法なものがあらうか、豫想外なものがあらうか。何爲と言つて、私は今迄の杞憂をうち續く逆運に虐げられた想像の産み出したものとばかり信じてゐた。別に據り所があつて、明かに未然を見透したのだとは思つた事がなかつたからである。國王の默許を確めるためにはさまざまな手段も講じた。世間は安靜な住居を自分に容した。いろ／＼なベルヌ人にもごく深切な面倒を厭はない市長自身からの訪問、病弱な人間を逐ひ立てるにしては餘りに非道と思はれるやうなこの季候の寒さ、——それを思ふと、若しこの令狀に誤がないものとするれば、咄嗟に私を襲ふために、惡意ある人たちが故らにかういふ葡萄の收穫期で、議會の閉會中といふやうな時を狙つたのであらう。斯ういふ者は、強ち私のみのことではなかつた。

憤ろしさに嚇となつて、その儘島を飛び出した筈のところであつたが、さて何處を指して出て行かう？ 冬の始と言ひ、何といふ的も準備もなく、案内者は愚か馬車さへ調はぬに、何うすればよいと言ふのだ？ 原稿から所有品から、一切自分の

1765(54)

身の廻りの物を取り散かして置くまいとすれば、それだけの時間はかかる。令狀の表には、その整理を許すとも許さぬともしてない。折り重なる不幸は、元氣を殺して了つた。生れて始めて切迫の鞭の下に、性來の矜誇を折り曲げねばならぬことを感じた。そしてわが感情の反抗を思つてゐる暇もなく、頭を下げ、猶豫を願ふより外はないことになつた。前に令狀を寄越したグラッフェンリイド Grafenried 氏にその意味の辯明を頼んだ。彼の手紙では、あゝした令狀の謂はれなさをひどく責める意味が見えたから、彼の方に輕からぬ悔のあることは明白であつた。煩悶と敬重の心が到るところで讀まれるのが、私にはやさしい誘ひのやうに思はれて、何もかもこの人に打ち明けて了ふ氣になつた。で、打ち明けて言つた。此の手紙が彼等の眼を開けて、その殘忍を思はしめることは疑ないと思つた。縦し令狀の取消は出來ぬにしても、退去の準備も入ることであり、行く先も極めなければならぬから、この冬中ぐらゐ猶豫してくれるのが當然だ、少くもそれ位の事は肯き入れることと信じた。

返事を待つてゐる間にいろ／＼自分の境遇や、行末を考へ合せて見た。何方を

向いても重疊する困難が見える。餘りの惱ましさはたまらぬ程心を傷めた。この時の健康もまた殊に宜くなかつた。殆ど絶え入るばかりになつた。沮喪の果には幾分か残つてゐた心の餘裕も奪はれて、とてももう悲境を抜けて出ることにして、よい分別の涌き出る途もなくなつた。奈何いふ隠れ家に身を入れようと望んだところで、通れおぼせぬことは確かである。彼等の探るべき方法は二つもあるから、どちらかて必と遣られる。一つは秘密の手段で人民を煽ればよし、一つは理窟も何もなしに、唯暴力で私を逐へばそれまでである。だから、どれと言つて安全な逃げ場所は一つもない。已むなくば自分の力と氣候が許さぬまでも、自分で探しに出掛けるより爲方がない。わが擇んだすべての隠れ家から絶えず逐ひまくり／＼して、何時までも何時までも此の地上の漂浪人にして置かれるよりは、寧ろ無期囚人と宣告がして貰ひたいと、この頃に思ひ立つた此の考も無理でなからうと思ふ。考はすぐ此處へ来るから、第一回の手紙が行つて三日目にまた一通グラッフェンリイド氏へその事を書いて、高官達へ執成を頼んで見た。兩方に對するベルヌからの答書は、二十四時間を期してサンビエール島は勿論當共和國直轄間

轄各地方のいづれもから退去しろ、若し再び立ち入ることあらば重罪に問はるべきぞ、といふ最も嚴酷な苛烈な文句を列べた一通の令狀であつた。打ち顛はれるやうな瞬間である。この以後とても尙大なる苦悶はあつたけれども、是以上の當惑に出會したことはない。一番困つたのは、あの計畫を見限つて了はねばならぬことであつた。冬中島で暮したいと思つたも、全くこの計畫があつたからだ。災厄の最後に來た因業な物語をせねばならぬ時が來た。この落魄譚には或る不幸な民族をも含んでゐる。この民族の新興の銳氣は、他日スバルタや羅馬のそれを趁ふべき約束を持つたものであつた。

「民約論」の中に、コルシカ島民を新しい民族と見て、歐羅巴中で法律制定の爲に餘り多く煩はされなかつたのは此の島民許りとあるといふやうな事を書いた(第二卷第十章)。そして賢い立法者を有することが幸福であるならば、憐れいふ人民から得來らねばならぬと言つて、大なる希望をも寄せた。「民約論」はコルシカ島民の

1765(54)

或る部分に讀まれた。彼等を敬重したやうな書きぶりは、確かに或る人達を動かしたにちがひない。て丁度今其處へ新共和國が建てられようとする際であつたから首領たちは建國上の事に關して、私の意見を求める傾きを見せた。その地て第一流の門閥家であり、佛蘭西ロアヤアルイタリアン Royal-Italian 聯隊の大尉であつたブタフオコ Butafuoco 氏がその件で手紙を寄越したり、その民族史と現下の形勢を知るために要求した種々な書類を送つて來たりした。バオリイ Paoli 氏からもたび／＼書信があつた。斯ういふ大事業に關係することは自分の實力以上の事と思はぬては無論なかつたけれど、それに要する報告さへ手に這入れれば、這度偉大な美はしい事業を援けずに置けないやうな氣がした。この二人に返書を出したのは、斯ういふ考があつたからである。書信は私の出發する時まで續いた。

折ふし佛蘭西はコルシカへ軍隊を派遣したといふことと、ジエラと協約したといふことを聞き知つた。二つとも私に不安を與へた。未だその事て他の關係のあつたことも考へずに、將に征服せられむとする國民の爲に、立法權の設定といふやうな、續密な考慮を要する爲事に與るのは、目先の利かぬ滑稽だと思つた。自分

1765(54)

の不安をブタフオコ氏に包まず知らせると、彼は反つて斯ういふ事を言つて私に安心させようとした。彼の協約の中に、コルシカ島民に取つて不利な事なぞあれば、彼の如き善良な市民が、奈何して今のやうに佛蘭西の兵役になぞ服しよう。然ういふ言葉であつた。とにかくコルシカ島の新制度に對する彼の熱心と、バオリイとの提携は彼に對する疑惑を遠ざけて了つた。そして彼がをり／＼ヴェルサイユや、フオンテヌブロオに出掛けてゆくこと、シエラズル氏と接近してゐるといふ事を聞き知つた時には、唯彼が佛蘭西政府の眞の意向を洞看してゐるなといふことだけしか判断が出来なかつた。たゞその眞の意向の確認に就いては、私にその意味を汲ませるだけで、手紙などに公然書いて知らせることはしなかつた。

果して然うとすると、幾分か私の不安は除ける譯である。が、佛國兵の輸送された意味が全く分らぬ上に、ジエラに對する自由を安固ならしめるといふだけなら、コルシカ島民の力だけで十分な處へ、わざ／＼出兵してその自由を保護するといふ譯も判断に苦む次第だ。て全くの安心に落ち著くことも出来ず、また那の事件が自分を弄る悪作劇では決してないといふ確かな證據を握るまでは、眞面目に相

談に與るといふことも得爲なかつた。是非一度ブタフオコ氏に面會がしたいと思つた。然うしないと、此方て望む意志の疏通を圖る途がなかつたからである。彼もそれを望む旨を傳へて來た。私はその機會を待ちに待つてゐた。彼の方に果してその意があつたか奈何か、それは解らぬ。けれど、それがあつたにしても、私の災難は、それを利用することを許さなかつたであらう。

提案に就いて考へて行くほど、又書類を調べ出すほど、ますます其處へ出掛けて直接に研究してみる必要が起つて來た。——新政を施すべき人民、彼等の住居する土地、制度と人民を調攝するに必要なあらゆる條件。遠方にゐては到底著手の便宜が得られぬといふことを日々深く感じて來た。ブタフオコ氏にこの意味を書いてやつた。彼自身にもその必要を感じてゐた。で私はたしかにコルシカへ渡つて行くといふ決心はしないまでも、そこへ旅行する手續だけは餘程考へた。かつて此の島で、マイエボア Maillebois 氏の下で働いたダヌチエ氏こそ事情に通じてゐるであらうと思つて、自分の考を話して見た。彼は手の及ぶだけ私の考を止めようとした。彼の描いた島民と、その國土とは、驚くほど醜い色に出た。彼等と一

1765(54)

1765(54)

緒に住んで見ようといふ氣がそのために大かた冷めた。

しかしモチエエの迫害は、奈何しても瑞西を去らねばならぬことを思はしめた。その時にコルシカ行きのこと、復希望の芽を指して、何處へ行つても得られぬ平安が、その島人の間にならあるだらうと思つた。其處へ行くには唯一つ容易ならぬことがある。活動の生活がそれで、始終自分でも不適當と思ひ、嫌がつてばかりゐたその生活に、わざ／＼衝突りに行くやうなものであつた。寂しい處で唯一人暇にあかして物を考へるのが自分の性だから、とても人中へ出て、論を戦はしたり、荒い爲事をしたり、問題を捌くといふやうな事は出來ぬ。第一の才を授けた自然は、第二のものを授けることを私に拒んだ。しかも私は公共の事業に關係はせずとも、島へ行けばすぐ人民の註文を容れなければならぬまい、土地の首領たちとすれば會談もしなければならぬまい。旅行の目的その物が隠れ家を求めるのでなく、住民の中から事業上に必要な手懸りを求めるといふことになつてゐた。もう自分の身は自分の持ち物でなくなつて、最も不適當な、そして最も嫌ひな世の騷擾に携はりながら、興味に反した生活を導びき、損な位置にばかり立たねばならぬこと

は明かである。其處へ自分が顔を出せば、著書から得た尊敬の念に累を來たし、住民に對するわが名譽を墜すことはすぐ想像される。また彼等から得た信用を失ふことも同様であるが、これは彼我雙方の損害となるばかりである。この信用を失へば、彼等から期待されてゐる爲事をうまく遣り遂げることはまづむづかしい。斯うして自分の本領を出離れて行くといふことの爲に、彼等には無用の人間となり、わが爲には唯不幸を招くより外はなかつた。

到る處暴れすさぶ颯風に痛め傷つけられ、過ぎし幾年月の漂浪と迫害に疲れ惱んだ私には、唯もういら／＼した休息の要求のみがあつた。それをも獸の如き敵人たちは、慰み半分私から引つ奪つてにや／＼笑つてゐた。渴望に堪へなかつた、此の心行くばかりな遊惰の境、身も心も撫て摩られるやうな静寂の地を、今までよりも一倍鋭く慕ひ嘆いた。愛と情の幻影から醒めかゝつて來た心は、無上の慶福をそれ以外には求め得られぬものにしてゐた。今しも試みに入らむとする彼の事業と、身を投ぜむとする喧擾の生活と、——それをうち眺める私の眼には、たゞ恐怖ならでは映じなかつた。目的とする事業の壯烈と美と有用とのために、元氣は

1765(54)

引き立てられぬてはないが、それに伴ふあらゆる困難に打ち勝つことの望みなさに、その元氣も立ち消える外なかつた。寂しい沈吟の生活に獨り居るなら、二十年も苦にはならぬ。成功的なものなしに人と事業の間に介まつて、慌忙しい生活を送るのは、半年も辛抱は出来なかつた。

種々な困難を一掃するために、一つの手段を思ひつけた。何處へ逃げ隠れても、執念深い敵人の暗黙な妨げは、自分を蒐り立てずにはゐないから、餘生のための休息は、コルシカ島でなければ得られぬやうに思つた。て私はブタフオコ氏の案内で、都合出來次第その島へ渡ること決めて了つた。しかしその目的は他くまでも静穩な生活といふ點にあるから、少くも表向きは立法の事にも與らないで、たゞ地方人の好意に酬いるために、コルシカ島の歴史を其處にゐて書くだけのことはする。尤も成功の見込ても立てば、島民の利益になるやうに、必要な制度上の材料を窺と取り集めて見るぐらゐの事なら、場合によつてしないでもない。然う言つた振り合て、別に契約といふ形式は取らずに、詰り島民を利益するやうな爲事を黙つて心まかせて考へさせて欲しいと思つたのである。親み深い寂莫境に邪魔を入

1765(54)

れたり、苦痛に堪へない、適才でもないやうな生活の方へ引つ張り出すやうなことは、もとより禁じて貰ひたいのであつた。

しかしよく考へて見ると、容易に出来さうな旅行でなかつた。ダスチエ氏の話に據れば、自分で持つて行く物の外、生活に入用なごく普通な物すら、其處では手に入らぬらしい。襯衣も、衣物も、皿小鉢、臺所道具、紙類、書物まで、すべてこちらから提げて行かねばならぬ。テレエズと同道で其處へ移住するに、亞爾伯を越えねばならぬ。二百リ、ウ(約計二百里)の長旅を、重い行李を引き摺り／＼して行かねばならぬ。主權の異なる種々な國々を通過せねばならぬ。歐羅巴各國の態度から考へ、自分のこれ迄の發落から考へると、奈何しても行く先毎で、障礙に出會すことは覺悟してゐなければならぬ。國々の主權者はいづれも何か新たな侮辱を被せ、人權人道を私の前で蹂躪して、それを手柄にしようとする有様が目に見えるやうである。莫大の費用、疲勞、危険、それらを豫め考へ合して、一切の困難に對する決心を極めることが必要であつた。齡の寄りさまに、獨法師になつて、多くの友から依頼なく離れて行くといふこと、ダスチエ氏の言ふやうな、あゝいふ、悍惡な蠻民の蔭に

憩ふといふこと、それを思ふと足を擧げる前にまづいろ／＼な考に耽らずにゐられなかつた。ブタフオコ氏も希望するといふ會見が是非して見たくて堪らない。その結果でいづれとも自分の決心がつくものと思つた。

斯う氣分がぐらつてゐた時に、丁度モチエエの迫害が始まつて、退去を餘儀なくさせられた。私に長旅行の準備は無かつた。コルシカへなどは尙更であつた。ブタフオコ氏からの消息を待ち焦れつゝ、サン・ビエール島へ隠れたが、すると前に話しかけたとほり、冬の初に到頭この島も逐ひ立てられるやうになつたのである。雪で包まれた亞爾伯の連山を眺めると、それを越えての漂泊は、とても思ひもよらぬ事だといふ氣になつて了ふ。まして彼等の迫るやうに、然う早急にと言つては尙望みがたい。那の令狀に書いてあるやうな亂暴な事は、まるで實行の出来な相談と謂つてよい。水の中に閉ぢられた寂しい島の奥から、令狀の示す通りたつた二十四時間内に出發の準備を濟まし、舟と車を捜し出して、島を出て領地を立ち

1765(54)

退いて了ふといふことは翼があつたからとて出来る道理がない。ニドオの市長へその事を返事に書いて出した。と同時に、この不義の國を去ることを急いだ。斯ういふ譯から、懐愛しい折角の計畫も抛棄らねばならぬことになつた。そして、處分の變更を願ふだけの勇氣すら無くなつて了つた。て爲方なしに、テレエズは冬中島に残して家財や書物の番をさせ、原稿類はベイルウの手に預ける事にして、自分獨りだけキイス卿の招きを頼りに、伯林へ旅立つことに極めた。それから急に支度にかゝつて、翌朝すぐ島を出て、正午前にはもうピアンヌに来て了つた。が、一つの出来事は、この旅行を止めずに置かなかつた。その話をしよう。

— 730 —

島を逐ふ令狀が下つたといふ噂が廣がると、附近から見舞の人の大浪が寄せて来た。ベルヌ人は憎々しいほど嘘の面を被つて、くどくどとあせつかいな慰めの言葉を振り蒔きにやつて来た。知つた風に何を言ふかと思つてゐると、迫害者等は上院の閉院中を覗つて、こんな令狀を發したのだ。そのために二百の議員達に、

1765(54)

誰一人憤激してゐない者はない、などと云つた。斯ういふ人達の中に、ピアンヌ市から出て来たのもあつた。ピアンヌ市は、ベルヌ州内の小さい自由市であつた。その中で年若なウイルドレメット Wildremet と云ふのは、第一流の家柄で、人望も市中一番高い人であつた。その人が同市民の總代といふ格で、その市に住居を定めるやうにといふ強つての願意を齎した。市民は非常な熱心で私を迎へたがつてゐるといふこと、數度の迫害を私から忘れさせる事は、彼等の歡びであり、義務でもあるといふこと、ベルヌからは何の害を受ける憂もないといふこと、ピアンヌは自由市だから、何處の法律にも左右されないと云ふこと、何處から何と言つて来ても私の不利益になる依頼なら、市民は一致して斥ける決心を持つてゐるといふこと、——それを私に保證した。

自分の勧めだけでは這箇が動かぬと知つたウイルドレメットは、更に多くの加勢を呼んで来た。ピアンヌ市やその附近、ベルヌからまでも人が集まつた。前にちよつと名前の出たキルヒベルゲルも来た。これは私が瑞西に退いてから取り入つた人で、私が興味を惹かれたのは、彼の才と人物に依つてであつた。けれど、その中

— 731 —

1765(54)

て餘り待ち受けなかつたかはりに、一番重味ある勸告をして來たのは佛蘭西大使館書記官のバルテエ Jartius 氏であつた。この人もウイルドレットと一緒に來て、強く勸告を聽くと迫つたが表に現はれた熱の籠つたやさしい同情に尠からず驚かされた。今まではバルテエといふ人を全く知らなかつたが、一生懸命に好意を見せるところから考へて、それ程ビアンヌに引き留めようとするのは、よく／＼思ひ込んで居るのだと知つた。彼はその市と市の住民とを溢れるほど稱美した。其處の人達のことを私の前で、彼自身の擁護者だの、養ひ親だのと繰り返し／＼言つて、自分がどれ程深い關係を持つた人であるかといふことを見せた。

バルテエが斯ういふ出方であつたので、自分の考は攪亂された。瑞西で受けたすべての迫害を、暗い蔭で操つてゐたのはシオズウル氏であらうといふことを私は常に疑つてゐた。ジッネエ駐在の佛國辨理公使や、ソルウル駐劄大使の舉動はます／＼この疑念を固めるものであつた。ベルヌ、ジッネエ、ニウシアテルなどを私の上に落ちた事件には、始終佛蘭西といふものが影で働いたと感附いた。その佛蘭西で有力な敵は、シオズウル公の外にあるとも思はなかつた。では今バルテ

1765(54)

エの見舞と、優しく同情するらしい好意に向つては、奈何考へてよいのであらうか。身に餘る程の不幸も、未だ全く私に固有な信賴の心を打ち壊して了はなかつた。多くの經驗も、愛嬌の下にはいつも必と陷阱があるものだといふことを、未だ確める處まで行つてゐなかつた。私はバルテエの好意の理由を驚きの目で探つた。彼が然うした好意を見せるのは、彼自身の心から來たこととは、愚かな私にもどうしても信じられなかつた。其の好意の中には、外面を衒ふ意味が見えた。何か隠れた魂膽のあることを思はせるやうな、一種の矯飾もあつた。斯ういふ場合に臨んだときに、いつでも私の心を滾え立たせたやうな、あの大度な勇氣が、こんな片々とした小僧達に見出さうといふことは思ひも寄らなかつた。

自分は嘗てリクサンブウル公の邸で、少しばかりポオトヴァル Beanteville 士爵を知つてゐた。彼は幾分の好意を私に見せた。大使館へ赴任して後も、尙私の事を心に懸けて、ソルウルへ遊びに出て來ぬかといふやうな案内さへ、受け取つたことがある。案内には應じなかつたけれど、相當の位置に居て、これ程深切な人を餘り多く知らなかつたので、ひどく感激させられた。て私は、ジッネエ事件に關しての

第十二卷
 自分の指令には遵ふべき責任を持つたボットヴィル氏が、有繋に私の不幸を見るに見兼ねて、その保護の下で静かな生活を許す爲に、このビアンヌの住家を用意するやう、内密に取計らつてくれたのでないか知らぬといふ推測をして見た。その配慮には動かされたけれど、別にそれに縋らうといふ氣も起らなかつた。一方で、伯林へと思ふ心も固まり切つてゐたから、元帥と其處で顔を合す瞬間をばかり待ち焦れた。その時の私の心には、眞の安息と不斷の幸福の見出される場處は、元帥の傍ならてはないと極めてゐたのであつた。

島から出て来る時には、キルヒベルグがビアンヌまで隨いて來た。ビアンヌへ著いて見ると、ウィルドレメットはじめその市の人達は私が舟から出るのを待ち受けた。皆で一緒に料理屋へ上つて晝飯を喰つた。最初に私の心配したのは、明日の朝すぐ發つて行く積りて驛馬車を支度させることであつた。食事中紳士連は、また口を揃へて私を引き留めようとすることを怠らなかつた。萬事を呑み込み顔の是非々々といふ勸めには、有繋決心を固めてゐた私も動かされ氣味になつてもとより人の情を斥け得ぬところから、危い處まで押されて行つた。それを見て

取つた彼等は一層力を入れ入れして、到頭私を捻ぢ伏せて了つた。私は爲方なしにその言葉に従つて、少くも來春までビアンヌで世話になることにした。

と、ウィルドレメットはせつせと宿を捜しに廻つたが、纏て掘りだし物でもしたといふ風に、三階目の奥まつた汚らしい小さな部屋を見附けて誇り顔でゐた。下を瞰おろすと内庭にはいゝものが列んでゐる。ひとつと鼻を衝くやうな鞣革工が乾した羚羊の皮がそれであつた。宿の亭主は柄の小さい、下卑た顔立の、風體の悪さうな男であつた。翌日聞いてみて、これこそ女狂ひの博奕打で、この界限で人でないやうに言はれてゐる男と知れた。其男には妻も子も傭人もなかつた。そして私は寂しい部屋の中に可嘆しい囚はれ人となつて類なき快い國にゐながら、日を経ぬ内に鬱憂性で死んで了ひさうな有様でゐた。市の人達がいきり切つて迎へたがつてゐるといふやうな事をいろ／＼聞いてゐたのに、どこの街を歩いて見ても、優しい素振、丁寧な挨拶那樣ものは、まるで影もないにひどく惘れて了つた。でももう此處に住まふことに量見を極めてゐると、すぐ次の日から早や市中では私の身に就いて可怖しい紛擾が始まつたといふことであつた。それが自分の眼にも

見えて、どうしても然うと感づかれた。人々はいきせきと、深切にも斯う知らせて来た。——明日になると、それは苛酷な令狀が出て、本州、ビアンヌの市を即時に退去しろと傳へて来る筈だ、といふ。私には相談する人もなかつた。最初私を引き留めた手合は、皆何處かへ散亂つて了つた。ウィルドレメットも掻き消えた。バルテエについても何も聞かなかつた。それとともに、彼の勸告に従へば、多くの擁護者や、養ひ親からどの位の恩恵が来るか知れぬと思つてゐたことも、何處へか行つて了つた。ところがベルヌのヴォトラヴェ、Henri Van Thuyensといふ人が、郊外によい家を持つてゐるといふので、貸さうと言つて来た。其の言葉に、其處へ這入つてゐれば、石で擲り殺されるやうな心配はないとあつた。それくらゐの事は、かういふ懇ろな人民の中で、長く一緒に住まはせて置く誘ひとしては、餘りに淺抄であつた。

1765(54)

それにしてもかうして遲疑してゐる中に、三日といふものが何時の間にか経つて了つた。何れの地方からも二十四時間内に退去しろとあるベルヌの令狀に對

1765(54)

して大へんな手間取り方になつた。彼等の冷酷を思ふと、出て行く途中の爲向けに、甚麽事があるかを恐れずにゐられなかつたが、すると丁度其處へニドオの市長が折よくも来て、當惑を除けてくれた。上局の處置の酷に失した事をひどく責めた人だから、寛大なその心から、那の處分には自分が無關係だといふことを、或る方法で見せて置く必要があると思つて、大膽にも管區からこのビアンヌまで出て来たのであつた。著いたのが私の發たうとする前夜であつた。もとより微行なぞでなく、堂々と公式に馬車を駈り、隨行を伴るまでにして来た。そして私へ、任意に且不安なしにベルヌ州が通過出来るやう、わが名を署した旅券を呉れた。旅券も旅券であつたが、何よりも訪問が嬉しかつた。私にてなくてもよい、外の人への訪問でも、こんな時なら私は同じくらゐ喜んであらう。道ならぬ虐げに遭つた弱い者を救はむために、時機よく進んで、勇ある振舞を見せられる程、鋭く私に感銘させる事はなかつた。

やう／＼の事で一臺の驛馬車が見附かつたから、翌くる日の晩方に殺伐なこの地を發つた。何か言ひに派遣委員のやつて来る前であつた。テレエズと再び顔

を合すことすら出来ずに了つた。テレエズには、前もつて、若し自分がピアンヌに滞在する事になれば出て来てよいと知らせて置いたのである。それに今又新たな難に遭つたことを、一言手紙に書いて取り消してやる暇もない位であつた。

1765(54)

伯林へと志した私が、奈何して實際は英吉利へ渡る事になつたか。この私を片付けて了ひたい氣の二人の婦人が、いろいろ算段の末に自分達の勢力の薄い瑞西から私を逐ひ拂つて、到頭自分達の友人譯者云。デイヴィッド・ヒウムを指すに渡して了ふやうになつた手續は奈何であつたか。懺悔録の續篇でも出る折があつたら、然ういふことは皆解つて来る。

— 735 —

此の回想記をエグモン Egmont 伯夫妻、ピニテルリ Pignatelli 公、メエム Meunier 侯夫人、ジャイニエエ Jaiques 侯などに讀み聞かせた。その時に斯う私は附け加へた。

私は眞を話しました。若しも私の言つたのと違つた事をお聴きだつたら、それに甚麼立派な證據があらうと皆嘘です。虚構です。私の息のある間に、直接私に就いて實否を明かにする氣がなかつたら、正義を愛しない人眞を愛しない人なつてせう。大膽に忌憚なく申しますが、誰に構はず、——私の書いた物を讀まなくつても、自身の眼で私の性質、人物、道徳、癖向、趣味、習慣などを調べて、それで私を奸曲な人間と思へるなら、その人こそ絞首臺に上すべきものです。

斯うして私の朗讀も終つた。皆黙つてゐた。エグモン夫人だけは感激したと見えて、目に立つ程細かに顛へた。それも程なくわれに還つて、外の人達と同様の沈黙に落ちた。それだけが私の朗讀と主張から得た果實であつた。

1765(54)

— 739 —

(譯者云。「懺悔錄」全篇はこれ終を告げた。補遺の積りて書いたものが二つある。「對話篇、一名ジャン・ジャックの審判者ルッソ Dialogues, ou Rousseau juge de Jean-Jacques」は一七七五—七六六年の間に成り「靜思錄 Réveries du promeneur solitaire」は一七七七—七八年に互つて出來た。文學史家が「懺悔錄」と併せて自傳三部小説といふのがそれである。紙數は「懺悔錄」と比べて幾らにも當らないものであるが、其等をまて譯して附け加へることは、書物の厚さが許さぬ。西洋でも「懺悔錄」だけはアンデスバシナアブルの書物と値附けられてゐるにも關らず、他の二書まで讀み及ぼす人は稀である。譯者の爲事もそこまてに至り得るか奈何かは豫期しがたい。ともかく、茲にルッソが終焉までの略記を添へて置く。

二箇月にも満たぬサン・ピエール島の生活は、ルッソには言ひ知らぬ歡喜であつた。彼の生涯に定めた假の宿の數多あつた中に、此島程氣に叶つたところはなといふことが「靜思錄」の中に自白してある。その島の敘述と描寫とは「靜思錄」の第

五篇に、有名な文章を成して出て居る。此島で彼は、強制的な無期禁錮をと望んだけれど、それが背かれなかつたので、いろ／＼に考へた。維因の方へといふ考もあつた。その爲にはウィルテムベルヒ公の盡力もあつた。また一方では、昔の思ひ出に残つたウドトオ夫人がノルマンディへ、サンランベールはロオトリンゲンへ、おの／＼彼を迎へようとした。自分ではまた、ボツダムへとも考へた。ライ書店の主人は和蘭へと勸めて來た。その内頭伯林へ行くことになり、ピアンヌからバゼルを経てストラズブルグまで來たのが十一月の初であつた。此處で彼は尋常ならぬ好遇に咽んだが、北國の寒氣が嘸つらからうなぞと心配で堪らず、伯林行きは一まづ見切つて、もう一度また巴里へ歸つて來た。

巴里へ來たのはヒュームの招きに甘へて英吉利へ渡らうとする途すがらであつた。一七六五年十二月十六日に巴里へ著いて、コンチ公の保護を得た。英吉利の保護者ヒュームは、折から巴里に來てゐたので、連れ立つて夜船でカレハ Calais からドゥヴァア Doverまで十二時間の海を渡つた。時は翌年の一月上旬であつた。凍て附くやうな嚴冬の海上に、ヒュームは病氣を起して呻いてゐる。船頭等も手足を麻痺

譯者補遺
かしてがたがた願へてゐる。にも拘らずルソオばかりは大機嫌で、只一人甲板の上を跳び廻つた。

倫敦に著いたのは一月十三日であつた。ヒウムの前觸も大袈裟であつたが、此處では非常な人氣を揚げて、劇場などでも國王、王后の臨場以上に盛んなどよみを立てさせた。「エミール」の著者の顔を見るといふことが、時の英吉利の大切な一つの希望であつた。未だ年若なジョージ三世は、世界の天才が自分の國に隠れ家を求めて來たといふので、好奇的な喜びを現して、コンウェイ Conway の語のまゝに、ルソオに年金を給することにしたが、それは例の主義から直ぐ彼に断られた。

ヒウムは彼の身について、ごく細かい世話まで行き届いてした。上流の社交界へも無論紹介することを忘れなかつた。そしてバーク Burke だの、ジョンソン Johnson だのといふえら者もゐたけれど、一般は彼を愛して罷まなかつた。けれども當人は何處までも粗朴であつて、羣集には動かされなかつた。名優ギャリック Garrick の好意で、特別の便宜を圖つてくれたから芝居に行かうと言つて、ヒウムが或る日彼を誘ひに來た。と、ルソオは可愛い犬を獨法師で家へほうつては置けぬといふこ

とを話して、
「誰か留守に來て扉を開けると、私を捜しに表へ飛び出して、迷ひ子になるのが可哀さうだから。」

と附け足した。ヒウムは犬を室へ閉ぢ籠めて、鍵は持つて出たら可いだらうと教へて階段を降りて行くと、犬はけたましく吠え出した。ルソオはすぐ後戻りをして、これだから御免蒙りたいのだ、と斷乎言ひ切る。ヒウムは兩手で彼を捕へて、「君の爲に場所を抜かせようと言つて、ギャリック君はわざ／＼外の連中を斷つて了つたのだぜ。兩陛下が向うても待ちかねなのだぜ。宅の犬に差しつかへがあつて出られませんかやあ、滑稽にもならないぢやないか。」

と言つて、遮二無二彼をしよびいて行つた。
する内、彼は倫敦の生活にも飽きた。水分の多い無駄話の都會、フリヴォールな人の唯意味なしにどひ寄る都會として倫敦を横目にじろりと眺めた。數週間チック Chiswick の農家に厄介になつてゐたが、やはりヒウムの世話で、スタッフフォード Stafford のウットンで、ダヴェンボートといふ人の別莊を借りることにして、三月の末頃

テレエズと一緒に引き移つた。後に英吉利でその家を Old Ross-hall と言つた。「懺悔録」の前篇は此家で書いたのであつた。

ところが二箇月ばかりして、ヒウムとの間に諍ひが始まつた。二人の氣質が互ひに別な方向へ乾反つて行つたのである。その上にホレスウルポウルが普魯士王フリードリヒの名を矯つて偽手紙を配布したのを、それにもヒウムが少からず關係したといふやうな疑ひも介まつた。これが世間一般をもかなり激しい度合迄騒がせて、倫敦、巴里での種々な出版物を呼び出した。ウルポウル、ボズウェル、ヒューム、ヒウムなどは互ひの立場を固めた。ジョージ王までも傍から見ても喧嘩をやじつた。

でもその間にウァトンの自然と交つて、幾らかの平和が見出せぬでもなかつた。外出は大抵自分一人てか、さなくば伴侶にはポオトランド Portland 公爵の若夫人があつた。目的は多く植物殊に蘇苔の採集であつた。かやうにして原始事物に對する興味を恣まにし、得意な幻想に入ることより外には、彼の年齢と境遇に可應しい歡樂はないと自白した。

1766(55)

1766(55)

さういふ満足も長くなかつた。「懺悔録」の開卷のページを書いた時の彼は情熱の最高調にあつたが、それも次第に冷めかゝり、雪深く鎖したロス・ホオルは、爐邊にばかり彼の足を吸ひ附けて、自然の兒にだゞをこねさせる外はなかつた。臺所ではテレエズが女どもと、身分も何も忘れたやうな口論ばかりするので、彼の頭はますます懊惱して來た。彼の邪氣深さは、英國民全體が腹を合して彼を陥れようとしてゐるのだと思はせた。往復の信書は途中で皆沒收されて了ふのだと疑はせた。秘密探偵が影身に跟いてゐるやうな氣にさせた。然ういふ妄想に追はれて、偶と變な氣になつたと見えて、金も原稿も何もうち棄て、その儘家出して了つた。行つた先が二週間も分らずにゐると、リンカンシャー Lincolnshire のスポオルデング Spalding 町から彼の手紙がダヴェンポトへ著いた。寛大なダヴェンポトは、すぐ迎ひの者をスポオルデングへ出したが、ルッソはまた何處へか隠れた。地理も知らぬ途の何處を奈何歩いて來てか、五月十八日といふ日にはドウヴァに居た。コンウエに宛てて自棄的に書いた置き手紙をして、それぎり海峡を南へ渡つて、また佛蘭西へ這入つた。

1767(56)-1768(57)

大ミラボオ Mirabeau の父のミラボオ侯から、その前にルッソは手紙を貰つてゐた。英吉利を抜けて出てカレエに著くと、知らせに由つてすぐミラボオは、彼をフルウリイ・スウ・ムウドン Fleury-sous-Mendon に迎へ取つた。が、二三週間で纏て其處を出て、以前モンモランシイでの知己であつたコンテ公の厄介になつた。そのため、に名前をルヌウ Renou と改めて、ジゾオルの附近にあるトリイに落ちついた。それは巴里から十五リウ離れて、別荘のあるところであつた。一七六七年の六月から、六八年の六月まで、丁度一年間此處にゐて、懺悔録の後篇の筆を把つた。その間も、心はたえず可憐しい状態にあつた。周囲は陥穽で繞らされてゐるといふやうなことを思つた。ペンを持つ重味が、大鐵鎖を扛げるにも均しいといふやうな感じがした。植物に對する興味だけは、以前にも増して高まつた。

ウ・トンを逃げ出したやうな調子で、このトリイもまた後足に掛けた。舊い記憶の強さで、シンペリイといふことが彼の心に浮んで來たので、その方へと指して行つた。それも途中のグルノオブルまでで行き止まつて、それからブルゴアン Bourgoin に、モンカン Monguin と流れながれした。どちらも一年内外の滯留であつた。

1769(58)

ブルゴアンでは證人を立てて、テレエズと結婚の式を始めて擧げた。沼澤の多いブルゴアンの空氣や水に健康がした、か損はれたけれど、モンカンでは草花を蒐めたり、小禽の幽音に樂まされて、懺悔録がやうやくに脱稿した。しかし例の邪推から、自分の敵はペン持つ妨げをする積りて、インキを匿して了つたといふ疑を起し、東洋に行はれる普通の墨を捜し出して使つた。

可憐しさはそれだけでなかつた。妻のテレエズの心の上に、其の後別狀はなかつたであらうか。幸福の日に於ける自分のものとしてのテレエズでなくなつたといふやうな述懐が、前に一七六二年の處に出たことがあつた。その頃から彼女の遠ざかりは、次第に目立つて見えて來た。それから七年目の六九年に、離別の談が彼女の口から訴へられた。父親をあさましい死に態に見棄てて置いたといふことが、第一の心の損所になつた。生みの子を暗いところへ投げ込んだことについては、時々むづかる反逆的な母愛が、胸の隅々を引き掻いた。多きを女子に望まない主義のルッソは、口でこそ言はぬが、明かな意識こそ持たぬが、大抵の場合、肉としての女のみを見ることが多かつた。妻のテレエズに於いて殊に然うであつ

譯者補遺
た。机に凭れてゐれば、一月でも妻に口を利くといふことがなかつた。それはやがて本能の女の一番堪へられぬ點であつた。
妻の口から離別を宣告された老い頼れたルソオは、長い年間の同棲の迹を憶んで、痛い涙の涸れくゝに目角から滲み出るまでの悲哀を感じた。次のやうな手紙が妻の方へ行つた。

「最愛の者よ。今日まで二十六年が間、われは御許が外にわが幸を見出でむともせず、又御許の幸を希ふ外はわが務にてあらず候ひき。また頃日擧げし結婚式によりて見るも、御許が名と幸とは、兩つながらわが慕ひし物なることを御承知ありしなるべくと存じ候。可傷しきは佗居に伴るゝ成功の抄々しからぬことにて候。わが深切心を御許に懸けまゐらす嬉しさには引きかへて、そを身に被給ふ御許の何気なきも心苦しき限りに候。申さずとも、御許が身に具はりたる恥を重んじ義を尙ぶ志は、ゆめ渝り給ふことあるまじとは存じ候へども、昔兩人が仲に往き通ひし、優しさ懐愛しさの感情ばかりは、今は唯われ等が方にのみ残れる

やうの思ひ致し候。最愛の友よ。われと同居するに何の樂みをも得見出でずなりし御許は、愛情なき數分時をわれと費すにも尋常ならぬ惱みを覺え給ふべく候。われだに無くば、如何ばかり御許の氣も暢びやかにおはすべき。他は多く申さずとも候。友の過を寛容するは義務なるべきに依り、御許の過を見遁がすは即てわが義務と存じ候。御許に於きてもまた其の心得はあるべく候。われと居るをば幸福と思し給はむには、それに勝る満足は此の方には御座なきに、然は見え給はぬばかりにこそ、わが心は痛み候へ。御許の幸福を進めまゐらす途外に有らば、口には出さず直ちにそを取りたるべく候。されどそは思ひも寄らぬ儀に候。聊かだにも御許が爲と存じ寄りし事は、何につけ試みざりし事は、これ無く候ひき。この筆を把り候ふ間にも、不幸災難に追ひ立てらるゝわれ等事は、唯御許と二人睦ましく餘命を經てむと思ふ眞情の外に、何の望みもこれなく候。御存知の通りなるわが運命は、誰も誠とえ思はねば、口にも筆にも盡されぬばかりに候。わが最愛の者よ。われ等は唯一つの慰藉の外を知らず。しかもそは殊に嬉しき極みなるものにて候ひき。——何ぞと申せば、御許が胸の中にわが心をみなながら注ぎ入るゝ